写真集

港北ニュータウン



むかし・いま、そして未来へ…

写真集



感謝をこめて「中西雅子」といいますがに、金子保――――――――――――――――――――――――――――――――――――	5 4 2
空から見た地域の移り変わり一	7
昭和48年撮影の地域別空中写真―――8	
茅ケ崎・中川・大棚地区/牛久保地区	北山田地区/東山田地区/
幹線道路、新横浜元石川線の推移―――― 在田地区/都田地区/大熊・折本地区	新吉田地区
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
発掘調査で明らかになった古代社会――――――――――――――――――――――――――――――――――――	24
中世の城館、茅ケ崎城―――28	
石塔·石仏———29	
講·富士塚————30	
高札————————————————————————————————————	
まぼろしの茅ケ崎八景―――32	
開発前の景観―――33	
公的機関———34	
道路・交通・運搬―――36	
川・橋・堰―――38	
消防———40	
農業———41	
家屋————56	
人間模様———61	

昭和46(1971)年

昭和47(1972)年

市民参加による大規模な開発と都市の創造 土地区画整理事業竣工-住宅建設------22 鉄道建設 進む道路建設 造成工事スター 開発へ動き出す i 92 100 123 91 135

未来へ: 未来への架け橋、子どもたち 躍動する高校生 中川中学校/都田中学校/川和中学校/茅ケ崎中学校/荏田南中学校/南山田小学校/都筑小学校/つづきの丘小学校/東山田小学校/中川西小学校/川和東小学校/才ケ崎台小学校/北山田小学校/都田西小学校/荏田南小学校/荏田東第一小学校/茅ケ崎小学校/ 学校設立の流れから/中川小学校/都田小学校/川和小学校/木への架け橋、子どもたち―――13 川和高等学校/荏田高等学校/新栄高等学校 中川西中学校 折本小学校/勝田小学校/山田小学校/荏田小学校/すみれが丘小学校/

都市農業の継承 新しい街の景観 市民交流と文化活動-都市農業の継承―――73 都筑の森芸術劇場/菊花展/ふれあい朝市 港北ニュータウンまつり、 /公園·緑道

、区民まつり/地区センター

の市民活動

新しい故郷への思い 継承される理念 174 175

編集後記

写真提供者/協力機関・団体/参考資料/写真集刊行委員会/編集委員

昭和55(1980)年4月 荏田高校が地区内に新校舎設立 港北ニュータウン生活対策協会設立 伝承行事 寺院

村祭りと行事

72

83

昭和57(1982)年7月 新栄高校開校

昭和59(1984)年3月

昭和61(1986)年 昭和60(1985)年9月

昭和62(1987)年2月

昭和63(1988)年4月

平成元(1989)年2月

(株) 港北都市開発センター設立

港北ニュ タウン関連年表

昭和42(1966)年7月 昭和54(1979)年3月 昭和53(1978)年2月 昭和52(1977)年1月 昭和51(1976)年1月 昭和48(1973)年5月 昭和50(1975)年1月 昭和49(1974)年7月 昭和43(1968)年7月 昭和4(1969)年5月 昭和40(1965)年2月 9月 12月 10月 12月 8月 埋藏文化 を改組) 「昭和62年度概成スケジュール」 第一地区、第一回仮換地指定 早渕川、 先行造成地への直接移転開始 第一地区仮換地の供覧 第二地区仮換地の供覧 主要遺跡の調査完了 第二地区柚木先行造成地に集落全部移転 先行造成地への仮設住宅移転開始 港北ニュータウン事業推進連絡協議会発足(開発対策協議会 「特別な用地」の申出調査説明会実施 工事遅延について地元住民の抗議行動 建設大臣、施行規程・事業計画を認可。 横浜市、基本計画を決定 地元説明開始 基本計画(案)[市]、事業計画(案)・施行規程(案)[公団] 新羽大熊農業専用地区竣工 港北ニュータウン建設研究会発足 広報紙「港北ニュータウン」創刊 公団、港北開発事務所設置(緑区中山町) 建設大臣、公団へ土地区画整理事業の特許 土地区画整理事業区域を都市計画決定。公団、 横浜市、港北ニュータウン建設事務所開設(港北区菊名町) 港北ニュータウン開発対策協議会発足 第二地区、第一回仮換地指定 土地区画整理審議会発足 横浜市の六大事業の一つとして港北ニュータウン計画を発表 大熊川 財発掘調査に関する覚書が締結され、 タウン建設事務所、地区内へ移転(港北区勝田町) 河川改修完了 地元説明 推進協で了解 用地取得に着手 、本調査に着手

昭和56(1981)年2月 9月 折本農業専用地区土地基盤整備工事完了土地利用計画に合わせた用途地域地区の変更指定 市営地下鉄3号線新横浜~あざみ野間に事業免許がお 大塚・歳勝土遺跡が国指定史跡になる 第一回港北ニュータウンまつり開催 環境事業局都筑工場稼働、余熱利用施設「都筑ふれあいの 宅地分譲開始 在田南小学校·荏田南中学校·荏田東第一小学校開校 台ハイツ、みずきが丘、 公的集合住宅第一号入居開始(かしの木台ハイツ、しいの木 第二地区街びらき 新横浜元石川線開通 牛久保10工区建築協定締結 茅ケ崎中学校開校 港北ニュータウン生活対策協会、財団法人の登録 川和中学校が地区内に新校舎設立 第四回港北ニュータウンまつり「丘のまつり」開催 大熊東山田線開通 巨大迷路「ランズボロ 第三回港北ニュータウンまつり開催 鴨池公園開園 高速鉄道3号線着工 第二回港北ニュータウンまつり開催 葛ヶ谷公園開園 誘致施設第一号開設(リコー、 誘致施設第一号開設(リコー、エム・シー・エル)土地利用計画を見直し(多機能複合都市への転換) 丘」 開設 文化財発掘調査終幕を迎える(調査遺跡数240) せせらぎ公園、都市計画学会設計賞受賞 (新横浜~あざみ野間) けやきが丘) メイズ横浜」がオ

故 郷都筑 のよすが に

協会設立20周年記念写真集刊行委員会委員長

金子



平成元(1989)年9月

仮清算の実施

ニュータウン郷土誌「都筑の民俗」

刊行

を擁し、権利者の希望を取り入れた申し出換地を実施するなど、さまざまな加の街づくり」という基本理念のもとに、面積・権利者数とも国内最大規模められています。この事業は「乱開発の防止」「都市と農業の調和」「市民参 理事業竣工式をもって完成しました。なお、現在は中央地区の開発事業が進協力のもとに昭和41年にスタートし、約30年をかけ、平成9年の土地区画整港北ニュータウン開発事業は、地元・横浜市・都市整備公団の三者による 点から日本ではかつてなかった壮大な事業であると自負しております。

平成3(1991)年3月

10

日吉元石川線開通

-川西小学校 · 中川西中学校開校

平成2(1990)年3月

第一地区第一回住居表示実施

ふれあい朝市始まる

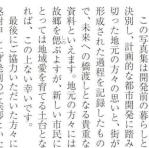
第五回港北ニュータウンまつり開催 港北ニュータウン行政サー

・ビスコーナ

ー開設(港北区茅ケ崎町)

とつの柱として、地震や災害の防壁であり生命の源である緑の確保がありま の視察で見た街並みを彷彿とさせ、感慨深い思いがあります。開発のもうひ は開通という見通しとなりました。駅を中心に建ち並ぶビルは、かつて欧米 開発区域内の幹線道路はすべて完成し、 す。公園・緑道、農業専用地区な 地下鉄4号線も4 ~5年先に

といえるでしょう。 発が人間性を重視したものである できていることはニュータウン開 どを合わせ、十分な緑地の確保が



平成6(1994)年1

港北ニュータウン区域、区名決定

東急バス、東山田営業所開設

川和東小学校・茅ケ崎台小学校開校 地域療育センター、在宅支援サービスセンタ 平成5(1993)年3月

第九回港北ニュータウンまつり開催タウンセンター地区街づくり協定取り決め

高速鉄道3号線開通(新横浜~あざみ野間)

第八回港北ニュータウンまつり開催

10月

情報誌「パ

トナー」発刊

港北ニュータウン行政サービスセンター開設(従来の行政サ

第七回港北ニュータウンまつり開催

山北山田線判断面開通

東京横浜独逸学園開校

タウンセンター開発推進協議会発足 中川西地区センター開設 第六回港北ニュータウンまつり開催

ビスコーナーを拡充)。同所に港北ニュータウン建設事務所移転

感謝申し上げ発刊のご挨拶といた



平成2 (1990) 年撮影。雪の川和富士。

平成7(1995)年1月

横浜市歴史博物館開館

「都筑区」誕生

港北ニュータウンまちづくり館開設 公団港北開発局、地区内へ移転(緑区荏田町)

第十回港北ニュータウンまつり開催

中央地区土地区画整理事業区域を都市計画決定

第三京浜道路都筑インターチェンジ開通

地域冷暖房プラント稼働

感謝をこめ

都筑区長



財団法人港北ニュータウン生活対策協会理事長

中西雅子

菜のほか、柿、栗、メロン、苺、桃、ぶどうなど果物も豊富で、タケノコはな恵まれた土地であったことがわかります。お米はもちろん、さまざまな野本当にびっくりいたしました。この写真集を見ても、この地域が自然の豊か 初めて都筑区に赴任した日、センター南駅前で雲雀の鳴き声を聞いた時は 地だったことです。 名産地として市場では競って買われ、また酪農や養鶏・養豚もさかんな農業 人々は農業という基幹産業にしっかり結び合い、祭りや伝統行事を中心に

押し寄せ、農地や山林が少しづつ宅地化していきました。いわゆるスプローゆるぎない地域社会を形成していました。しかしこの地域にも都市化の波が

ル化現象です。「このままでは農業が駄目になるばかりか、無秩序な都市化は

す なければならないと思うのです。 ずに新しい時代を切り開いていか なった地域の方々への感謝を忘れ れてはなりません。街作りの礎と 踏み切った地元の方々のことを忘 しその陰に先祖伝来の農地や暮ら まな恩恵を享受しています。 大規模な都市開発に発展したので しを捨てて、断腸の思いで開発に 今、私たちは新しい街のさまざ しか



とをたいへんうれしく思います き時にこの写真集を発刊できたこ

住情報交流センター 「ハウスクエア横浜」開設

都筑区総合庁舎、業務開始

平成8(1996)年2月 第十一回港北ニュータウンまつり開催

中央地区施行規程・事業計画の認可 大塚・歳勝土遺跡公園一部公開

全宅地供用開始

第二地区共同化義務街区着工(港北東急百貨店SC)

·第二地区換地処分公告

第十二回港北ニュータウンまつり開催

中央地区起工式

港北ニュータウン事業推進連絡協議会解散

ーンマトリックスシステム「緑の都市賞」内閣総理大臣

港北ニュータウン事業推進連絡協議会役員に市長から 賞を受賞

平成9(1997)年

土地区画整理事業竣工式

感謝状贈呈

4月 武蔵工業大学開設 南山田小学校・都筑小学校開校

港北東急百貨店SC開業 ショッピングタウンあいたい開業

平成10(1998)年4月

つづきの丘小学校開校 タウンセンター地区「都市景観大賞」建設大臣賞を受賞 横浜国際プール開設

平成12(2000)年3 平成11(1999)年4月

平成13(2001)年

都筑警察署開設 モザイクモール港北開業

市営地下鉄 4号線着下

タウンセンター地区、地区計画勉強会(第一中央地区の一部エリアについて使用収益開始昭和大学横浜市北部病院が開院

佐江戸北山田線 (大棚地区) 開通

平成14(2002)年3月

協会設立20周年という記念すべ

住宅・都市整備公団港北開発局発行「港北ニュータウン(四半世紀の都市づくりの記録横浜市都市計画局港北ニュータウン部発行「港北ニュータウン縮刷版」参考資料

凡例

- 三、提供された写真は編集上、拡大・縮小・トリミング等の修正や異物除去な二、本文中、数字の表記について、西暦は横打ちで、それ以外の数字は縦中横一、本文中、数字の表記について、西暦は横打ちで、それ以外の数字は縦中横一、本写真集は、一般公募により、また横浜市都市計画局、都市基盤整備公団、
- 四、写真の年代判定、また説明については提供者からの聞き取りによって作成と訂正を加えたものもあります。
 三一持任された写真に編集。一・カブ・編パ・ー・ドング等の傾回を異物隊才を

しました。

地域の移り変わり空から見た

…」と、多摩丘陵の波打つ山並みが形容されている。同書に掲載されている都筑の地名の入った歌二首。 失ったとも記されている。また、「…すべて多磨郡につヾきたる地なれば、小山かさなりて連綿たる岡なり、 は、かつて限りなく広々とした原野で名所として知られていたという。しかし、当時、すでに開けて名目を 江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』によると、都筑原、または都筑岡ともいわれていたこの地 武蔵野の草のゆかりに問わひす、都筑の原の雪の夕暮 僧顯昭

(『新編武蔵風土記稿第四巻』 雄山閣 昭和45年 161ページ

藤原光俊

かにせんつ、きの岡の葛の葉の、うらみて後は又もかへらず

であったことがわかる。 この写真集のはじめに、開発当初から都市化までの地域の様子を空中写真で並べてみたが、まさに開発前こ の地は、小山が重なり、山から湧き出る小さな水脈が次第に大きな川となり、森と水に恵まれた純農村地帯

都市化の波という時代のうねりに、無秩序な宅地化より計画的な街作りを選んだ地域の人々。

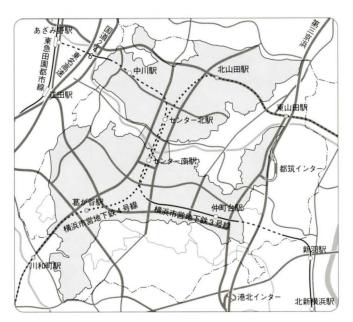
やがて農村は都市に一変していった。

写真集は、開発前から開発事業による造成工事、そして新しい都市の誕生へと未来を指向しながら連綿と続 く一連の変化を、 一冊にまとめたものである。



「この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものです。(承認番号 平 14 関複、第 10 号)」





昭和41(1966)年と平成10(1998)年撮影(次ページ掲載)の空中写真 を左図と照らし合わせると、おおよその開発区域がわかる。アミ 掛けの部分は区画整理が行われた区域、点線内が開発の広域区 域。図は計画図なので、道路・鉄道・駅名などは時間的な差があ ることに注意していただきたい。

昭和41年の空中写真を見ると、東名高速道路は建設途中であり、 造成工事が進んでいた多摩田園都市に比べて、港北ニュータウン 地域はほとんど手つかずの状態であったことがわかる。



平成10(1998)年11月撮影。(写真:都市基盤整備公団)





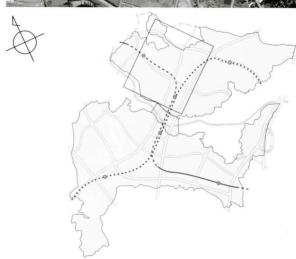
◆昭和48年一茅ケ崎・中川・大棚地区

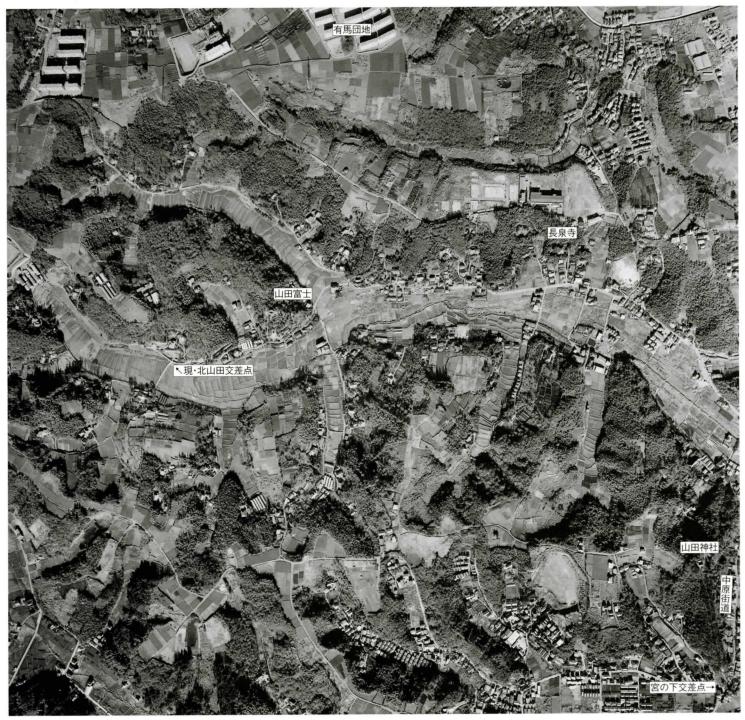




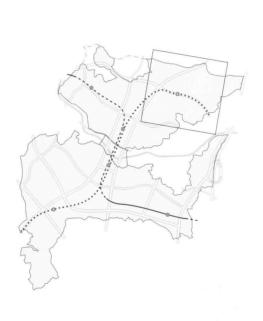
図の線で囲った部分が、上の空中写真のおおよその地域。





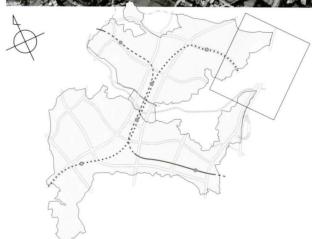


◆昭和48年一北山田地区

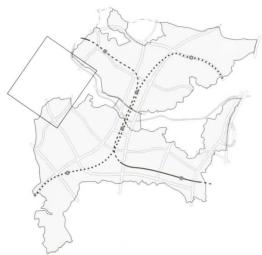






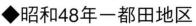


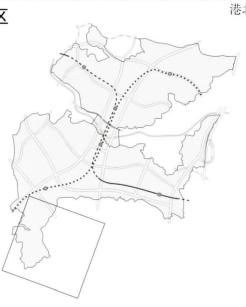










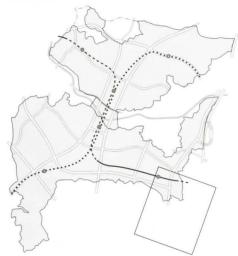


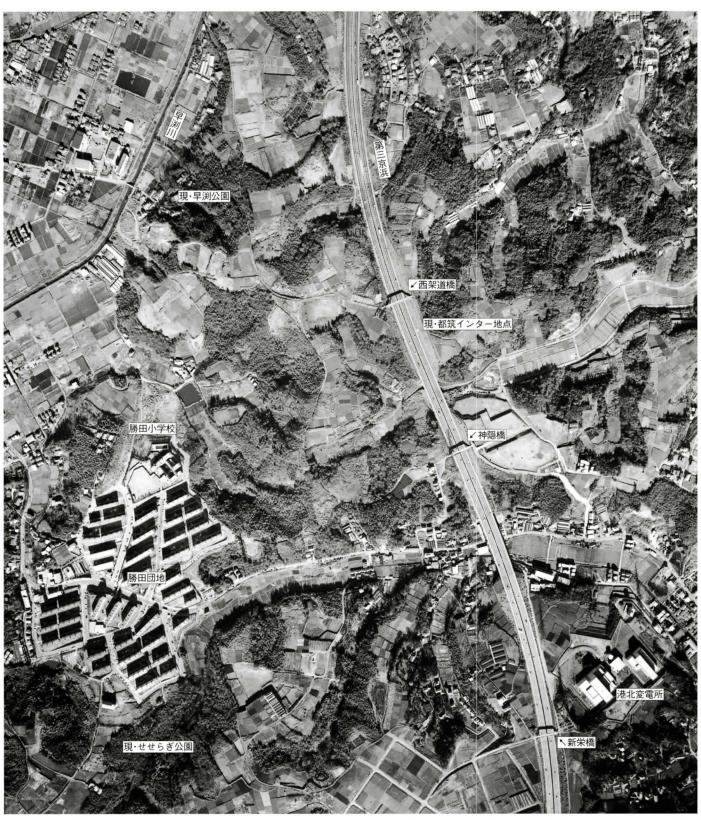
港北配水池(現・都田公園)の造成が終わっている。

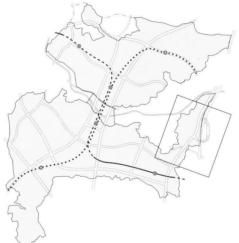


写真の左側下方部分が折本町、右側下方部分が大熊町にあたる。









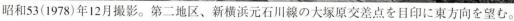


昭和53(1978)年

新横浜元石川線の推移

▼昭和53(1978)年







昭和53(1978)年12月撮影。上の写真より西側から東方向を撮る。北部工場やタウンセンター地区の造成が進んで いる。

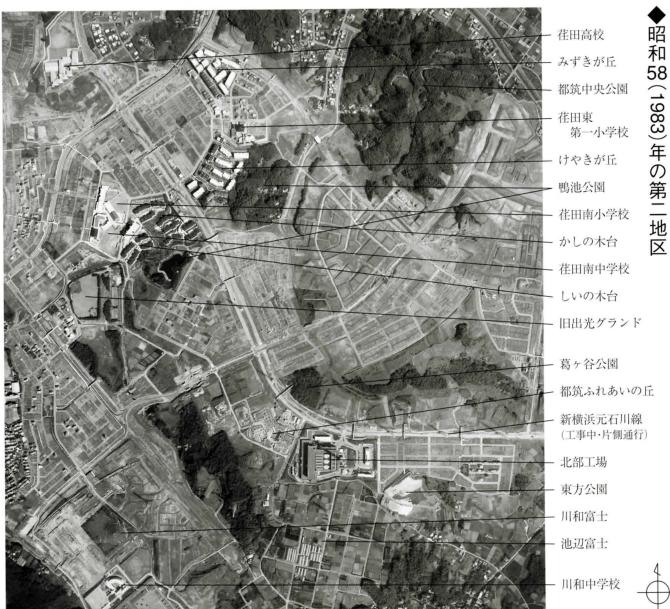






平成10(1998)年10月撮影。池辺農業専用地区上空から江田駅方面を望む斜め写真。

最初の街びらき





東名高速

荏田小学校

荏田高校

荏田東

折田不動公園

第一小学校

荏田南小学校

荏田南中学校

ささぶねのみち

鴨池公園

緑道

早渕川

・平成10(1998)年の荏田南 荏田 東地区





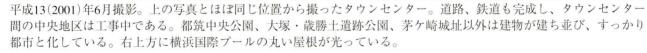
サントゥール中川 - 烏山公園 宿ノ入公園 中川駅 ハウスクエア横浜 武蔵工業大学 港北ガーデンヒルズ - 中川西中学校 中川西小学校 金の星幼稚園 山崎公園 早渕川

(写真:横浜市



平成元(1989)年頃のタウンセンター地区。南から北を撮った斜め写真。写真左側にはランズボローメイズや港北 ニュータウン建設事務所が見える。新羽荏田線は完成し、ぼつぼつ建物が建ちはじめている。





▼平成13(2001)年



開発前 その人間模様 **(7)** 地域社会と

れていた。 森と水に恵まれ純農村地帯であったこの地は、農業という基幹産業を土台にして暮らしの全てが組み立てら

まったとされる稲作農業は、その後中世・近世を経て現代まで続いてきた。 埋蔵文化財の発掘調査で、約2万年前から石器や土器を使った人々の暮らしが始まり、縄文・弥生の頃に始

象が、農業を中心にきっちりと形作られていた。 開発前まで、村には産業、家屋、人情、年間催事、祭り、行政機構その他、暮らしを構成するさまざまな事

写真に残っている水田や山林などの田園風景の中に、労働の喜びあふれる人々の表情に、祭りや演芸大会: スポーツなどで発散する若者たちのエネルギーに、当時の人々の暮らしと人情がうかがえる。

これらの景観や人情を顧み、また人口密度も数万倍にふくれあがった現在の課題である新しいふるさとづく りの基礎として、また将来への遺産として、これらの写真は貴重な記録となるであろう。

ら出土した遺跡は、

造成工事に先駆けて行われた発掘調査によって、

約2万年前の先土器時代から縄文・弥生・古墳時代にま

港北ニュータウン地区

代社会にいらかになった。

で及んだ。

梅谷遺跡」である。

自然に恵まれたこの地は大昔から人々の生活が繰り返さ

・歳勝土遺跡」(国指定史跡)と木道の橋「

中でも話題を呼んだのが「大塚

れてきたことがわかる。

▶発掘調査

調査は、まず試掘を行い、遺 跡が確認されると本格的な発 掘作業が開始される。港北 ニュータウンでは20数ヶ所も の遺跡が発掘され、住居跡か らは石器、土器、鉄器などお びただしい数の遺物が掘り出 された。写真は大塚遺跡の発 掘風景。各地でこのような光 景が展開された。(写真:財団 法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター)



古代の人々は魚や獣を捕るための道具や、調理のための 器具として堅い石を加工して使っていた。写真は花見山 [はなみやま]遺跡の石器類で、石鏃、植刃、石斧、木葉形 尖頭器、有茎尖頭器、削器、掻器などである。 (写真:『古代のよこはま』より)

◆土器

「大熊仲町遺跡」より出土した土器群。土器は縄文時代の ほとんどの遺跡から出土した。完全なものは少なく、散 乱した破片が土の中から掘り出され、調査員の復元作業 によって写真のように修復される。縄文土器の特徴は名 称のとおり縄で文様をつけたもの、貝殻で文様をつけた もの、あるいは形も深いもの、浅いものなど、多種多様 で用途によって使い分けていたように思われる。

(写真:『古代のよこはま』より)





岩崎菊雄家から出土した石器。左右の2つは打製石斧、中

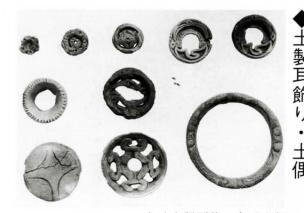




中川小学校北側の低地から縄文時代の木道の橋が発掘され、「古梅谷遺 跡」と命名された。写真はその全景。湿地帯を渡るのに丸太の橋が使わ れていたことが明らかになった。(写真:『古代のよこはま』より)

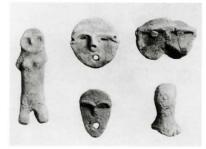


「大熊仲町遺跡」より出土した土器。勝坂式に分類される 緻密な文様の土器で、当時の人々の暮らし、あるいは遊 びの感覚や生活の彩りが想像されて面白い。現代の陶芸 のように土器製造の工房によって、大量に様々な趣向を こらして造られたようだ。写真の壷は高さ35センチ。 (写真:『古代のよこはま』より)



◆復元された弥生時代の住居





大塚・歳勝土遺跡公園に大塚遺跡 (弥生時代)の住居群が復元され公 開されている。小高い丘の上にあ る住居群は遠くからもよく見え る。(写真:田園都市出版)

上は土製耳飾、左は土偶で、 「大熊仲町遺跡」「三の丸遺跡」 (いずれも縄文時代中期)から出 土した遺物。これらは生活に必 要な道具としてよりも、装飾品 や宗教的な用途に関係あるとさ れている。縄文人は耳飾り、 ネックレス、腕輪などで身を飾 り、仮面をかぶり、あるいは顔 に彩色するなどして踊り、祭儀 を行っていたといわれている。 自然の脅威から身を守るため に、自然崇敬・祈願の神事がこ の頃からあったのだろうか。 (写真:『古代のよこはま』より)



豪をめぐらした集落全体と墓地がセットで発掘された「大塚・歳勝土遺跡」。写真は大塚遺跡の全体像。写真中央やや上部に早渕川が 流れ、南岸の茅ケ崎地区の造成前の様子がわかる。墓地の集合体である歳勝土遺跡は左側に広がっていた。現在は「大塚・歳勝土遺跡 公園」として復元された住居と墓地が一般公開されている。(写真:財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター)



矢崎山横穴群

◆矢崎山古墳

早渕川の矢崎橋の辺りは、南岸が突き出たように丘 状になっており、丘の南側斜面には13基もの横穴墓 群が出土し、また頂上の塚の部分は円墳で銅製の耳 飾りや鉄製の鏃などが出土した。6世紀後半から7世 紀末にかけてのものとされ、古墳時代、ここに豪族 が住んでいたことを物語っている。遺跡は「矢崎山遺 跡」と命名された。(写真:『古代のよこはま』より)



現在の矢崎山



◆「都」の字の記された器

[都]の字が記された土器。江田駅近くの「長者原遺跡」から出土した。「長者原 遺跡 は奈良・平安時代に確立していった律令制度の地方の拠点、都筑郡衙〔ぐ んが〕であったといわれている。すでに中央と地方が密接な関係を持っていた ことの証で、その頃から旧大山街道は、都筑から橘樹を通り北関東、東北へ つながっていた主要な道路であったと思われる。長者原遺跡の場所は江田駅 から南東方面にかけての一帯で、国道246号線と東名高速道路の間にある。奈 良時代に編纂された万葉集にも「都筑郡……」の記載があり、「都」の字の器は 古くからこの地が都筑といわれていた物的証拠ともいえそう。

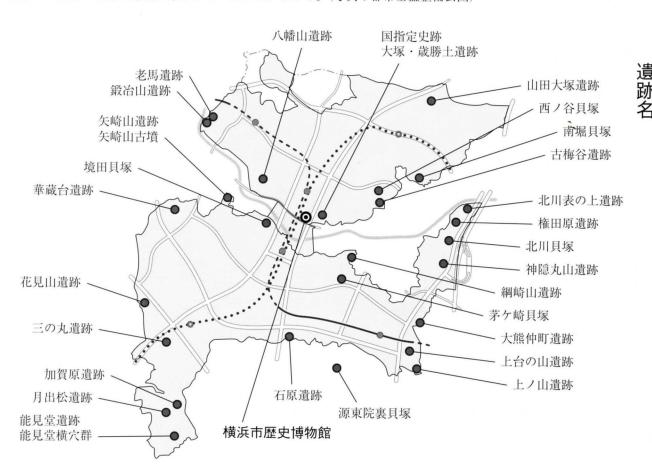
(写真:日本窯業史研究所)

ユ

タウン地区で発掘



ひょうたん型をした大塚遺跡と、方形の歳勝土遺跡がはっきりとわ かる。古梅谷遺跡は中川小学校北側の低地から出土したが、丘陵に挟まれた谷にあたる。縄文の人々はぬ かるみのひどい湿地に木道の橋を渡し、谷を越え、山を駆けめぐっては狩猟・採取活動をしていたのだろ う。地形から丘陵の上部に集落が築かれていたことがわかる。(写真:都市基盤整備公団)



発掘調査によって出土した遺物や古文書などの史料は、横浜市歴史博物館で常設展示されている。展示は先史時代から近 世まで模型や図版をそえて解説され、地域の歴史に親しめるよう工夫されている。博物館に並んで「大塚・歳勝土遺跡公 園」があり、ボランティアによる解説も行われている。 ●問い合わせ/横浜市歴史博物館 ☎045-912-7777(代)

都筑区内の中世の城郭はほとんどが姿を消している中で、

公園として一般公開の予定になっている。

存され、今後、

考えられている。

茅ケ崎城は近年発掘調査が行われ、

中世の城館 茅ケ崎城

森に囲まれた茅ケ崎城址。東方より撮影、右上方に早渕川が見える。 (写真:『古代のよこはま』より)



中郭(本丸)にはたくさんの掘立柱建物[ほったてばしらたてもの]や土坑[どこう]があり、南側の土塁[どるい]そばに塀があった。中央や や右の竪穴には礎石が配置され、土壁造り(左上写真は焼けて残った壁土)の倉庫とみられる。(写真:財団法人横浜市ふるさと 歴史財団埋蔵文化財センター)

や思いが伝わってくる。 すり減った石面に文化、 することが多い。石仏には地蔵、 中原街道、大山街道など旧道の多いこの地域では、 天明、 (写真:土屋幸之助さん、 寛永などの江戸時代の年号が読めるものもある。

馬頭観音、

観世音菩薩、

頬づえをつい

あるいは屋敷端や寺の境内に今でも石塔や石仏を目に

た如意輪観音などが浮き彫りされ

風雪に耐え

中世から近世にかけての人々の暮

田園都市出

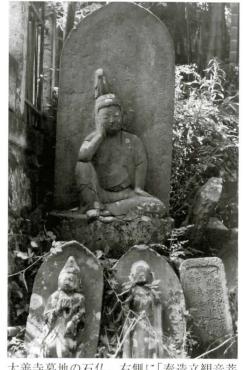
大島家の屋敷裏、内墓地にあった石塔と石仏。中央は宝 篋印塔[ほうきょういんとう]の一部で、この様式は中世まで遡 る。右側の石仏は江戸時代の墓石のようだ。



や野辺にまつられていた石塔と馬頭観世音(左)。馬 頭観世音は頭上に馬の頭をのせた観音像で、旅人の安全 祈願のいわれがある。旧道によく見られるのもそのいわ れによるものだろう。



横浜市歴史博物館裏通りに面した安藤家の屋敷端に ある石仏。写真右は庚申供養塔。「奉造立庚申供養 二世祈願」、また「天和二年 小机 牛久保村」など の文字が読める。時折わらぞうりが奉納されている のを見るが、足の病にご利益があるとの言い伝えに よるもののようだ。左の石仏は観音像といわれてい る。この二体とも、元は牛久保神社(現・天照皇大 神)の移転前の神社下にあった安藤家の土地にあっ たもので、村の人がよく祈っていたという。現在も 信仰あつい人が訪れ祈っている姿を見かけるとい う。年代を経てなお人々の心の拠り所になってい る。

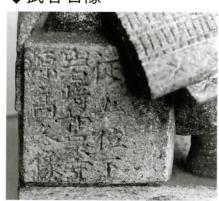


大善寺墓地の石仏。右側に「奉造立観音菩 薩念佛供養本願同行六拾人之」、左側に「寛 文十二」と読める。現在は無縁仏の中央に 立てられている。



写真は大善寺墓地が造成される前の墓石の数々。 中央の宝篋印塔形式の墓石は、現在個人の墓地に 安置されている。ご住職の話によると、代々ご代 官を務められた方の墓石だという。

武者石像



岩崎菊雄家所蔵の石像。石像側面(写真 上)には「従五位下 岩崎和泉守 源高 久像」と刻まれている。中世の武人のよ うだ。



講とは、

信

仰

あるい

た組織で、

大山講の

雨乞いや地 は相互扶助を目

神講

念仏 の豊 的

さん)

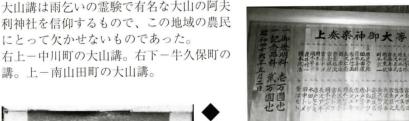
目的としたものもある。(写真:土屋幸之助

2、頼母子講のように経済的な相互扶助を2や庚申講のように仏教に結びついたも

のように仏教に結びついたも

作祈願など農業に結びついたものや、





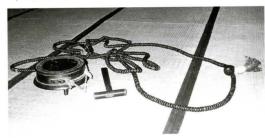
地 神 講

上案楽神御大等特

にとって欠かせないものであった。

講。上-南山田町の大山講。

念仏講



念仏堂の鉦と数珠。念仏講も寺や各家を会場に 行われていた。人々は輪になり長い数珠を回 し、鉦をたたいて念仏を唱え、先祖への供養や 無病息災を祈った。

地神講掛け軸。1年に2回、春分・秋分に近 い戊の日(社日)に農作業を休み、寄り合っ て飲食を共にした。各谷戸ごとに地神講の 掛け軸を持ち、当番を決め回り持ちで世話

三猿を彫刻した庚申塔は、路傍や辻 に今でもわずかに残っている。かつ てかのえざるの夜、徹夜で祭事を 行ったというが、今は全く消え石塔 だけが名残をとどめている。

中央の小高い丘が開発前の茅ケ崎富士。場所は茅ケ崎南四丁目、大原みねみち公園 辺りで、開発によって消滅した。

場所を移して新しく築かれたものである。 るとされたことが、 て山田富士は整備保存され公園 どが失われてしまった。 参拝することにより、 を留 として池辺富士が残されてい わ れて めて いるが茅ケ崎、 荏田、

的に広まったもの。 代に発達した富士信仰に基づき、 ニュータウン地域にも多くの富士塚があったと 富士塚とは富士山を模した小型の塚で、 いるが元の山は開発によって消滅 庶民の人気を博したのだろう。 老若男女誰でもこの富士塚を 富士登山と同じ御利益 わずかに残ったものとし 川和など、 る。 になり、 関 東一円に爆 111 和富士は名 民間 ほとん のも があ

庚申講



昭和4(1929)年頃の川和の富士。現在の川和富士は公 園として新たに築かれたもの。(写真:『都田村誌』よ り転載)



平成4(1992)年3月撮影の池辺富士。 現在も池辺農業専 用地区にある。(写真:小島晴光さん)



手前にある民家や田圃は今はなく、 変貌した。右側にある火の見やぐらは北山田公民館に移築保存されて いる。現在は山田富士公園として整備され、市民の憩いの場になって いる。(写真:男全冨雄さん)



山田富士頂上にある石 塔。信仰の山であった ことを物語っている。 (写真:川上昇さん)

御ほふひ下さるへく事 たり、若右類之儀これあらハ てふさんと申す、堅く御法度 申合せ居町居村をたちのき候を くわたつるをこうそといひ、あるひハ ととうして、しいてねがひ事 大勢申合候をととうととなへ、 平々其筋之役所へ申出へし 慶応四年三月 太政官



ものである。(写真: 関義和さん)

もので、明治初期の歴史的資料として貴重な

この3点の高札は関義和家で保管していた

高さったっ

代)の頃に本家から分家した関義和家は、

寛永(1600年 江戸時代の

寄として名主の補佐役を務めた。

関義和家に伝わる高札

勝田町の関義和家の本家は、 村の代官をつとめていた。



慶応四年三月 邪宗門之儀八、 切支丹宗門之義八、 禁止候事 可相守事 御制禁之通、 固く 太政官



御褒美可被下候事 之役所江召捕へ差出し、又ハ訴出 可申候、吟味之上、相違無之候ハ、 者引合之ため役所へ被召出候節い 但、召捕候節、手疵を負ひ又ハ即死等 たるべく候事 後日、他より相顕るにおいて曲事 職業向迷惑不相成樣、相応御手当 可被下候間、有体二可申立候、若隠し置

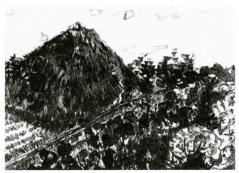
候者等見聞次第、早速其最寄 火付盗賊人殺、或ハ贋金札を作り 之者江ハ厚く御援助可被下候、訴人いたし候

宮崎雄二(旧姓吉野)さんが当時を思い出し失われた八景を描き残している。

(写真:田園都市出版)

茅ケ崎出身の

近江八景になぞって茅ケ崎の風物を八ヵ所選び地域の人々に語り継がれてきた名所。



自性院谷戸から茅ケ崎富士までを四五六峠 といい寂しい野道であったという。



⑤ 正庵の

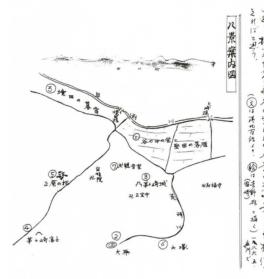




⑦ 観音の晩鐘 自称「かんのんぼう」という寺守りが毎日夕 刻に鐘をついていた。



⑧ 城山の秋の月



姓院

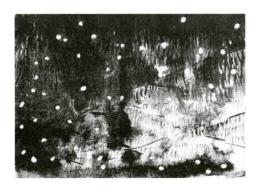
茅ケ崎八景の前書き(上)と自性院谷戸の絵図(下)。



② 清水の夕照



③ 境田の暮雪





①谷の中の蛍と堅田の落雁

開発前の景

茅ケ崎富士からの 眺 め

昭和40(1965)年代。茅ケ崎富士から池辺方面を望む。(写真:土屋幸之助さん)



昭和44(1969)年頃。現在の北山田交差点付近の農道と田圃。冬の朝まだき、地 面は凍てつき、霧がかかってまるで水墨画の世界のようだ。この水田地帯は現在 の日吉元石川線で、約10メートル盛り土をした。中央に見える電柱の高さまで 埋め立てられた。(写真:男全冨雄さん)



昭和40(1965)年代。横浜上麻生線沿いの家並み。 (写真:信田隆治さん)

数棟並んでいる。(写真:金子三千男さん)

▶典型的な農家のたたずまい

北ニュータウン開発によって、

明治維新、

失われた当時の様子が色濃く残っている。これらは地域史の断片である。

古代から土地を耕し農作物を生産しながら連綿と営まれてきた人々の暮ら

太平洋戦争などの激動をくぐり抜けてなお続いてきた。港

村は都市へと一変したが、

開発前の写真の中



昭和30(1955)年頃。北山田の石原家。典型的農家のたたずま いである。屋敷裏に山林、前に畑が作られ、母屋、小屋など

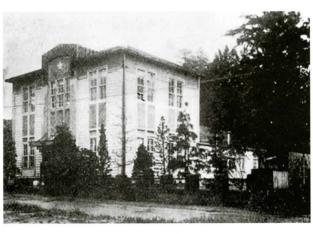
都筑という地名は万葉集に登場することから、奈良・平安の頃から使われていた地

せていただいた。(資料:信田隆治さん) 初期の貴重な写真や資料が載っている。この記念誌から、当時の写真を幾つか転載さ 所が設置された。これは昭和14 (1939)年の町村合併まで続いたが、 合わせ一部属する荏田村、 て都筑の地名は消え、平成6年の都筑区誕生によって再び甦ったことになる。 明治4(1871)年の廃藩置県で「神奈川県都筑郡」となり、同12年には川和村に郡役 昭和4年5月に都田村役場が『都田村誌』を発行した。この中に都筑郡役所など昭和 吉田村、新羽村が入っている。

勝田村、茅ケ崎村、川和村、佐江戸村、池辺村、東方村、折本村、

稿』の中に、武蔵国都筑郡に属する15ヶ村が記載され、山田村、牛久保村、大棚村、

川和界隈にあった都筑郡関係の公的機関







上から●都筑郡役所。●都田警察署。 查駐在所。●川和郵便局。





上から●都田村役場。●横浜区裁判所川和出張所。

◆中川村役場

治 36

年4月発行の

「神奈川懸都筑郡

中。川明

析されている。

左の写真は大正8(1919)年

中川村役場の新築記念のもので、

村々是調査書』には中川村の村勢が調査

勝田の旧五ヵ村が統合されていた。

JİI

村には山田、

牛久保、

大棚、

(1939)年の横浜市編入まで、

継ぎ下大棚が大棚となった。なり、中川の地名を残すため上大棚が引き、中川村の名前は横浜市編入とともに無く村の役員が写っている。

玄関に掲げられた看板に「新築落成記念 大正8年10月31日」「都筑郡中川村役 場」とある。中川村役場は清林寺の下に あった。(写真:関義和さん)





昭和3(1928)年頃。旧勝田倶楽部の落成式。 提灯、花を飾った櫓に囃子連中が乗り、祭り 囃子で賑やかに祝った。(写真: 関義和さん)



▼大棚町倶楽部

昭和8(1933)年3月。大棚町 倶楽部(現・大棚町公民館) の落成記念写真。この付近 には元は中川大棚杉山神社 が建っていたが吾妻山に移 転し、さらに開発に伴う移 転で、現在地のセンター北 駅前に移転した。

(写真:皆川健一さん)

鎌倉街道もあり、 世には「いざ鎌倉」と、 また青葉区との境には旧大山街道(国道246号線)があった。 都筑区内には古来からの道として東海道裏街道の中原街道 また江戸城へ米や農作物、 別名絹の道ともいわれるように絹や炭などの物 農民が武具をつけて馳せ参じたといわれる

泥水がたまり、 から人を出し一日奉仕で行う砂利敷きによる補修工事であった。 もしばしばであったという。 馬車や牛車の轍〔わだち〕が地面をえぐりでこぼこで、雨が降れば どを運んだといわれている。 もいわれ、 資を運ぶ道でもあった。 道路ではあったが砂利道であった。道幅も狭く曲がりくねり、 道は人々、 馬車やトラックが脱輪し大勢の村人によって引き上げること 村々を結ぶ重要な交通網である。 泥が跳ね上がって衣服を汚した。路肩は崩れやす 中原街道は徳川将軍が鷹狩りに通ったと 道路普請は村の重要な仕事で、 柿から醸造した上質の酢な 暮らしに欠かせな

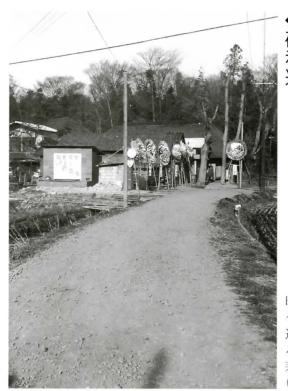
砂利道







昭和40(1965)年代。上の写真4枚は道路普請の一連のもの。 金子保さんが常々「良き道たどれば良き里あり」と話して いるように、村人にとって道は重要であった。(写真:金 子保さん)



昭和40(1965)年代の茅 ケ崎東地区の砂利道。 道路の両側は田圃であ る。後方に見える山は 茅ケ崎城址。

(写真:田中孝長さん)



昭和40年代の砂 利道。信田家の 前の通り。公会 堂方向を望む。 右は家の入口で 左は畑。この道 路の先に横浜上 麻生線がある。 (写真:信田隆治 さん)

细間

|が村から町へと人々や物資を運ぶ線とすれば、牛車や馬車|

しいものがある。 達を遂げ、より早く、より大量に輸送するための進歩には目覚まも乗合馬車、木炭バスの時代を経て現在の交通機関へと急速な発ラクターが導入されるなど機械化が次第に進んでいく。人の輸送ドルの三輪トラックへ、さらに四輪自動車へと進み、農作業もトカー、自転車を使って市場に品物を運んでいたが、やがて棒ハンカー、自転車を使って市場に品物を運んでいたが、やがて棒ハンカー、自転車を使って市場に品物を運んでいたが、やがて棒ハンカー、自転車を使って市場に品物を運んでいたが、悪作業もと

合自動車である。 写真は今から約40年ほど前の三輪トラックや四輪トラック、







12.794

上一昭和11(1936)年。勝田発着所で撮った運転手と車掌さんの珍しい 写真。川崎市中原区の新丸子から港北区勝田まで乗合バスが走ってい た。13年に東横電鉄(現・東急電鉄)に合併された。当時1区間5銭で、 停留所でなくても止めて乗せてもらうことができたという。

下一昭和20(1945)年頃の山田バス停留所付近。飯田屋酒店前の中原街道。ボンネット型が今では懐かしい。

(写真・文:『山田小学校20周年記念誌』より転載)



昭和38(1963)年。三輪自動車ミゼット。中央に見える建物は茅ケ崎町 共同集荷所。(写真:田中孝長さん)

◆三輪トラック



◆トラック

昭和13(1938)年。山田富士にあった形のよい松を皇居に移植するため運び出した時の記念写真。(写真:安藤僎さん)

昭和41(1966)年、境田橋を渡るトラック。当時の境田橋は 木造で狭かった。早渕川も改修前で、大雨が降れば氾濫し、た びたび被害を被っていた。(写真:田中孝長さん)

下-現在の境田橋。港北ニュータウンの主要道路、中山北山田 線が早渕川を渡る橋で、規模、風景とも一変している。

(写真:田園都市出版)



現在の早渕川。(写真:田園都市出版)

そのためで、

昭

和5年に工事は完了、

現在の姿になった。

環としていち早く早渕川の河川改修事業を進めたのも

要な事業であった。

港北ニュ

1 タウ

用する治水は村の



川向の堰。この鶴見川本流の川向にある堰の写真は、昭和初期 の貴重な記録である。早渕川にもこのような堰があったといわ れている。(『都田村誌』より転載)



帯は鬱蒼と樹木が繁り、

が豊かであった証拠に、

源流からわずか十数キロ地点の中川 清水が至る所から湧き出す山であった。

元地区で

とうとうと流れる中級の河川に成長する。

も大雨や台風によってしばしば氾濫

この早渕川

いがあり、

Iから

れ川

て村人を悩ませてきた。

農業に欠

橋が流されるほ

0

111

時として凶暴な顔を見せるのである

の保木を源流として石川

地区、

中川 海に

地区を通り

綱島で合流する

早渕川も上

水流

港北区を流れ

鶴見区で

注ぐ。

その支流の早渕川は青葉

.の源流はどこも保水林に覆われ水が豊かであるが、

東京湾に注ぐ鶴見川

本流は町田

市北部の

小山

田地区を源流とし

佐江戸の用水堰。堰で溜めた水を農地に引き入れている 写真。(『都田村誌』より転載)

台風による鶴見川の氾濫

(1967)年の台風22号

て提供してくれた。 昭和42年の台風2号は記録的な被害をもたらした。 新羽地区の被害状況を写真に残していたが、この度、貴重な記録とし 田畑を流し、 町や村は孤島となった。 鶴見川下流の氾濫は 土屋幸之助さんは新

画的な土地開発への牽引力にもなっていった。 早渕川の被害も大きく、この災害で一気に河川改修が急務となり、また計



鶴見川下流域は大きな湖と化し、風景が一変している。新横浜付近。(写真:土屋幸之助さん)



町は川に囲まれ孤立した状態。(写真:土屋幸之助さん)



台風で決壊した堤防を補修するためにかり出された佐江戸の若者たち。左側 に見える石を積み上げ、補強工事が行われた。(写真:牧野宏さん)



道路は川となり、船で移動している。(写真:土屋幸之助



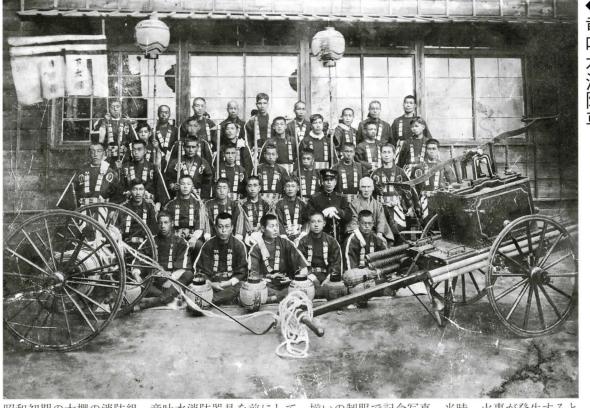
子どもたちはズボンをたくし上げて、深みにはまらない ように探りながら歩いている。(写真:土屋幸之助さん)

昭和半ば頃まで、

竜吐水消防 車

戸主で結成された消防組がポンプで駆け付け、消火活動を行っていた。

「事が発生すると半鐘をガンガン叩いて知らせ、



昭和初期の大棚の消防組。竜吐水消防器具を前にして、揃いの制服で記念写真。当時、火事が発生すると このポンプで駆け付け、手押しで消火にあたった。(写真:皆川健一さん)



竜吐水消防器具の寄贈

手前にある古い道具は明治26(1893)年に製造さ れた竜吐水消防器具で、佐江戸上講中が所有 し、毎年1月3日、器具の掃除と整備を目的に放 水テストを行事として行っていた。時代ととも に消防方法は急激な変化を見せる中、維持管理 も困難になり、平成8(1996)年3月、都筑消防署 に寄贈。現在は都筑消防署玄関に展示してある (下の写真2点)。

写真は、中華料理店子安[シーアン]の前身である 鈴の家の建築工事にあたり、保管場所を移設し た時に記念撮影したもの。メンバーは佐江戸上 講中の方々。(写真:並木誠久さん)





都筑消防署に展示されている腕力ポンプ と説明板。(写真:田園都市出版)

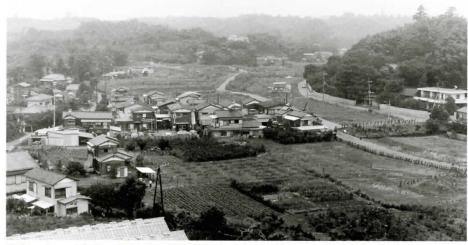
を中心に組み立てられていた。 るいは講中に見られる地域の結束、 人々の生活の中心は何といっても農業である。特に米作りは年間行事や村祭り、 農繁期託児所の開設など、すべてにわたって農業

の強い絆のもとに行われていた。 米以外の農作物には大麦、小麦、 冠婚葬祭をはじめ、子育て、 さつまいも、里芋などの野菜類、 また養鶏、養豚、 酪農も行われ、東京、 家事はもちろん、青年団や消防団の活動も、 大豆のほ 苺、 メロン、桃、 横浜の食糧倉の役割を果たしていた。 杮、 ナス、キュウリ、 栗などの果物、 農業中心 特産品の 大根、 白

いたのである。 喜びも悲しみも苦しみも大地と共に、労働と収穫の喜びの中に、 しっかり根付いて

谷戸の水田

昭和30(1955)年頃。春の農作業。北山田四丁目の現在の北山田交差点付 近。左上に見える頂上の平らな山が山田富士。(写真:金子三千男さん)



昭和40(1965)年代、開発前の請地古梅谷戸全景。(写真:土屋幸之助さん)





昭和40年代。手前は陸稲の 畑。水田による米づくりが 継続される一方、戦後は畑 で栽培する陸稲が普及し た。後方に当時の農村のた たずまいが広がる。

(写真:土屋幸之助さん)





昭和43(1967)年2月、佐江戸地区の水田。一面の田圃の向こ うに白い富士山と丹沢山塊が見える。収穫が済んだ初冬の風 景である。(写真:牧野宏さん)



昭和40(1965)年代。上の2枚は谷本川と横浜上麻生線の間に広がる田園 風景。この風景も横浜市営地下鉄4号線の車両基地に変わり、見られな くなるだろう。(写真:信田隆治さん)



昭和31(1956)年頃。雪に覆われた佐江戸地区の田園風景。 山から白山方面を望む。写真中央は現在は下水処理場になって いる。(写真:並木誠久さん)

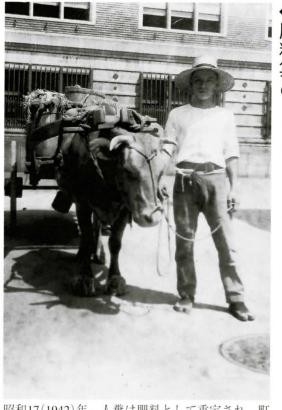


昭和40年代。開発前、勝田 団地近くにあった丸沢池。 農業用水としてのこのよう な溜め池は各地にあった。 (写真:土屋幸之助さん)



▶田植え前の代かき

昭和30(1955)年代。現在の北山田交差点付近の水田。田植え前の代かきを行って いる。かつてこの辺はホタルの乱舞が見られたという。(写真:男全冨雄さん)



昭和17(1942)年。人糞は肥料として重宝され、町 に出かけては集めた。写真は牛車に肥料桶を積ん で畑に出かける若い農夫。昭和35年頃まではどこ の農家も使用していた。(写真:田丸清さん)



▶施肥

昭和25(1950)年頃。写真の風景はセンター南駅より200 メートル位南東の一帯にあたる。山際の水田はゴンゲ谷 戸といっていた。左奥の山は標高約50メートル位で、港 北東急百貨店の東側に当たる。現在の風景からはとても 想像出来ない原風景である。(写真:深川清治さん) 右-上の写真に対応する風景として、センター南駅前バ ス停から港北東急百貨店を撮ったもの。昔の面影は全く ない。(写真:田園都市出版)



昭和35(1960)年。勝田橋付 近、龍福寺の坂の上から撮 る。砂利道の横浜生田線、 道路沿いに肥だめが並んで いる。後方に見える屋根は 勝田町の最乗寺。

(写真:皆川健一さん)

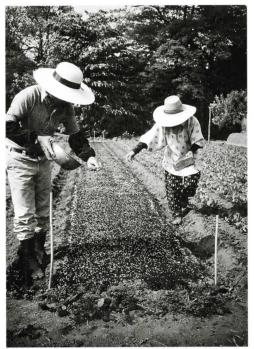
心でもあった。

集中して行わなければならず、

米作りは農家にとって生活の全ての中心であり、

その中でも春の田植えと秋の稲刈

刈りは短期 農作業の



② 選別して、 一週間ほど水につけた種を畑苗 代に蒔く。

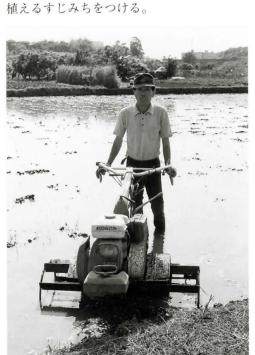


と悪い種を選別する。





④ ナエトリ。20センチほどに伸びた苗を抜き 取り、一握りづつ束ねる。

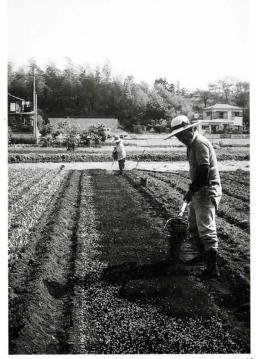


⑤すじつけ。ウマという道具を使って、苗を

昭和59(1984)年頃。田植えをする前の作業と して、土をほぐして水を入れ、どろどろに撹 拌する「代かき」がある。かつては人の手や牛 を使っておこなっていたが、やがて動力を使 うようになった。(写真:並木誠久さん)



⑥ 田植え。すじに沿って苗を植えていく。



ぎらいと祝いをかねてお赤飯やご馳走にお酒も添えてもてな手伝い合い、共同で作業が進められた。作業が終わると、ね

共同で作業が進められた。

た。作業が終わると、ね親戚や隣近所がお互いに

連の流れである。

(写真:田丸清さん)

写真は昭和5年に佐江戸の田丸家で撮影した、田植えの一

をするのが習わしであった。

③ 蒔いた後は土や灰を振りかけ、土の中に種 を押しつける。



⑦田植えは短期勝負の力仕事な ので、10時、3時のおやつや昼食 は現地でとり、寸暇を惜しまず 作業した。



昭和40(1965)年代。 谷本川沿岸の水田地 帯。6月の梅雨どき らしくかすんでい る。雨の中の田植え 作業のようだ。遠方 に荷車を引く牛が歩 いている。この一帯 はやがて地下鉄4号 線車輌基地となる。 (写真:信田隆治さん)



昭和30(1955)年頃。北山田四丁目付近。水田の見回り。 (写真:金子三千男さん)





昭和62(1987)年頃。田植えを手伝う子供。足が抜 けないので一生懸命抜こうとしている微笑ましい 写真。(写真:並木誠久さん)

昭和33(1958)年夏。稲の早期栽培に挑戦し、見事に出穂した農 林17号。田圃を見回り喜びの皆川健一さん。場所は現在の中央 地区で、中山北山田線が通っている辺り。背景の森は八幡山。 (写真:皆川健一さん)



昭和39(1964)年頃。 現在の茅ケ崎東二丁 目付近。稲刈り作業 に励む夫婦。秋の光 を受けて黄金に輝く 稲穂がまぶしそうだ。 背景左側の山は現在 フォーリアの杜になっ ている。



昭和51(1976)年頃。現在の山田富士公園はこのように安藤家の田圃 だった。背面の丘陵は山田富士。(写真:安藤マサ子さん)



昭和63(1988)年。稲刈り時の休憩。大人も子供も畔に腰を下ろして おやつを食べながらなごやかに談笑を楽しんでいる。

(写真:信田隆治さん)



上の写真を角度を変えて、茅ケ崎東一丁目方向を望んで撮ったもの。



農作業の合間、外でお茶道具をひろげて休憩をする家族。 (上の写真3枚:金子三千男さん)

昭和35(1960)年。脱穀風景。(写真:田中孝長さん)



昭和63(1988)年。子供たちは手伝いもするが、何と言っ ても遊びたい。田圃のどろんこで遊ぶ兄と妹。前ページ 左下の写真と同じ時の一コマ。(写真:信田隆治さん)



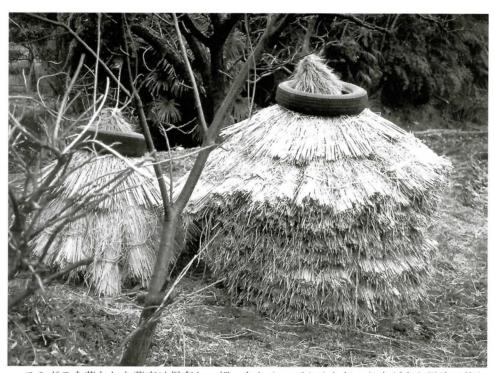


昭和33(1958)年頃。脱穀作業の側で子供が三輪車で遊んでいる。 (写真:金子三千男さん)

クルリボを使って残ったモミガラを 叩き落とす。実演しているのは安藤 キヌさん。(写真:土屋幸之助さん)



昭和45(1970)年頃。上は籾摺りに動力が使 われ始めた頃の器具で、下は籾摺りの作業 をしている場面。(写真:安藤マサ子さん)



モミガラを落とした藁束は保存し、縄、むしろ、ゾウリなど、さまざまな用途に使わ れた。写真は開発前によく見受けられた稲藁ぽっち。(写真:土屋幸之助さん)

るほど有名だったという。

頭が黄色で根は真っ

柔らかくてアクもなく春の味覚の

一つだっ

摩地方から竹を移植して15年の歳月をかけて生 式栽培」、「根伏せの筍」ともいわれ重宝されてい ンチで非常に柔らか これが品川から多摩川を越え、 元をただせば江戸時代、 それは独特の栽培方法によるもので、 や堆肥で覆い、 地面に出た根を50~70センチ掘って埋 掘り出した筍は大きさ30~ 特徴は根伏せ式という方法で 翌春、 目黒の回漕業者が薩 頭が地面に出る前 Ш 崎

40

中川の筍として名をはせたのであ 横浜北

たけ栽培



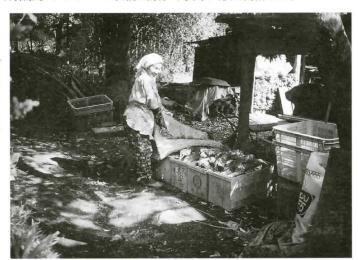
昭和38(1963)年頃の椎茸栽培。 (写真:上-男全冨雄さん、下-田中孝長さん)



昭和50(1975)年5月1日



昭和40(1965)年頃。秋の山は自然の恵みの宝庫。栗も いがのまま採ってきて、ていねいに実を取りだし、出荷の準備を している。これも主婦の仕事だった。(写真:男全冨雄さん)



タケノコの出荷準備。掘ったタケノコは箱に入れ筵をかけて鮮 度を保ち、買付人に渡した。(写真:田丸清さん)

茶摘みとお茶の製造

まって新茶の摘み取りと茶の製造が行われた。よもやま話に花が咲き、 かな社交場でもあったという。 って新茶の摘み取りと茶の製造が行われた。よもやま話に花が咲き、賑夏も近づく八十八夜」と歌われた初夏、隣近所や親戚縁者の女性達が集

摘み取られた葉は自宅で一日がかりでお茶に製造、 一年分のお茶になっ



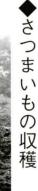
風景。女たちの楽しい雰囲気が伝わって くる。(写真:金子三千男さん)



昭和31(1956)年頃。 お茶の製造の一工程。 和紙を貼ったホイロで 乾燥させているとこ ろ。かつてほとんどの 農家で自家製のお茶を 作っていた。(写真:並 木誠久さん)



昭和30(1955)年頃。さつまいもの収穫風景。現在の横浜 国際プールが建っている場所は開発前は安藤家の畑で、 さつまいもをはじめ、農作物を作っていた。写真は大き く実ったお芋の収穫ににっこりの安藤マサ子さん。(写 真:安藤マサ子さん)





↑イモガラ作り

サトイモの茎を洗っている。乾燥したものはイモガラといい冬の保 存食にした。(写真:土屋幸之助さん)



②喜びの中にも手早く慎重にもぎ取り作業が続く。





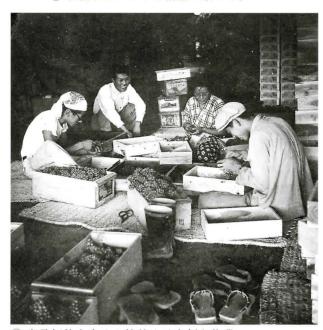
トマトの収穫。上一昭和15(1940)年。左端の子どもは皆川健一さんで、 父母、祖父母、叔母の一家全員。下一昭和18(1943)年頃。父親が戦争に 行き、残された家族で農業を守っている。後方の山は勝田方面。(写 真:皆川健一さん)



①ぶどう畑の前で記念写真。



③収穫したぶどうを納屋に集める。



④ 商品価値を高める箱詰めは真剣な作業。 ①から④までの4枚の写真は昭和31(1956)年8月、大棚町 の吉野喜輔家のぶどうの収穫と箱詰め風景。収穫の喜び が伝わってくる。(写真:皆川健一さん)



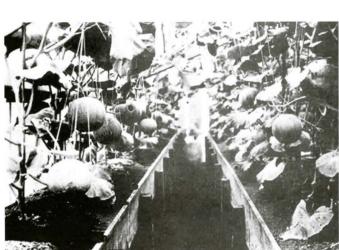
昭和4(1929)年頃。大熊の温室。(写真:『都田村誌』より 転載)



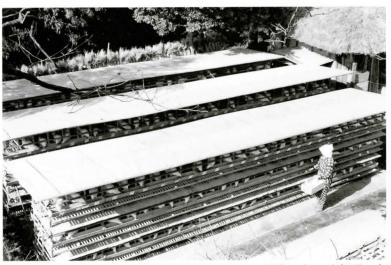
昭和4年頃。都田村の苺畑。(写真:『都田村誌』より転載)



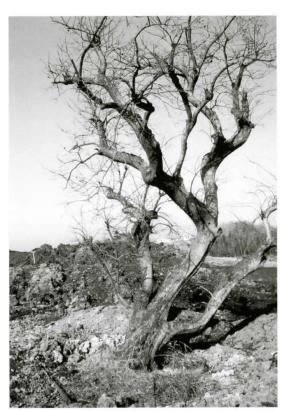
昭和18(1943)年。当時この地域では養豚業がさかんに行 われていた。(写真:牧野宏さん)



昭和4年頃。大熊にてメロンの栽培。(写真:『都田村誌』より転 載)



昭和36(1961)年頃。大 棚町。皆川健一さんの 鶏舎。上の写真は鶏卵 用の鶏舎、下は肉鶏 (ブロイラー)の飼育。 (写真:皆川健一さん)



昭和60(1985)年頃。移植したが枯れてしまった柿 の木。どこの家でも庭や畑に必ず柿の木を植えて いた。手間がかからず甘い実は農家にとって重宝 な食べ物だった。(写真:男全冨雄さん)

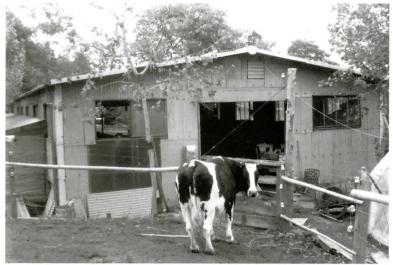


昭和32年頃。酪農家の娘達。(写真:金子三千男さん)









昭和32(1957)年頃。男全牧場の牛舎と牛。(上の写真2枚:金子三千男さん)



昭和40(1965)年代。農協トラックに牛乳缶を積んで集荷するところ。(写真:信田隆治さん)

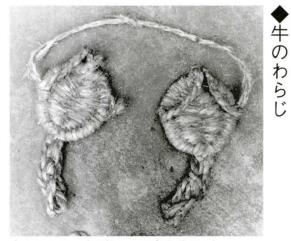
昭和27(1952)年。「牛乳一石突破祝賀会 北山田酪農部」の 看板が見える。前列左が馬場先生、その隣が安藤先生で農 業指導を担当していた。(写真:男全冨雄さん)



牛や馬に与える草や藁を細かく切るための道具「押し切り」を 使っているところ。とぎ汁や糠などを混ぜて与えた。 (写真:安藤マサ子さん)



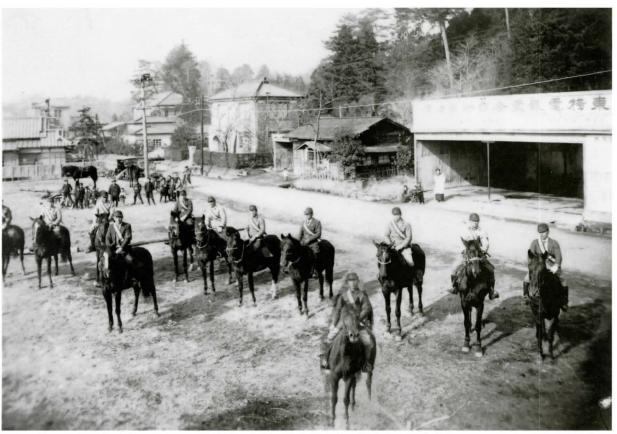
昭和40(1965)年代。水田を耕す牛。(写真:信田隆治さん)



牛のわらじ。(写真:土屋幸之助さん)



昭和40年代。谷本川の土手で草をはむ農耕牛。(写真:信田隆治さん)



昭和初期。都筑郡役所前に集合した調教馬。右側の建物は東横電鉄乗合自動車車庫、一つおいて都筑郡役所。 手前の道路は横浜上麻生線の旧道で左が貝の坂、右に向かって市ヶ尾方面になる。当時は都筑郡の行政の中心が この辺に置かれ、法務局、横浜区裁判所川和出張所、郵便局、警察署などが集中していた。(写真:男全冨雄さん)

調教馬の訓

出発した。 舟)などをトラックに積み込み、 ヤツガシラ、しいたけ、 チほどの木の舟を大工に頼んだり自分で作ったりして、 洗った葱を大束に束ねる)、宝舟(長さ約一メートル五〇セン 作った梅の花。一個の白菜を中心に五個の白菜で花びらのよ うに囲み、赤い紐でしっかり結わえて作る)、葱の大束(よく 正月二日は各部落毎に初荷を作り、大々的に市場へ出荷し 支度は暮れの二十日頃から始められ、白菜の梅鉢(白菜で 大根、 人参などを飾り付けた祝いの 旗を立て、組合員の見守る中

昭和33(1958)年頃。初荷風景。「祝 都筑中川農業協同組合」 の幟[のほり]が見える。白菜や大根の荷に、松竹梅の飾りをつ けて盛大に出荷した。荷を乗せてあるのは時代を思わせる3輪 トラックである。(写真:金子保さん、田中孝長さん)

港北ニュータウン郷土誌編纂委員会 640ページ 毛布などでくるんだりして気を使ったという。 であった。

寒さの厳しい季節なので、

野菜が凍らないように

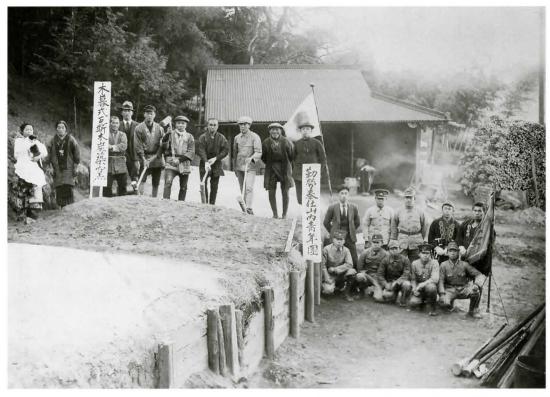
(『都筑の民俗

その年一年の順調な生産を祝って行われた年の始めの行事



昭和34(1959)年。茅ケ崎町の出荷組合の初荷風景。五反田市場へ向かう。このケヤキは今も健在。(写真:田中孝長さん)





昭和14(1939)年。小暮式瓦 斯木炭築窯。国策による奨 励事業として木酢の生産を 課せられ、今の矢崎橋あた りに窯を築いた。山内青年 団が勤労奉仕で行った。 (写真:大久保正治さん)



② 奥さんがサンゴ差し(竹のへら)で藁を送る。



③ 主人がヒドリ(奥さんが送ってきた藁を引いて、縄を交差させて織 りあげていく)作業をしている。

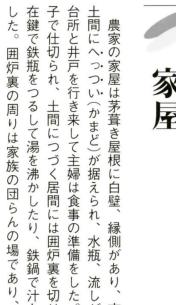


むしろ編み



昭和50(1975)年撮影。都田西小学校開校記念行事としてムシロ 織の実演の前に、自宅でリハーサルしている高橋さん夫婦。(写 真:高橋一夫さん)

①織り機をはさんで両側から小手縄を渡し織る準備をしている。



台所と井戸を行き来して主婦は食事の準備をした。 在鍵で鉄瓶をつるして湯を沸かしたり、 っつい(かまど)が据えられ、家屋は茅葺き屋根に白壁、緑 土間につづく居間には囲炉裏を切り、

水瓶、

流しがあった。この

部屋は襖や障 天井から自

鉄鍋で汁ものを作ったり

また客間でも

関家は『新編武蔵風土記稿』にも出てくる勝田町の旧家で、江戸時代は代々名主を勤め たといわれている。この門は寄棟造で明治時代に二階を継ぎ足し扉構えを改めた。昭 和53(1978)年に国指定重要文化財に指定された。(写真:小島晴光さん)



吉川邦男宅。この写真のようにどこの農家にも庭先には 洗い場があった。(写真:土屋幸之助さん)



北山田重代谷戸にあった男全冨雄宅。 (写真:男全冨雄さん)



吉野一雄宅。庭先にブランコがある。(写真:土屋幸之助さん)



昭和60(1985)年2月撮影。荏田南地区の民家。(写真:小島晴光さん)



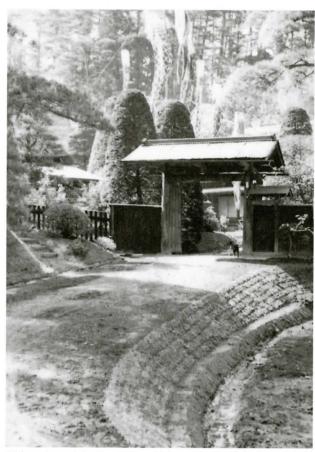
昭和13(1938)年頃。関家の裏山から撮った屋敷。奥に見える道が中原街道。 (写真:関義和さん)



雪の日の鈴木光治宅。(写真:小島晴光さん)



鈴木貞助宅。茅葺きの二階家が珍しい。(写真:土屋幸之助さん)



昭和13(1938)年頃。端午の節句の頃の関義和宅の門から 庭を見る。(写真:関義和さん)





上-開発初期の長澤助夫宅の母屋。下-この家が移築保存され、都筑民家園になった。季節を感じさせる行事で賑わう。(写真:上-土屋幸之助さん、下-都市基盤整備公団)

三業が行われた。 、は、昭和55(1980)年1月、旧家屋の解品田七丁目(当時北山田町)の安藤僎氏



解体前の全景。母屋は大正時代に建築されたもの。



⑨ 柱や土台を片付ける



10 跡形もなく広々と敷地が残る



⑪「すごい顔」と言われてもにこにこ



12 途中の休憩で一息入れる



⑤ 屋根の骨格が現れる



⑥ 屋根組が取り除かれる



⑦庇、壁が取り除かれ、柱がむき出しに



⑧ 綱を引き柱を倒す



、当時は各地で。親戚や隣近所

① すげ(藁で作る簡単な紐)作り



② 棟瓦外し

も真っ黒になりながら着々と進められた作

その日に完了。舞い上がる煤で顔も体 日目は準備、二日目は朝から作業を始 このような光景がよく見られた。 協力を得た短期の作業で、 家族を除く参加者は40



③ 解体作業開始



④ もうもうと舞い上がる煤と煙





解体後新築された安藤家。裏の竹薮は横浜国際プールの緑地 帯に続いている。(写真:安藤マサ子さん)



上一平成9(1997)年4月。区画整理区域内では最後の改築となった深川輝 夫家。いよいよ取り壊しの朝、記念に撮影。数代にわたって使ってきた 母屋ともお別れだ。下一屋根の萱はすっかり取り払われ、骨組みがむき 出しに。作業の人々の顔は真っ黒だ。右から深川清治さん、関清司さ ん、深川輝夫さん、佐藤松尾さん。(写真:深川輝夫さん)





昭和45(1970)年、母屋の解体前に記念撮影。苺の箱で「サ ヨナラ」の文字を試しに作り(上)、屋根の上に組み立て遠 方から撮影。手前に見える畑には現在はマンションが 建っている。(写真:並木誠久さん)



昭和46~47(1971~1972)年に町内の役員の方々が手伝って行われた、内野鶴雄 宅の解体作業。その後、内野宅はせせらぎ公園内の古民家として移築保存され た。(写真:大矢安夫さん)



移築後の内野家住宅。(写真:田園都市出版)





昭和43(1968)年。右上一高橋家の旧家屋の雪景色。右中一旧家屋が壊され、新家屋の土台が築かれる。右下一柱が建てられる。左上一梁が渡され、骨格ができあがる。左下一上棟式。餅投げに大勢の人々がかけつけた。(写真:高橋一夫さん)











昭和39(1964)年。左一改築した皆川家の上棟式で、職人一同が記念写真。前列右端が棟梁の松本静雄さん。上一上棟式での投げ餅の風景。隣近所、親戚縁者にお餅をふるまい新築を祝う。現在もこの風習は続いている。後方に見える山林は勝田、茅ケ崎地区。(写真:皆川健一さん)

どにもその時代ならではの特徴が見られる。 時代を最もよく表すのは人々の肖像写真である。

という一族の絆の強さが浮かび上がってくる。

雄弁に語りかけてくる物語性も垣間見られる貴重なものである。

寄せられた写真は大正末から戦後数年までのものだが、祖父母、親戚、

兄弟姉妹、

一堂に集まった小島家の家族と親戚。(写真:小島喜治さん) 昭和初期の頃。



昭和6(1931)年。縁側で祖母(左から3人目) を囲んで家族の記念写真。縁側のたたずま (写真:牧野宏さん)

山高帽を手にした人、毬を持つ子供、さらに履き物や髪型からも当時の流行や時代性がうか

服装では着物に羽織、

袴、

帯など、

持ち物では

表情はもちろんのこと、

服装や持ち物な



大正13(1924)年頃。男全正吉親子。何か祝い事でもあったのだ ろうか。両親は紋付き、娘たちは着物に袴をはいて盛装してい る。(写真:男全冨雄さん)



祖父、父母、娘たち。昭和8(1933)年頃。(写真:安藤マサ子さん)

昭和22(1947)年。自宅前で撮った結婚式記念写真。家族、親戚、近所の人が写っている。地面に敷かれた藁は霜害を防ぐためで、当時、冬ともなると小さく切った藁やモミガラをまいて、土が崩れるのを防いだ。農村の結婚式はほとんど冬の農閑期に行われ、この結婚式も2月の良く晴れた日だったという。(写真:信田隆治さん)



て認められ、

嫁入りは農閑期の一月から三月の間に行われた。

主婦としての生活が始まる。

たって祝いがつづき、

また隣近所や親戚への挨拶回りなども

それが終わって家族の一員とし

花嫁はくたくただったという。

冢の結婚であった。それだけに嫁入りは盛大に行われ、

婚姻は家の繁栄にとって重要なことであった。現代のように自由

親や親戚によって話が進められ決まる、

わば

間にわ

行

昭和8年頃。嫁ぐ日に母を真ん中に姉妹たちと撮った記念 写真。(写真:安藤マサ子さん)



昭和27(1952)年。花嫁が嫁ぎ先に到着し家族に迎えられる。 (写真:男全冨雄さん)



昭和41(1966)年。結婚式の日に、庭先で家族と記念写真。 (写真:皆川健一さん)



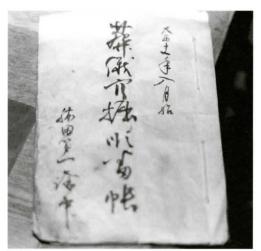
昭和36(1961)年。三輪トラックに嫁入り道具を積んで、近所の 人見送る中、荷物を送り出す。3月頃、庭に雪が残っている。 (写真:皆川健一さん)



和43(1968)年当時の葬儀。① 高橋家の祖父の葬儀。当時はまだ土葬だった。 写真前列の4人の男性が棺を担いでいる。階段のところでは6人で担いだ。棺の上 に天蓋がかけられている。



その後ろに鉦[かね]、銅鑼[どら]、妙鉢[みょうは ち]を持つ人が続き、神妙な中にも音や幟[のぼり]、 花、そして大勢の人が見送る葬送の行列が続いた。 (3枚の写真:高橋一夫さん)



葬儀穴掘帳。(写真:土屋幸之助さん)



中の人々によって念仏が唱えられ故人を偲んだ。

記したものである。 地に穴を掘り埋葬した。 火葬にすることもあった。

辺送りは家族や親類によって、

位牌、

写真、

昭和半ば頃までほとんど土葬であっ

近所の手伝いを受け

② ノボリ、盛花、ツジロウを持つ人、その後に喪主が位牌を持って続 く。辻蝋[つじろう]とは死者が帰るのに迷わないように辻ごとに立てた蝋 燭[ろうそく]のこと。



開発前に撮影。屋敷内の内墓地。(写真:土屋幸之助さん)

供は大切に育てられてきた。



昭和13(1938)年。ようやく立てるようになった子どもが自転車の空気入れにつかまってポーズ。後ろにはいもがらが干してある。当時はどこの家でも里芋の茎を乾燥して食用にした。(写真:大久保正治さん)



大正13(1924)年頃。大きな壷をしっかりとつかんで立ち上がり、歩行に挑戦の子ども。得意な表情が微笑ましい。(写真:小島喜治さん)



昭和10(1935)年。当時の農村風景の中で、農作業の合間に。



昭和16(1941)年。小さい子に身だしなみを整え言い聞かせている母と、 緊張した表情の子ども。(上2枚の写真:牧野宏さん)

に、たおやかな子供世界をみに、たおやかな子供世界をみに、たおやかな子供世界をみに、子守や時の思いが伝わってくる。 当時の思いが伝わってくる。 当時の思いが伝わってくる。



昭和11(1936)年。苺をほおばる姉妹。



昭和10(1935)年。オモチャの車に乗る子供。



昭和10年。三輪車 に乗る子供。(上3 枚の写真:牧野宏 さん)



昭和12(1937)年頃。洋服の子、着物の子、弟妹を子守している お姉さんなど。(写真:大久保正治さん)





昭和29(1954)年。草原で遊ぶ子供達。(写真:田中孝長さん)



昭和10(1935)年。上2枚の写真は北山田地区の農繁期共同保育の子どもたち。下は山田富士に登って撮影。遠景に当時の田畑が見える。 (写真:男全冨雄さん)



昭和34(1959)年。佐江戸子供会が横浜市子ども祭に参加した時の記念写真。 (写真:高橋一夫さん)



昭和16(1941)年。縁側での母と子。 (写真:牧野宏さん)

青年期を迎えた村の若者たちは青年団に



げることをよしとされた。 どで体力と技を競 ラソンやバスケット 女子は裁縫の稽古に励み、 ボー またスポー バ 日に浴衣一枚縫い上 ツを通して交流が ボー 剣道な

昭和9(1934)年頃。川和町(旧都田 村7部落)で、神社参拝リレーを 行った時の各部落役員選手一同。 (写真:牧野宏さん)



昭和13(1938)年9月。都筑郡連合 青年団体育大会での優勝記念写 真。剣道、バスケット、陸上の選 手たち。(写真:皆川健一さん)



昭和35(1960)年。茅ケ崎町青年会の若者達。

(写真:田中孝長さん)



昭和26(1951)年頃。中川駅伝に参加した北山田富士若の青年たち。 当時は地域の結束、体力の増強、親睦をかねて村をあげて駅伝に取 り組んでいた。(写真:男全冨雄さん)

た。いや躾が行われてい仕事をしながらふれあ は家事や農作業も子供族そろって休憩。主婦 を見ながらの仕事で、 時のお茶の時間は家側の合間にも10時、

冢事と団らん



昭和35(1960)年頃。北山田。親、嫁、孫が揃ってお茶の ひと時を過ごしている。(写真:金子三千男さん)



昭和53(1978)年頃。端午の節句に庭先にむしろを敷いて 団らん。茅葺き屋根の旧家屋、鯉のぼり、のんびりとし た暮らしの一こま。(写真:安藤マサ子さん)



昭和31(1956)年頃。日向 で繕い物をする祖母。障 子の切り目は猫の通り穴。 (写真:並木誠久さん)





昭和半ば頃。女性にとって針仕事は大切な教養の一つ。縫い物が上手に なるようにとの願いを込めて、使い古した針を一年に一度供養の行事を 行った。針を刺しているのは豆腐で、心を合わせて祈っている。淡島神 社では3月3日の大祭日に現在も行われていると『都筑の民俗』(650ペー ジ)に記されている。(写真:皆川健一さん)



大正7(1918)年頃。中川小学校高等科の女学生たち。 (写真:男全冨雄さん)



昭和17年頃。女子青年団が蓄音機の音楽に合わせ、踊りの練習をしてい る。(写真:大久保正治さん)

昭和33(1958)年頃。北山田の農家。子どもを遊ばせながら家事には げむ主婦。さつまいもを洗っている。(写真:金子三千男さん)

る

は人生の目標であり頂点であるとの思いを強くす

顔を見るのは、何と素晴らしいことだろう。

々の



昭和45(1970)年頃。 縁側でくつろぐ祖父 母。安藤千代松さん (当時80歳)と妻のキ ヨさん(当時75歳)。 (写真:安藤マサ子 さん)



昭和30年代。米寿の祝い。(写真:皆川健一さん)



昭和30年代。明 治・大正・昭 和、そして戦 前・戦後と年輪 を刻み、たくま しく生きてきた 優しい祖母の 顔。(写真:皆 川健一さん)



昭和30(1955)年。茅ケ崎地区敬老会記念写真。(写真:田中孝長さん)



昭和初期の頃。軒先で日向ぼっこをしている祖父母と孫。右奥 に馬の顔が見える。当時、祖父は馬の調教をしていた。ムシロ を敷きゾウリを脱いできちんと座っている後ろには、干してい る大根や米俵、農具も見える。当時の暮らしをほうふつとさせ る写真である。(写真:男全冨雄さん)

.田郷土資料館

田郷土資料館」に保存、 (写真:田園都市出版

む栗原満直さんは解体される家屋に出掛けては昔の道具や農具を収集し、自らが設立した「東山

暮らしそのものも大きく様変わりした。

東山田に住

一般公開している。ここにはかつての暮らしがぎっしり詰まっている。

開発によって旧家屋はほとんど解体され、



館長の栗原満直さん。



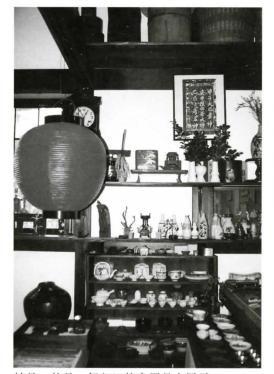
セイロ、杵など台所用品。



釣瓶井戸の滑車。



当時に思いをはせる来館者。



神具、仏具、祭りに使う用具を展示。



いろり、自在鈎にかけられた鉄瓶、かたわら の鉄鍋など、家族の団らんの場であった居間 を再現。

館内に一歩入ると目に飛び込むさまざまな古道具や古文書。開発前の暮らしを知っている 人々には懐かしく、新しく移り住んだ人々にとってはこの地の歴史を知る格好の場になって いる。資料の持つ価値はもちろんのこと、使い古された道具からは昔の人々の思いがにじみ 出て、かけがえのない遺産となっている。

東山田郷土資料館は毎週水曜日か木曜日に開館。来館前には電話を。

☎045-591-6493



が載っている。52頁に及ぶ膨大な書物で、

開発前の民俗資料

纂委員会による『都筑の民俗』が発行された。8(平成元(1989)年、港北ニュータウン郷土誌編)



ハコゼン(箱膳) 茶碗、お椀、小皿、箸の一組を箱膳に 入れ、席の前に置き食事をした。

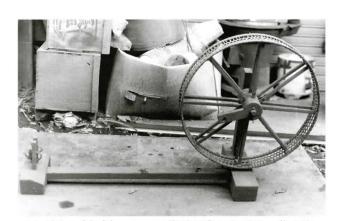


『都筑の民俗』





イモアライ 里芋を入れて洗う道具。



真のご提供をいただいた。

んによって、今回、暮らしに関わる幾つかの写この委員会の事務局長を務めた土屋幸之助さ

イトグルマ(糸車) かつて養蚕が盛んな頃は、繭で取った糸をイトグルマ(糸繰り車)で巻き、機を織った。



エブリ 苗代を造る時に土の塊をほぐす道具。このエブリで全体を平らにならして田の整地をする。



田のスジヒキ 田植えの時、苗がまっすぐに植えられるようにあらかじめ線を引くための道具。(民具の写真:土屋幸之助さん)





華道の展覧会 大正時代。皆川健一さんの曾祖父は華道をたし なんでいた。これは展覧会を開いた時の貴重な写真で、床の間 に飾られた掛け軸には「古法流挿花 旭光斎一恵」と読める。作 品はいずれも、花器、材料、技巧ともすばらしいもので、現代 華道の趣が見られる。大正から昭和にかけて港北区高田近辺に 華道の師匠が住んでいたとの記録もあり、その流れをくむものだ ろう。(写真:皆川健一さん)



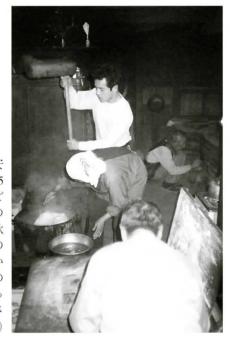


イモフルイカゴ 竹カゴはさまざまな使用別に作られて いた。イモフルイカゴは主に芋類を入れ簡単な水洗や保 存に使っていた。(上2枚の写真:土屋幸之助さん)





右上はへっつい。下と左は安 藤家の炊事場で、昭和30(195 5)年代のレンガ造りのかまど である。燃料は薪、藁、木の 葉などで、薪や木の葉は晩秋 のころ山に出かけて集めるの が仕事だった。かまどは広い 土間の片隅にあり、祝い日の 餅つきなどは家族総出で行っ た。(写真:上-土屋幸之助さ ん、下・左-安藤マサ子さん)

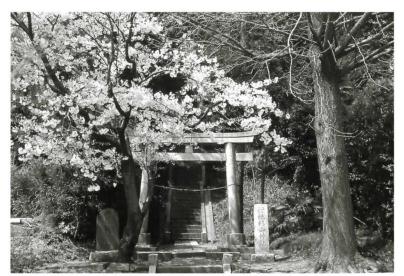




なども行われ村人の大きな楽しみであった。 神社の祭りは昔から受け継がれ、 祭礼後は演芸大会



車。豊年祈願の思いをこめ、農道を練り歩く。金棒を持った女性、花 後ろに山車が続く。(写真:金子三千男さん)



平成元(1989)年4月。桜の茅ケ崎杉山神社山門。(写真:小島晴光さん)



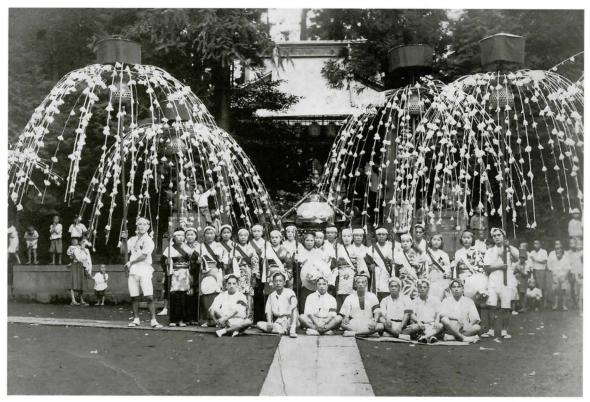
現在の茅ケ崎杉山神社本殿。(写真:田園都市出版)





上-提灯や杉葉で飾り、彩りも鮮やかな囃子連。下-三輪 自動車には茅ケ崎牧場と記名があり、この頃茅ケ崎にも牧 場があったことがうかがえる。(写真:金子三千男さん)

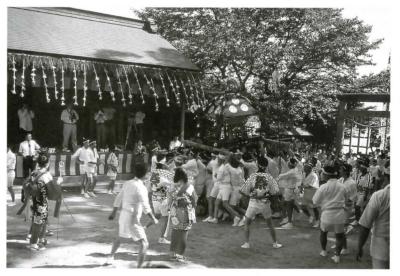






上一昭和21(1946)年9月20日に行われた池 辺町杉山神社例大祭。花籠に挟まれ中央 に鎮座しているのが御神輿。立っている 女性達は手に金棒を持っているが、花 籠、御神輿の行列を先導する役目で金棒 引きといわれた。白い半纏に赤い袴、頭 にはきりりと鉢巻を締め、行列の前後左 右を歩く姿は華やかだった。

左-仲良しの女性だけで撮った記念写 真。(上2枚の写真:鈴木孝晴さん) 下2枚-平成3(1991)年の祭りで、花籠の 舞はこの年が最後となり現在は行われて

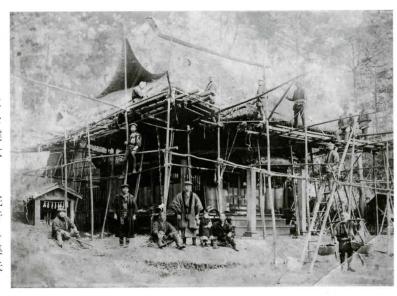




大正12(1923)年9月1日に起こった関東大震災はこの地域に も大惨事を引き起こし、佐江戸杉山神社も「大破の大きな 被害をこうむった」と『佐江戸誌』に記してある。そこで震 災復興神社改築委員会を発足し、改築にとりかかった。大 正15(1926)年3月起工、同年12月竣工とある。

右一拝殿の屋根葺き替え工事の一風景。

下-昭和3(1928)年。復興修復工事と新たな付帯工事の完 成を祝って、遷座祭と一大祝賀の式が行われた時の花籠行 列の記念写真。丸子・中山・茅ケ崎線(現)の路上に整列し ている。背景の森は神社。子供をはじめ大勢の見物客が集 まり、震災復興の喜びに沸いている。(写真2枚:高橋一夫 さん)









上一昭和31(1956)年頃の佐江戸杉山神社。左一昭和45 (1970)年頃の山門。(写真2枚:並木誠久さん)



昭和21(1946)年9月27日、佐江戸杉山神社で行われた演芸会での記念写真。(写真:菅沼義治さん)





平成13(2001)年7月の佐江戸杉山神社。 (写真:並木誠久さん)



昭和18(1943)年、佐江戸杉山神社で行われた出征家族慰安演芸会。 昭和16(1941)年に始まった太平洋戦争は次第に戦局を濃くし、この地からも多 くの男性がかり出されていった。残った女性、子供、老人が家庭や村を支えて いたが、彼らを慰め元気づけるために手作りの演芸会が開かれた。物資も乏し く、仮設舞台の垂れ幕に商店の旗を使うなど、当時の様子がうかがえる。出演 者も全部村の若者たちで、写真上はハーモニカ合奏、上左は村の女性たちによ る舞踊が演じられている。(写真:岡本徳蔵さん)



③村中を練り歩く。



④ 御輿を先導する。

写真①~⑥は、昭和33(1958)年頃の山田神社大祭。

① 山門で記念写真の御輿の担ぎ手たち。② 祭りを盛り上げるために 囃子連を乗せた軽トラック。笛や太鼓のお囃子を奏でながら、村中に 触れ廻る。竹垣に囲まれた旧家や砂利道はかつての村のたたずまいを 色濃く物語っている。場所は北山田重代谷戸の辺り。③ 神社を出た 御輿は激しく揺すられ、傾くこともしばしば。誘導者の笛に合わせ、 村中を練り歩く。④ 御輿を先導する金棒を持った女子青年団。揃い のゆかたに揃いの帯を締めて先導する。⑤ 10月の稲刈りの済んだ田 圃に落ちそうになる御輿。⑥屋敷端の土手に倒れ込んだ御輿。絶妙 な指揮のもとに力をぶつけながら練り歩く様子。

(写真:金子三千男さん)



明治14(1881)年。陸軍省の測量担当者による山田神社門前のス ケッチ。鳥居から続く石段は、道路拡張のため間もなく壊さ れ、この景色は見られなくなる。(写真:男全冨雄さん)



開発当初の山田神社。(写真:土屋幸之助さん)



①御輿の担ぎ手たち。



② 囃子連を乗せた軽トラック。



平成8(1996)年の祭礼。かわいいチビッコたちが御輿を引いてい



平成13(2001)年の祭りは中原街道拡幅工事のため山門を削るこ とになり、最後の別れの祭りとなった。急な石段を御輿を担い で登り降りして別れを惜しんだ。(写真:田園都市出版)



⑤田圃に落ちそうになる御輿。



⑥土手に倒れ込んだ御輿。



昭和25(1950)年頃。山田富士桜祭りで開かれた富士若青年団主催演芸会の出演者の記念写真。(写真:男全冨雄さん)





右上-開発前に吾妻山にあっ た中川・大棚杉山神社。(写 真:土屋幸之助さん)

右下-平成7(1995)年、セン ター北駅前に改築移転した新 社殿。

左上-盛大な落慶式が行わ れ、囃子連中を乗せた軽ト ラックが町中を練り歩いた。 左下-手水鉢の台座左側面に 「安政三丙辰二月吉日建 願 主 栗原恵吉」と刻まれ、江 戸後期のものとわかる。(写 真:田園都市出版)







昭和3(1928)年。御大典奉祝行事として繰り広げられた仮装行列。(写真:大久保正治さん)







昭和20(1945)年前後の写真。元旦祭か例祭のため村人が参列している。開発前、牛久保町505にあった神明神社は牛久保の神社として親しまれてきたが、開発後は現在地の牛久保西一丁目に移転改築し、明治以来の記録をもとに「天照皇大神」として名称を確定した。(写真:小島喜治さん)







上-平成10(1998)年10月。本殿、社務所、鳥居、参道を含め全く新しい神社として完成。写真は参道整備も終わりの頃。 左上から

- ●新社殿が完成し、遷座式を行う。
- ●奉祝大祭の朝、稚児行列が長徳寺からスタート。神主、建設 委員長を先頭に華やかな行列が神社に向かった。
- ●奉祝大祭のクライマックスは餅投げ。境内は大歓声に包まれた。
- ●祭りも済み、三々五々、参拝をして帰路につく。

天照皇大神は緑道「くさぶえのみち」に沿った住宅地に建っている。神社裏の緑道の対岸に、牛久保公園のこんもりとした森があり、その頂上は、開発の過程で神社が一時仮移転していたところでもある。 爽やかな緑の中に、地域の鎮守として昔から人々に親しまれてきた神社の物語が秘められている。

(写真:『社殿改築御遷座記念誌』より転載)

水神祭と神主の

平成4(1992)年撮影。中川町では春3月に八幡様と水神様の 祭りが行われていた。写真は祭りに先立ち、早渕川沿いに ある水神様に参拝する人々。(写真:田園都市出版)







昭和50(1975)年代撮 影。水神様の参拝の 後、八幡様で祈祷、神 主の舞、最後に餅投げ が行われ一年の豊作祈 願をした。

上一舞に使われる面。

中一神主が面と衣装をか えてさまざまの舞を舞

下-祭り太鼓をたたく大 久保竹治さん。

(写真:土屋幸之助さん)



昭和4(1929)年頃の東方村社天満宮。(写真:『都田村誌』 より)







天満宮は学問の神様、菅原 道真を祀った神社で、今で も受験生の合格祈願が寄せ られるという。境内の梅林 は見事に手入れされ、2月 には梅祭り、6月には収穫 が行われている。写真は平 成7(1995)年に行われた梅 祭り。

上一句会の講評。

中一傍らでは野点が華やか な雰囲気を醸し出してい

下一梅の枝にとりつけられ た俳句。

(写真:田園都市出版)

大鷲神社と酉の 市



昭和10(1935)年頃、関家の屋敷隣にあった稲荷社。境内には松 の大木があり、周囲は杉や雑木の樹林に覆われ古の風景をほう ふつとさせる。(写真:関義和さん)



上写真の稲荷社は平成 11(1999)年に改築さ れ、新しい装いで中原 街道沿いに建ってい る。(写真:田園都市 出版)



昭和50(1975)年代撮影。早渕川を見下ろす中川の丘の上 に建つ稲荷社。遠方の風景は柚の木、荏田方面。現在も 朱色の鮮やかな装いで畑の中に建っている。(写真:土屋 幸之助さん)



稲荷社







茅ケ崎東にある古刹・ 正覚寺は花の寺として 多くの人々が訪れるが、 境内に大鷲神社があ り、11月に酉の市を開 いている。写真は平成3 (1991)年の酉の市の光

上から●境内にある大 鷲神社。●熊手売場。

●地域の人々による焼 き鳥やさん。●賑わう 人々。

(写真:田園都市出版)

村の青年男女が日頃から練習を重ね、

素人演芸とはいえ、その熱演ぶりに盛んな喝采で沸いたという。

衣装をこらして晴れの舞台で披

手作りの歌や踊りや演劇は村人の楽

たまらだが、誰もがたまに旅回りの芸人

今のように娯楽の少ない時代。

た。一部は礼拝と御輿を担いでの奉納、二部は演芸大会であった。

|村の鎮守の神様||の祭りである村祭りはたいてい二部形式で行われて

自由に出入りできる演芸大会は無料ということもありどこも盛況を呈

サーカスなどが来て小屋がけをしたこともあったようだが、

大勢の見物客が遠方からもつめかけた。



◆剣舞の練習

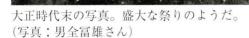
昭和7(1932)年。中川小学校校庭で剣舞の練習をする中川町の青年たち。暇を作って練習し、 村祭りなどで披露した。(写真:皆川健一さん)



昭和21(1946)年4月28~29日。川和男女青年会主催演芸会の記念写真。(写真:信田隆治さん)

また、本殿や山門の新築も相次いで行われた。 開発による造成工事では先行して墓地の移転が進められ この地域には寺院が多いといわれている。 檀家や世話人を置いて密接に結びついてきた。

各村ごとにあ







平成4(1992)年、雪の日の山門と本堂。 (上2枚の写真:田園都市出版)





昭和57(1982)年4月。再建落慶法要が盛大に行われた時の写真。 この再建は、昭和39(1964)年に本堂焼失後、港北ニュータウン建設計画 の中で約18年間仮本堂での営みを余儀なくされ、昭和56(1981)年ようや く現在地に建設が決まって建築されたもの。地元の喜びも大きく、稚児 行列も繰り出して祝った。(写真:横浜市)



平成6(1994)年の茅ケ崎町の観音堂。(写真:森寛さん)







観音堂は茅ケ崎城址の北西に隣接し、毎年8月18日の観音 様の命日に法要が行われ、前夜の宵宮ではお囃子が奉納 される。

上一平成4(1992)年に行われた宵宮。中・下一茅ケ崎祭り 囃子の撮影風景。獅子がじゃれている場面とおかめや ひょっとこが踊る場面。(写真:田園都市出版)









昭和61(1986)年4月、正覚寺山門落成記念式典が行われた。 上から●村道を歩く稚児行列。●山門から本殿に向かう僧侶。 ●稚児行列に参加した子供たち。●山門前で記念撮影。(写真: 小島晴光さん)





上-開発前昭和50(1975)年代の茅ケ崎町の自性院本殿。 (写真:土屋幸之助さん)

下-平成2年撮影。茅ケ崎南に移転改築後の自性院。

(写真:田園都市出版)



平成2年撮影。南山田にある大善寺。 (写真:田園都市出版)





東山田にある観音寺は昭和59(1984)年5月、改築した本殿の上棟 式を行った。上一観音寺遠景。この景色はもはや見られない。 中一式典が終わり、祝いの餅投げを待つ。下一餅投げの光景。 (写真:小島晴光さん)



平成2(1990)年撮影。 荏田東にある法道寺。 (写真:田園都市出版)





平成7(1995)年頃の撮影。中川三丁目にある老馬鍛冶山不 動尊。境内前面の崖から湧き出る水に霊験があるとの言 い伝えがあり、滝不動ともいわれている。(写真:田園都 市出版)



平成2年頃の撮影。荏田東にある心行寺。



現在の清林寺。竹林に囲まれた丘の中腹に静かにたたず んでいる。明治初期、中川小学校の前身、大棚学舎が置 かれた。(上2枚の写真:田園都市出版)

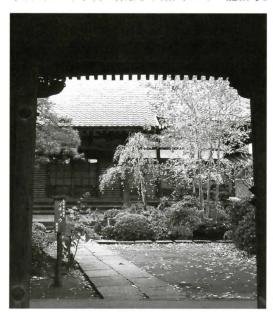




上-開発当初の長泉寺。(写真2枚:土屋幸之助さん) 下一平成2(1990)年撮影。(写真:田園都市出版)



平成6(1994)年頃の撮影。大棚町にある龍福寺。



平成2(1990) 年撮影。勝田 町にある最乗 寺。(上2枚の 写真:田園都 市出版)

▼最乗寺



昭和48(1973)年撮影。佐江戸地区、高橋家の屋敷内にある石橋地蔵尊。 このお地蔵様は延命地蔵と言われている。顔は磨耗し文字も読みにくい が、正面に刻まれた文字は「三界萬霊□□□縁 延寶己未□日 佐江戸 村祈建立」とあるので、江戸初期の頃に建てられたようだ。言い伝えに よると、明治29(1896)年6月、病に苦しんでいる人の枕元にお地蔵様が 現れ、「草むらに放置され淋しい」と告げたことから、発願人を立て村内 に呼びかけて御堂を再建したという。古くから毎年3月の彼岸に供養が 行われていた。『佐江戸誌』参照。

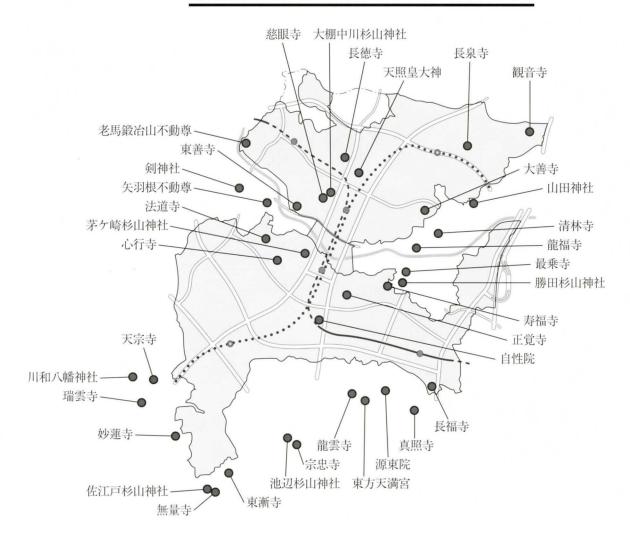
右上ー改築後の新しい地蔵堂。すぐ側を走る中原街道の道路拡幅のため 改築された。右下-参拝する人々。上-堂内の地蔵尊。

(写真:高橋一夫さん)





▶港北ニュータウン地区の主な神社仏閣



和 の菊

期の文政の頃、 村誌』によると、

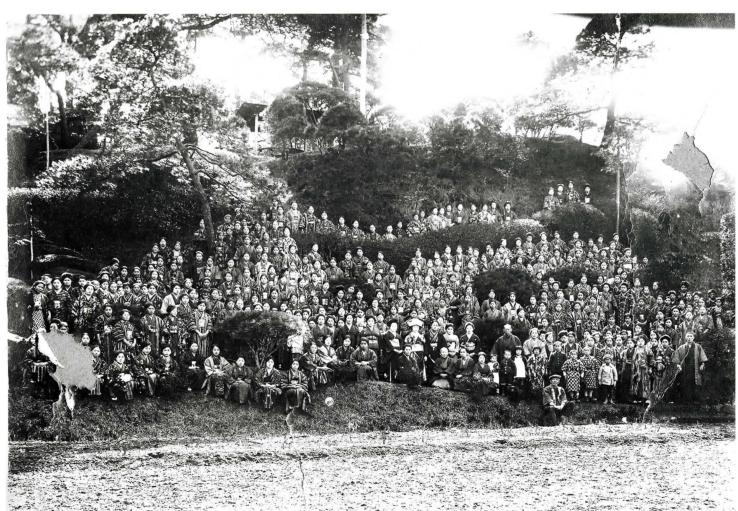
年発行の

和初期には宮内省献納8種に達したと記されている。 和の菊」は川和の名を全国に広めた。 幕臣より譲り受けた苗を新種育成に努力を重ね、 中山家の祖父にあたる恒三郎氏が江戸時代後

の紀行文が載った。 寄せられた写真の中に菊花展のものがあり、 当時の有力者が菊の観賞に中山家の松林圃を訪れることもしば また、大正15(1926)年の國民新聞には文豪・徳富蘇峯の観菊 当時を彷彿とさせ

下の写真は中山家の屋敷のようだが今では状況がわからない。





撮られたのか、まったくわからない。川和町にお住まいの信田隆治さんの話によると、手前に菊の花、背景に築山があるので、中山恒 三郎さんの屋敷だろうという。最前列に庭師らしき人物、その後ろの中央に花嫁姿の女性、植え込みの間には大勢の女性達が並んでい る。時期も昭和3年頃ではないかということだった。お二人からご提供いただいたので、この地域の貴重な記録写真であることは間違 いないといえるだろう。(写真:高橋一夫さん、関義和さん)

いて食べると無病息災のご利益がある またダンゴを三つ又の樫の枝に刺して

使った枝を玄関に置いておけば泥

作になるなどの言い伝えもある。

よけになるとか、柿の木をたたけば豊

今でも町会毎に行事化しているとこ

女の子のお祝いをした。



昭和12(1937)年頃のひな壇。(写真:大久保正治さん)

は習字の紙や答案用紙を燃やし、 昔から受け継がれてきた行事で、 この近在ではセイノカミともいって、 竹や古いお札、達磨などを燃やした。 て組み上げ、 よくなるともいわれた。 上がれば字が上手になったり、 1月1日、各部落毎に竹を切り出し 年末の掃除に使ったすす 成績が 学童





平成3(1991)年1月に行われた牛久保東のどんどやき。 り火でだんごを焼く。下一後始末の後は町会役員の親睦会。 (写真:川上昇さん)



竹を組み合わせ、 正月飾りやお札 などを燃やすど んどやきは、各 地で行われてい た。写真は昭和 60(1985)年頃の 荏田東地区。(写 真:田園都市出 版)







かつて純農村地帯だった港北ニュータウン一帯は、夏の 土用の頃、どの地域でも稲の害虫を追い払う「虫送り」が 年中行事として行われていた。この伝統を絶やさないた 南山田町では町内会、子供会を中心に行事化し、 夏のイベントとして行っている。写真は平成6(1994)年に 撮影したもの。上一松明をかざして歩く人々。下一早渕 川沿いの空き地で松明を燃やし、囃子連と子供たちが踊 り明かした様子。(写真:田園都市出版)

れていたが、

今は

お盆を中心に行わ

盆踊りは8月の

各地で行事化し、

の方々を中心に活躍し 芸事が盛んに行われて 稽古に通う人もいた 地域ではさまざまな 八木節もその かつて茅ケ崎に 現在も茅ケ崎 遠方から



を持って輪になっ

て踊る夏の行事に

ば頃までの2~3

浴衣にウチワ

7月末から8月中

昭和30(1955)年頃の川和地区の盆踊り。(写真:信田隆治さん)





八木節は茅ケ崎地区の伝統的な芸能で、地区内の師匠を中心に 同好会を作っていた。上一平成7(1995)年。地域の人に披露して いる場面。下-平成10(1998)年。敬老会で茅ケ崎の小学生が八 木節を上演。(写真:深川清治さん)



平成8(1996)年。北山田地区盆踊り大会。山田富士公園の東側に設営 された会場。遠方にサレジオ学院が見える。(写真:男全冨雄さん)







平成9(1997)年。せせらぎ公園古民家の開園を祝って行われたイベン トで、地域の愛好家による八木節が披露された。 (2枚の写真:田園都市出版)

市民参 加による大規模な開発と

昭和40年に横浜市が発表した市の六大事業の一つに港北ニュータウン建設事業が取り上げられ、地元住民・横浜 市・都市基盤整備公団の三者による開発事業がスタートした。 よる多摩田園都市の建設が先行的に進められる中、計画的なまちづくりの必要性が求められていったのである。 スプロール化現象で、この地も同様であった。これらに対して地元住民や市当局は頭を痛め、一方、東急電鉄に そうした状況の中で、近郊の農村は無秩序な宅地開発が進み、水田や畑は虫食い状態になっていった。いわゆる のどかな農村地帯に都市化の波が押し寄せたのは、戦後の高度経済成長が始まった頃からである。京浜工業地帯 は活況を呈し、 首都圏内の東京・横浜も膨張の一途をたどり、ベッドタウン建設は急務となっていた。

切ったのである。 三者による熱心な調査・研究・討議によって新しい都市の骨格ができあがっていった。とはいっても住み慣れた この事業で特筆すべきことは、規模の大きさや地権者数ばかりでなく、「市民参加による開発」という点だろう。 なく、先祖伝来受け継いできた土地を手放す心の痛みを振り切り、よい街をつくる強い決意のもとに開発に踏み 住居、恵み多い山林、労働の辛さや喜びを共にしてきた田畑の喪失に、地元住民がすんなりと決断したわけでは

受できる陰に、地元住民の決断があったことを忘れてはならない。 山を削り水田を埋め、道路や公園、住宅地になった現在の港北ニュータウン。快適で安全な都市環境の恩恵を享

これらの一連の流れを記録に残すことは、この写真集刊行の一つの目的である。

開発へ動き出

ル化現象 (虫食い状態に市街化が進むこと)

方々の計画的な街づくりのための開発へと、大きく動き出すきっかけになっていった。 迫られていた。スプロール化現象によるこれらのさまざまな問題は、横浜市当局はじめ地元町会役員の 垂れ流しが地元住民とのトラブルにもなり、 通行する道を児童も通るという危険な状態だった。 無計画的に農地・山林が宅地化され、 道路は狭く消防活動もままならないばかりか、 方、 学校では児童数の急増によるプレハブ校舎の建設など また、上下水道も完備されない住宅建設は、

バスや



三丁目地域を中心にした、昭和48(1973)年当時の早渕川沿岸。 農地や山林に無計画的に住宅が建ちはじめ、中には車も入れない狭い道路もあって災 害時の対応に懸念が広がっていた。(写真:都市基盤整備公団)



中川小学校の創立百周年記 念誌『なかがわ』(昭和51(197 6) 年発行) によると、昭和48 (1973)年の項に「プレハブ仮 設教室防音フェンス門扉に 取り付け工事完了」とある。 写真は移転前の木造校舎と プレハブ教室。

また児童数のうつりかわり の表も転載した。(左下の図 表参照。資料:中川小学校)



昭和 (年)	児童数 (人)	中川地区 人口(人)
40	566	6,624
41	595	
42	610	
43	961	
44	859	17,238
45	612	20,770
46	759	23,212
47	989	23,646
48	1,006	25,193
49	1,055	25,754
50	1,111	26,935



昭和48年当時の池辺・佐江戸地区。鶴見川沿いの工業化が進むにつれ住宅が建ちはじめている。 (写真:都市基盤整備公団)

目的として、

日本住宅公団(現・、乱開発の防止、

都市基盤整備公団)による協議が始まり、

都市農業の確立、

Ξ

市民参加のまちづくりをあげ、

この時点か

三者による開発事業がスター

タウン開発事業を打ち出した。

昭和4(1965)年、

横浜市は市の六大事業を発表し、

17ヘクタールという大規模な事業である

面面積は港北区、

緑区にまたがる2530ヘクター

乱開発防止に対しては計画的な街づくりが、

開発の初期段階でたびたび欧米や国内先進地へ視察を行った成果が、さまざまな形で事業に活かされ

調査や視察活動を積極的に行い計画に活かしていった。

都市農業の確立としては農業専用地区等の整備が、

公団施行による区画整理事業の面

は

3

タウン開発対策協議会(後に港北ニュー

タウン

業推進連絡協議会と改組)」を組織し、

加の街づくりとして三者の協議機関である「港北ニュー

都市農業問題調查団

昭和45(1976)年12月。都市農業調査団を結成しアメリカを視察。北見正義さんを団長に、松沢健三、徳江義治、金子保、鈴木清、山本光雄、吉田時雄、菅沼喜代造、田丸政治、斉藤増次郎、福田隆蔵の各氏が参加。港北ニュータウンの農業振興、緑地保全などに活かされた。(写真:徳江義治さん)



昭和62(1987)年6月。アメリカを視察旅行の際、バンクーバーの万博会場跡地で記念撮影。(写真:徳江義治さん)



平成4(1992)年11月。九州、ハウステンボスを視察した第4期区画整理審議会メンバー。(写真:山本光雄さん)



昭和62(1987)年6月。アメリカ視察旅行の際、複合型ニュータウンの例としてラスコリナスを訪れ、模型を見ながら住宅エリア、業務エリア、それを分けるグリーンベルト等、都市計画の説明を受ける視察団一行。(写真:『港北ニュータウン・タウンセンター地区都市経営と街づくりに関する調査研究 北米海外事例編報告書』より)



30万都市に向かって住宅、公共施設等の建 道路、鉄道、公園・緑道、学校、商業業 道路、鉄道、公園・緑道、学校、商業業 前画の見直しと中央地区(24ヘクタール 計画面積は2530ヘクタール、公団施 公共施設等の建設が着々と進められていった。公共を「高莠業務集積地、準工業地、農業専用地区がバランスよく配置され、 タール)の区画整理事業も加わる団施行による区画整理事業が この図面は港北ニュータウン地区の最終 ク ルの土地利用計画図。 目標の

活かされていった。漫然とベッドタウンとして位置づけていた初期段階 どう進めていくか、また、地権者にとって夢や希望の実現をどう図って たが、港北ニュータウンでは、「特別な用地(センター用地、 区画整理法によると、 ニュータウン開発事業の画期的な成果の一つともいえるもので、 業地区と計画的に土地利用することも視察によって学んだことである。 会によって、街づくりの調査・研究が重ねられた。計画的な街づくりを マンション用地、 いくかなど、さまざまな調査や提案を繰り返し、それらの成果は各所に 意向調査を行い、その結果に基づいて遠隔地でも換地が可能としたので イメージを、 欧米や国内先進地への視察や昭和48(1973)年にスタートした建設研究 特筆すべきことは、「申し出換地」の実施があげられる。これは港北 商業地区・アパート・マンション地区・準工業地区・農 工場などの用地、集合農業用地)」については権利者の 換地は元の地所かその近くで行う規程になってい アパート・ 従来の

の会場風景である。 浜市計画局港北ニュータウン建設事務所)から転載したもので地元説明会 あった。左の写真は昭和48年5月発行の『港北ニュータウン』(発行所・横 それだけに地権者は真剣に学び研究し、地元説明会は各地とも盛況で



地元説明会風景。 (写真: 『港北ニュ

都市農業の確立

う地元の強い願いから出たものであった。 な地域である。都市と農業の調和という開発理念も基盤産業である農業を守るとい 東京・横浜という大都市をひかえた港北ニュータウン地区はもともと農業の盛ん

農業専用地区などの農道や潅水施設の整備が行われた。 ニュータウン開発に先駆けて新羽・大熊農業専用地区、 池辺農業専用地区、

朝市」や生産者直売などで市民に提供されている。 現在も手入れされた農地は美しく、生産物は市場に出荷されるほか、 「ふれあ



平成9年8月撮影。 新羽·大熊農業専用地区。 (2枚の写真:都市基盤整備公団)

住民の 敢 i)

足する。 地区は情報交換会を設置し、 区画整理を進める公団、 市の六大事業発表の翌年、 住民の生活権を守る住民組織、 この三者の協議によって開発事業は進められることにな 地元説明会をスター 検討を始め、 計画的な街づくりを目指す市、 「港北ニュータウン開発対策協議会」を発 中川 山内・ 用地買収 新田

による事業の困難は予想もできない大きなものがあった。 開発面積、 地権者数ともに国内では過去最大の規模であり、三者の調整 たびたび工事スケジュールの見直し、延長を図った 特に事業の進展において

にもかかわらず工事がはかどらず、 進連絡協議会」と改組し、 議集会を開いたことはこの事業の大きな山場といえる。 計画と実態が大きくずれ込み、 いをへて、 昭和51(1976)年1月、 その後、 「港北ニュータウン開発対策協議会」を「港北ニュータウン事業推 三者の緊密な連携のもとにより一層協力していくことを確 360名の地権者がバス6台を連ねて市庁舎に出向き、 市・公団に対する住民の抗議行動にと発展して 市 公団への抗議と話

事業は大きく進展していった。

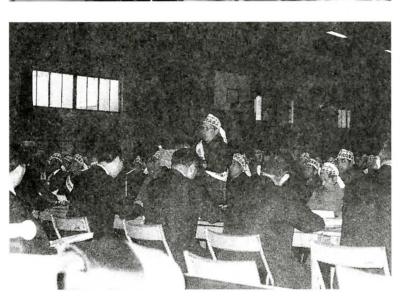


(写真:金子三千男さん)



昭和46(1971)年、地元では地主を中心に開 発対策協議会を作り開発事業に対応してき たが、小規模宅地所有者や一般の住民も参 加した街づくりを進めるために、中川住民 協議会を発足した。左の2枚の写真は設立総 会のものである。(写真:土屋幸之助さん)







昭和50(1975)年11月、港北ニュータウン開発対策協議会定例 会において、公団から工事完成年度の変更の説明があり、地 元権利者が反発。翌51年1月、当初約束の昭和55(1980)年完成 を守るよう、市役所に押し掛けて抗議した。上-市役所口 ビーに詰めかけた地権者。左-会場を高校体育館に移し、市 の担当者を前に抗議文を読み上げる金子保さん。(写真:上一 土屋幸之助さん、下-『設立10周年記念小誌』(財)港北ニュー タウン生活対策協会より)

を受ける。また、発掘調査の行われている現地を見学し、 農協婦人部では勉強会を開催。開発事業の委員から道路・鉄道の整備された近代的な街づくり計画とその進捗状況について説明 造成工事が進み、 田畑が平らにならされ、広大な更地が出現したが、ここに街ができることを想像することは難し 大昔から人々が住んでいたことを学ぶ。

0

まちづくり 性委員会

言をまとめた。 界に開かれたまち」などの提 気あるセンターづくり」、 や会合を重ね、提言として を進めるために発足。見学会 社会進出に対応した街づくり 情勢の変化、 公団主宰の諮問機関で、 「コミュニティづくり」、 まちづくり女性委員会」は 高齢化や女性の







昭和59(1984)年撮影。上一港北ニュータウン街づくり女 性委員会の会議風景。中一広大な造成地を見学し、規模 を実感する。下一最初の街びらきが行われた荏田南商店 街を見学。(写真:都市基盤整備公団)





昭和55(1980)年。上-農協の茅ケ崎婦人部で港北 計画の勉強会を開催。現地案内を受ける。中一造成中の荒涼と した大地を見学。やがてできる街の説明を受ける。



昭和61(1986)年1月。北部工場煙突から撮った茅ケ崎中央 地区。未だNTTがポツンと建っているだけの状態。(写 真:小島晴光さん)

取り組み生活再建

の

らの失業という現実が待ち受ける。街が完成するまでの間の生

造成工事が始まると地権者はたちまち生活基盤である農業か

活手段として地元会社を設立、

地権者の生活防衛が図られた。

.富士組 0 設立

管理など現在も地元企業と造園工事、公園緑地の維持 会社山田富士組に登記変更 して事業を展開している。 ス管理業務を開始。 負ったのが始まり。 住宅公団から仕事を請け から農家の失業対策として全域が造成地になったこと 限会社設立、 63年からは団地サー 55年に株式 造成、 53 年 に



山田

48 (1973)年、

350名が参加。公園緑地の維持管理や造園工事などを請け負い、 昭和50(1975)年、 生活再建も軌道にのったことから解散。 中川地区の地権者の生活対策として北都企業(株)を設立。

都筑中央公園の除草と焼却作業 ている北都企業の従業員。



道路の突き当たりは日吉元石川線中川交差 点に当たる。左側は工事中のサントゥール中川。道路 際の植え込みの除草作業で、一休みする北都企業の仲 間達。(上2枚の写真:深川清治さん)

ニュー タウンサービス株式会社

北

.都企業株式会社

再建という目的を達成したことを受け、 ニュータウンサービス」を設立。 昭和52(1977)年、 せせらぎ公園古民家の移築は思い出に残るという。 山内地区、 。代表に山本光雄さん、7名の取締役で発足した。多くの都田地区、新田地区の地権者の生活対策として「(株)港北 平成11(1999)年、 惜しまれながら解散した。 地権者の方々の生活

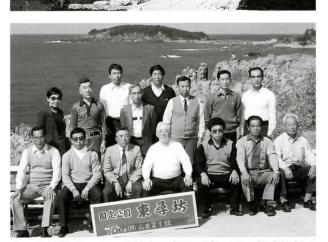
仕事を配分した。街づく

遊休労力者





上一作業風景。下一総会を兼ねた旅行。役員全員がそろ て記念写真。三重県二見浦。(写真:山本光雄さん)



公園管理。中-長徳寺の参道工事。下-親睦旅行で 記念撮影。(写真:山田富士組)

造成前風

景

事スタ

帯である港北ニュ 山林の伐採、 山の切り

造成工事とは山林や田

畑をなら

住居は仮移転して更地にする工

事である。

はじめに工事用の仮設道路

このエ 横

は

早渕

Ш

より

南

元石川

スタートを切り、 国道246号線に近い荏田地区を基点に工事が進んでいっ ータウン第二地 崩 区の荏田 地 の盛 地区 り土を行い、 から始められた。 更 地 化が 計画が 道路の られ

造成工事スタ 0 頃



地区の原風景である。昭和58年といえば荏田南・東地区の街びらきが行われた年で事業は大きく進展していたが、 このあたりにはまだこのような風景が残っていた。写真ではよくわからないが、遠方に新幹線、その手前に第三京 浜道路が写っている。(写真:小島晴光さん)



昭和46(1971)年頃。港北ニュータウン開発事業 の看板が立てられる。(写真:金子三千男さん)



昭和39(1964)年1月。川和原[かわっぱら]、現在 の田辺交差点あたりの風景。右の建物は川和高 校、写真には写っていないが左側に出光グラン ドがすでにできていた。撮影場所は新横浜元石 川線の荏田高校入口交差点付近で、そこから南 西の方向を望んだもの。



昭和50(1975)年4月。造成工事が始まった頃の荏 田地区。このあたりは荏田団地との接続地で、 馬駈場[うまかけば]から、川和高校方面を望んだ もの。右側に新横浜元石川線の高圧電線が見え る。馬駈場とは、昭和初期頃、農民の娯楽とし て草競馬のような行事が行われていたことから ついた地名で、現在の折田不動公園一帯の地名 だった。(写真:徳江義治さん)

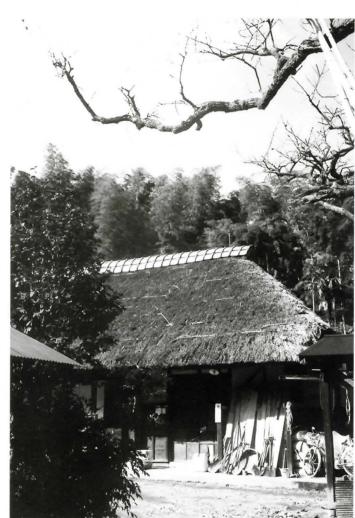


山林まで道路が造られ、山が削られている。



⑤ 軒先には洗濯物があるが、この後、パワーショベル 家屋が壊された。

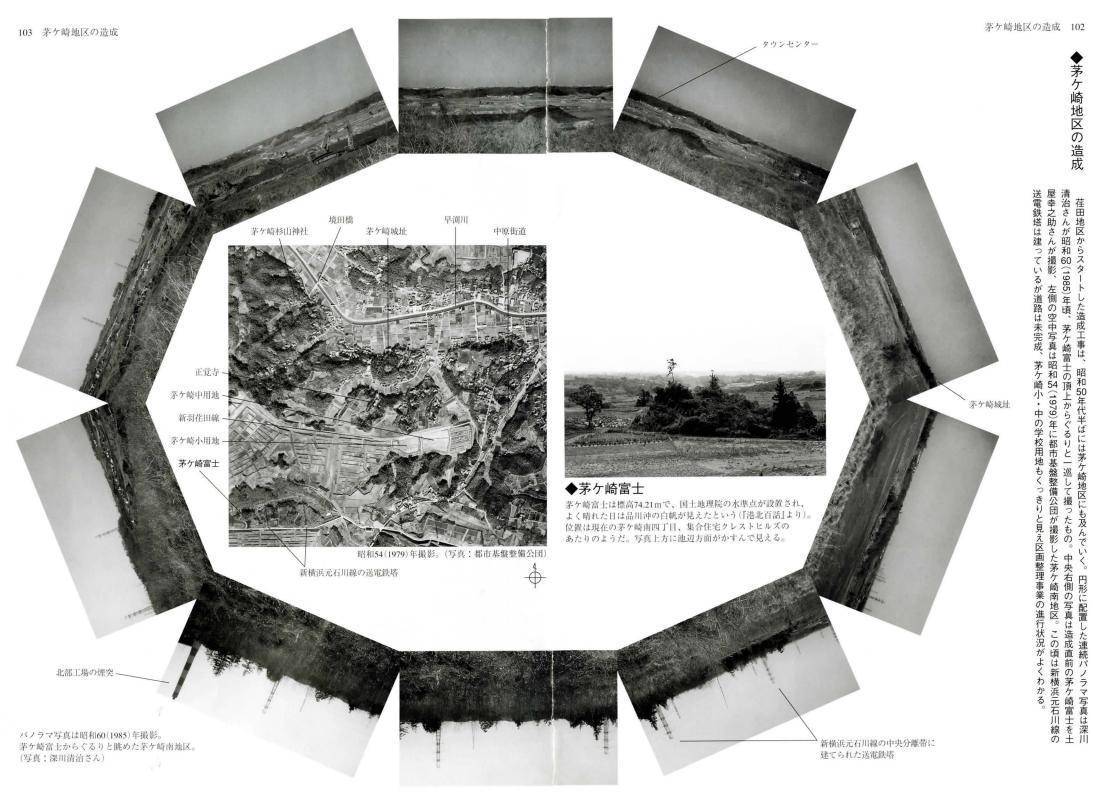
の認可による基本設計に基づいて49(1974)年に土地区画整理事業 格的に工事が進んでいった。 進められたが、この認可以後、 すでにこの頃は荏田地区の街びら の流れを撮影したもの。 山林や家屋の切り崩しという一連 は仮設道路の建設から重機による う広大な面積の造成工事は、 ような光景が展開していた。 きも行われており、各地区でこの (写真:小島晴光さん) 撮影は昭和6(1985)年2月で 全体で1317ヘクタールとい 写真



①背後には竹林、庭には柿の木がある農家。2月の日差しを受け て早春の暖かな雰囲気が醸し出されている。



②正面から撮る。すでに造成工事が近くまで来ているようだ。



(業の色濃い地域。

歴史の面影を残しながら街づくりが進めれている。

茅ケ崎城址や正覚寺を擁する歴史と



昭和60(1985)年頃撮影。城址中通り。城址入口の坂道を上 から見る。前方が勝田方面、左下の低地に早渕川が流れて いる。(写真:深川清治さん)



昭和50(1975)年頃撮影。茅ケ崎城址中通り。鬱蒼とした樹木 に囲まれた細い道は、いかにも中世の面影があった。左側が 茅ケ崎城址、突き当たりに観音堂がある。現在は道路が新し くなりこの光景はない。(写真:深川清治さん)



昭和60(1985)年頃撮影。城址入口の坂道(写真右端)を下から見る。角に庚申堂が建てられてい た。造成工事のため一時ば城址中通りに移されていたが、現在は元の場所に戻っている。茅ケ崎 城址を挟むように左右に道路があり、左は城山の裾を通り正覚寺方面に、右は城址中通りで観音 堂に突き当たる。右一現在の庚申堂。(写真:上-深川清治さん、右-田園都市出版)



昭和58(1983)年頃撮影。茅ケ崎地区の地権者は、造成工事のため早渕川沿いに建設された仮設住宅に仮住まいした。写真は建 ち並ぶ仮設住宅の状況。遠方の山並みは大棚地区。(写真:深川清治さん)





バス停・茅ケ崎中学校前。 上-昭和63(1988)年撮影。付近は造成前で茅葺き屋

根の農家と竹林が見える。(写真:小島晴光さん) 下-平成4(1992)年撮影。未だ学校以外の建物がな い頃の新羽荏田線。(写真:田中孝長さん)



昭和60(1985)年頃撮影。センター南駅方面から茅ケ崎城址を望む。写真は城址西 側の山林を一時造成した頃で、現在この辺りは街の中心部。住宅やビルが建ち並 び全く風景は一変している。(写真:深川清治さん)





写真上とほぼ同じ位 置から撮った現在の 茅ケ崎中央。右側ビ ルの後ろに見えるの が茅ケ崎城址の森。 下方はすきっぷ広場 でセンター南駅入口 から広場に沿って歩 行者用の屋根が伸び ている。(写真:田 園都市出版)





平成元(1989)年撮影。建設前の「フォーリアの杜」付近から茅ケ崎東二丁目を望 む。右側の森は茅ケ崎城址、中央の森は正覚寺前の丘。(写真:田中孝長さん)





上-平成4(1992)年撮影。茅ケ崎東二丁目より南東側を見 た風景。現在は集合住宅「フォーリアの杜」、緑道や一般住 宅地になっている。(写真:田中孝長さん)。

下-上の写真に対応した現在の風景。(写真:田園都市出版)



平成4(1992)年撮影。 左に「カネミツ」の看 板のあるビル、右に NTTの建物、建設中 のビル群は集合住宅 「メゾンふじのき台」 で近くを新羽荏田線 が通っている。草に 覆われた手前の造成 地は現在の茅ケ崎東 三丁目と茅ケ崎中央 あたりである。(写 真:田中孝長さん)

や誘致企業の京セラ、日立製作所が建っているが、全体に静かな住宅街のイメージが濃い。

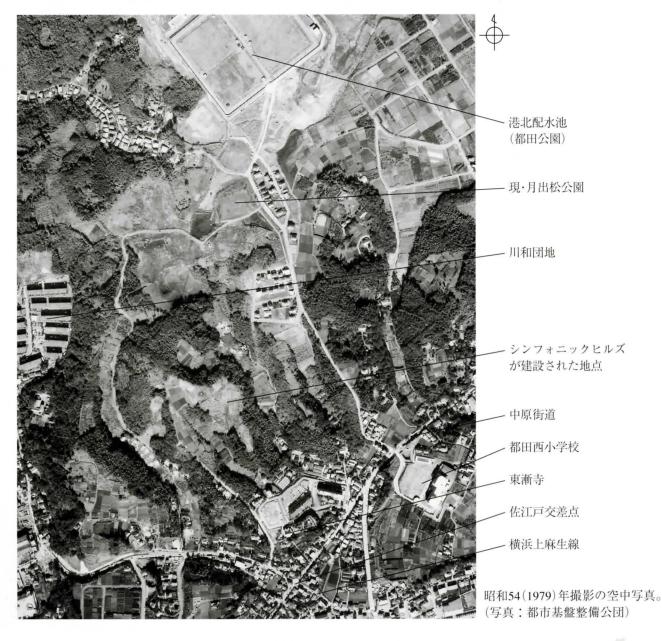
ニュータウン開発区域内の最南端にあたる佐江戸(現・加賀原)地区。集合住宅シンフォニックヒルズ



フォニックヒルズの辺り。 昭和56(1981)年頃撮影。造成中の佐江戸町の連続写真。現在の加賀原1丁目、



昭和56(1981)年頃撮影。現在のシンフォニックヒルズより鴨居方面の遠景写真。(2枚の写真:志田恒伸さん)





平成元(1989)年撮影。佐江戸地区の連続写真。(写真:黒須晃毅さん)



佐江戸の丘から撮った加賀原の現在の風景。右側に集合住宅シンフォ ニックヒルズが見える。なだらかな丘には一般住宅が建ち並んでいる。



東漸寺裏から見た現在のシンフォニックヒルズ。(左右2枚の 写真:田園都市出版)



上一昭和57(1982)年の牛久保2工区。中川駅一帯。左下一昭和 62(1987)年のすみれが丘交差点。遠景に造成中の牛久保地区が 見える。右下-昭和54(1979)年の牛久保配水池。 (3枚の写真:小林隆雄さん)





心に造成工事が進められた。下の空中写真で低地の水田が道路になったことがわかる。 港北ニュータウン開発区域の早渕川より北側にあたる第一地区。日吉元石川線の工事を



昭和52(1977)年。造成前の北山田重代谷戸。水田と山林。



昭和52(1977)年。伐採して丸裸になった山の様子。山を削って低地を埋め



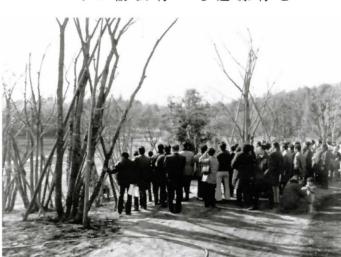




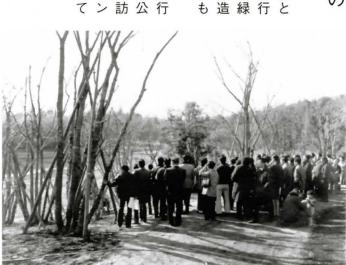
昭和54(1979)年12月撮影の空中写真。(写真:都市基盤整備公団)

事の X

いのれ園的 進成地しつ概 にに開め、、た 一地区、第二地区 に造られていった。 開発の見本として に造られたせせら 開発の見本として に造られたせせら が、同時に公園・ が、同時に公園・ が、同時に公園・ が、同時に公園・ が、同時に公園・ が、同時に公園・ - タウン らぎ公 先行 が 設 地



昭和55(1980)年頃のせせらぎ公園。古民家、池、雑木林を配し た近隣公園で港北ニュータウン街づくりの見本として、各地か



ら多くの見学者が訪れている。(写真:小林隆雄さん)



昭和60(1985)年5月撮影。長徳寺墓地造成工事。後方左の山の上に牛久 保神社(現・天照皇大神)の旧社殿が見える。(写真:小林隆雄さん)



平成2(1990)7月撮影。大善寺周辺の造成工事。後方は中川中学 校。(写真:川上昇さん)



心行寺付近造成工事。現在この辺りは緑道・ささぶねのみ ちで、後方の森は都筑中央公園。(写真:小島晴光さん)



平成4(1992)年2月撮影。牛久保公園付近の造成工事。左端にアルペンの建物 が見える。(写真:川上昇さん)



平成5(1993)年。建設中の緑道・くさぶえのみち。中山北 山田線、四季舞橋下の工事。(写真:川上昇さん)

三京浜港北インターに近い折本・大能都市基盤整備公団が撮影したもので、 開発事業は幹線道路の建設を先行して進められた。左の空中写真は昭和54(1979)年12月に 道路の計画線はおおよそ判明できるが形を成していない建設途上というところ。 大熊地区の工事の状況が写っている。 《地区の工事の状況が写っている。送電鉄塔はすでに設新横浜元石川線の荏田地区(国道246号線近く)と第

横浜元石川 の 建 写真: 都市基盤整備公団

東名高速 現·折田 不動公園 荏田高校 新横浜 元石川線·鉄塔 現·荏田南小 現·荏田南中 現・牛ヶ谷公園 運動広場 旧出光グランド (現・グランノア 港北の丘) - 川和高校 都筑ケ丘住宅 昭和54(1979)年12月撮影。荏田地区の造成工事。



空中写真・2 昭和54(1979)年12月撮影。折本・大熊地区の造成工事。



昭和58(1983)年撮影。開通当初の新横浜元石川線。初めは片側通行だっ た。(写真:土屋幸之助さん)



昭和58(1983)年撮影。街びらきの頃のけやきが丘交差点のあたり。集合住 宅は「しいの木台ハイツ」。(写真:土屋幸之助さん)



昭和58(1983)年撮影。開通当初の新横浜元石川線。池尻橋より東側を望む。右の ネットは荏田高校グランド。(写真:田園都市出版)



鉄塔建設

昭和54(1979)年4月撮影。新横浜元石川線の中央分離 帯に高圧電線を移動するための鉄塔工事現場の写真。 この工事の完成によって、早渕川沿いの山の上に 建っていた高圧電線がすべて移動し、現在のように ニュータウン地区は新横浜元石川線に沿って建つこ とになった。中央分離帯を広くとり緑地化して高圧 電線を設置する方策は、アメリカ視察の一つの成果 でもあった。緑化に関しても、もともとこの地域に 植生していた樹木を苗木から育てて、森として再生 したものである。また、鉄塔の柱がパイプ構造に なっていることに注目してほしい。一般にはL型の 鉄柱を用いるが、美観上円筒が良いという地元の意 見を取り入れて実現した。(写真:徳江義治さん)

所横浜元石川線開通



昭和58(1983)年6月。新横浜元石川線開通の式典。後 方に見える建物は「しいの木台」「かしの木台」「けやき が丘」の集合住宅。(写真:横浜市)

▼日吉元石川線の建

う〕方面を望んだもの。 山田一帯の造成地が広がっている。 の森は緑道の一部、 りと見える。下は山田富士の南側で、 ている。 至る道路である。 1977)年にスター (交差点から東は第三京浜を抜け日吉に がね橋上の道路はまだ建設途中。 日吉元石川線は第一地区を横に結ぶ幹 ふじやとのみち」の山田富士橋 めがね橋)の工事が行われてい 造成工事が進み道路の概要が現れて 中央分離帯もでき、舗装もされ 左側に山田富士の頂上がくっき 西は国道246号線の新石 重代[じゅうだい]から芝生[しぼ 写真上は昭和60(1985)年頃にスタートし、竣工は平成2 上方に北山田から南 造成工事は昭和52 中はさらに工事





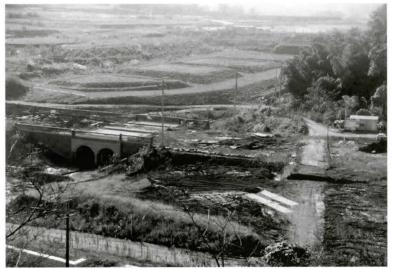
上の写真3枚は平成2(1990)年に行われた開通式のセレモニー。テープカットの後、消防署音楽隊、幼稚園の園児たちによるパレードが行われた。(写真:土屋幸之助さん、男全富雄さん)



平成8(1996)年に完成の山田富士をデザインした人逢歩道 橋。(写真:田園都市出版)







上一昭和60(1985)年頃、日吉元石川線の工事状況。中一中央分離帯や 擁壁もでき、完成に近づいている。下一市営地下鉄4号線の北山田駅前 辺り。めがね橋は出来上がり、その一帯の道路工事が行われている。 (上3枚の写真:男全冨雄さん)

◆北山田駅前歩道橋

保農専地区の緑地、

の中央部分は市営地下鉄4号線・北山田駅の工事が進められている。(写真:男全冨雄さん)

南東に振る。手前左寄りに山田富士橋が隠れるように見え、その上方に造成中の土地が広がっている。④東へ向かってカーブを描きながら道路が続いている。現在こ

ガーデンヒルズと電波塔などが見える。②そこからやや南側に振った景色。中央遠方に北部工場の煙突が見える。③写真中央の擁壁に沿って更に 開通直後の日吉元石川線を山田富士の頂上から撮った連続写真。①は北山田交差点をほぼ中央に配して望んだ西側の景色。遠方右側から左へ牛久

① 山田富士頂上から西方向を見る。遠方中央右寄りに中川駅前の電波塔とガーデンヒルズが見える。



② 南方向。中央遠方左寄りに北部工場の煙突が立っ



③ 南東方向。造成地が広がっている。



でカ ④ 東方向。日吉元石川線が城山の辺り 日吉方面に伸び

縦に結ぶ幹線道路と位置づけられる。

地下鉄センター南・北駅をつなぎ、

-山北山田線及び佐江戸北山田線はタウンセンターを通り港北ニュータウンを

横浜元石川線が横浜の中心と港北ニュータウンを結ぶ幹線道路とすれば

とバス停が立ち、 願いがあり、

写真で見る風景は今は記録としてしか見られないものである。

手段をどうするかという大きな問題があった。住宅建設を促し居住者を増やす

徐々に住宅も建ちはじめるが、

住民の交通

交通網整備が先決である。そのため当時、

その期待に応えて開通に踏み切ったものの、造成地の中にポツン

バス路線開設への住民の強

がらがらのバスが走る光景がしばらく見られた。

に建設中のセンター北駅が見える。

②片側交通の頃。「港北ニュータウンメイズ

中央部は大塚交差点あたり。

左側の山は都筑中央公園。

」のバス停がある。

現在都筑区の中心部。

①建設中の中山北山田線を南から北を望む。

その道路づくりの推移は街づくりの推移と合わせ興味深いものがある。

業務・商業施設の集中するタウンセ

造成工事が終わり道路が完成し、

Щ

田線の建

① 平成3(1991)年3月。建設中の中山北山田線。



② 平成4(1992)年5月。道路は片側通行。ランズボローメイズ前のバ ス停が立っている。(上2枚の写真:森寛さん)



中山北山田線のすみれが丘 入口交差点近くのバス停。 新横浜、大倉山、勝田営業 所、茅ケ崎中学校入口、港 北二ュータウンメイズ前を 経て終点は北山田。

(右3枚の写真:金子三千男 さん)



昭和61(1986)年12月。新横浜から北山田までバスが開通 する。



テープカットのセレモニー。

佐江戸北山 . 田 線 0

区の区画整理事業に併せた工事の進展によって全線開通したのは平成14

(2002)年3月。この開通は港北ニュータウンの主要道路の全てが完成し

関係者のみならず地域の人々に大きな喜びをもたらし

いロード都筑」は一日道路を開放して行われた

たことを意味し、

イベント

「わいわ

挟む市街化調整区域の用地買収の遅れから工事が遅れ、

ようやく中央地

早渕川

佐江戸北山田線の工事は中山北山田線と同時に進行したが、



平成3(1991)年10月。 佐江戸北山田線と大擁 壁の工事がスタートし ている。

インと合わせて擁壁上に見える復元された古代の住居は遠くからもよく

古の面影を色濃く残す一角となっている。

またこの道路は国指定史跡「大塚遺跡

大勢の人々が集まり祝った。

遺跡側の壁面

は大擁壁として大々的

な工事が

行わ 跡の

れれ、

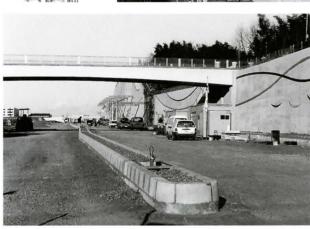
斬新なデザ

か か 1)

約半分は削ら



平成6(1994)年。佐江 戸北山田線及びセン ター北駅周辺道路が形 づくられ、大擁壁の工 事も進展している。 (上2枚の写真:川上昇 さん)



平成6(1994)年。大 擁壁が完成した状 態。上の写真は北 から南、下の写真 は南から北を撮っ たもの。(写真:森 寛さん)



平成14(2002)年3月10日、佐江戸北山田線完成記念行事「わいわいロード 都筑」が行われ、一日路上が祭りの場になった。地元の方と共に喜び合 う中西雅子さん(都筑区長、写真右)。(写真:男全冨雄さん)



平成3(1991)年5月。北山田交差点周辺。縦に伸び 道路は佐江戸北山田線でタウンセンターの方向を見てい る。横は日吉元石川線。



平成5(1993)年2月。佐江戸北山田線の青が渓橋の辺り。 緑道・ささぶねのみちを建設中のようだ。 (上2枚の写真:川上昇さん)

佐江戸北山田線の開通

新羽荏田線

入熊東山田線

平成4(1992)年、新羽荏田線開通の頃。

池辺地区の開通横浜上麻生線、

間は平成11(1999)年に開通した。 辺につなぐ線もある。 横浜上麻生線のバイパス、 富士見が丘交差点から池辺地区までの区 士見が丘交差点で交差する幹線道路で、 この開通によって旧道の渋滞の緩和、 港北ニュータウン内の計画道路には、 中山北山田線の富 市が尾から池



① 昭和62(1987)年5月。横浜上麻生線のバイパス。この時点では 市が尾から富士見が丘交差点まで完成。(写真:森寛さん)



② (写真:小島晴光さん)

面から見たもの。

道との立体交差のトンネル付近を池辺方

士見が丘交差点を望んだもの。③中原街

丘交差点付近。

②は前高山歩道橋から富

246号線へ、

また、

横浜都心部への ①は富士見が

通行がスムースになっ

た。

東名高速道路・横浜青葉インターや国道



③ (写真:田園都市出版)



新羽荏田線全線開通の頃。右の建物はNTT。中丸交差点 の辺りから東を望む。(写真:田園都市出版)



新栄高校開校(S58/1983年)の頃。全線開通は昭和63(19 88)年で、未だ一部開通の状態。(写真:土屋幸之助さん)



牛久保中川線。突き当たりが烏山公園。右の集 合住宅はサントゥール中川。(写真:田園都市出版)

線道路である。

保土ヶ谷を結び、

港北ニュータウンの

建設

が進むにつれ、

港北インタ

特に朝夕の渋滞は大きな問題にな

自動車専用道路の第三京浜道路は、

首都圏を高速で通行できる重要な幹弗三京浜道路は、東京・世田谷と横

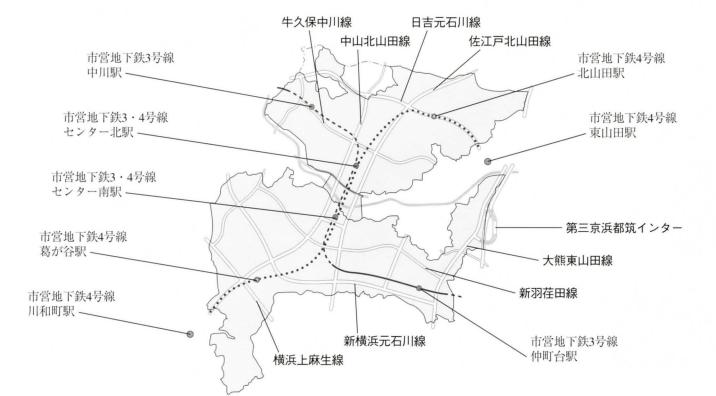
成7(1995)年、 ていた。昭和62(1987利用度が急激に増え、 昭和62(1987)年に新インター建設が具体化 都筑インター が開通した。 平

昭和40(1965)年に開通した第三京浜道路。走っている車の形、交通量などに当時の時代が伺われる。 新吉田の丘の上から撮影。(写真:皆川健一さん)



平成7(1995)年。第三京浜道路・都筑インター開通式典と 都筑インター全体を見下ろした斜め写真。(写真:横浜市)





|ユータウン内の主な道路



平成3(1991)年1月。早渕川の橋梁工事が進んでいる



平成3(1991)年10月。国道246号線を渡る橋梁。橋梁の先 にトンネルの入口が見える。



平成4(1992)年11月。センター北駅が完成している。 (上3枚の写真:川上昇さん)



平成5(1993)年5月。開通後も駅前の未整備状態がしばらく続いた。セン ター南駅からの仮設道路を人が歩いている珍しい写真である。現在この 辺りはすきっぷ広場、港北東急百貨店が建っている。(写真:森寛さん)



年3月で、 和6(1986)年2月、 の平成13 性のマイナス要因が新線建設への踏み切りを遅らせ、 約30年後の実現で、 計画変更することを提案、 宮地下鉄3号・4号線は、 行われた。 業認可の取得は難しく非常に難航した。 3号線と同時に4号線建設も取り組まれたが、 ついて早期実現へ向け、 鉄道建設は当然のことながら事業計画に当初より盛り込まれて (2001)年にようやく起工式が行われた。 昭和40(1965)年に市が港北ニュータウン計画を発表してから実に 熱心な働きかけと同時に、 ニュータウン建設全体の推進上、 ニュータウン内4つの駅 下鉄の建設には莫大な費用がかかるため当時の経済状況からは 翌62年には工事着手にこぎ着けた。開通は平成5(1993) 関係者はもちろん地域をあげて大きな喜びに包まれた。 これが認められてようやく認可を取得したのは昭 市・公団 ・地元代表による運輸省への再三の陳情 北山田 費用削減の策として一部高架構造に そうした状況でまず3号線の建設 必要不可欠な条件であっ 現在は平成19(2007)年の開 定着人口の遅延による採算 センター 3号線開通から8年後

葛が谷駅の建設が着々と進められている。



3号線の建設は横浜~新横浜間の建設から始ま 昭和55(1980)年に起工式、60(1985)年に新横浜駅が開 業。この開業があざみ野までの延伸の大きな弾みに なった。(写真:横浜市)



平成2(1990)年10月。工事中の中川駅。正面に烏山公園、左 に牛久保中川線が見える。(写真:川上昇さん)



平成2(1990)年度撮影。仲町台 上空から西を望む斜め写真。 (写真:都市基盤整備公団)

北部工場

一南駅

勝田団地 せせらぎ公園

仲町台駅

新栄高校



開通の頃の仲町台駅。(写真:森寛さん)



仲町台駅前。(写真:森寛さん)



センター北駅と電車。(写真:小島晴光さん)



センター南駅。(写真:田園都市出版)



センター北駅。(写真:川上昇さん)



中川駅前。(写真:田園都市出版)

のうちに式典は行われた。

熱心に陳情を重ねてようやくたどり着いた地下鉄開通、

(写真:横浜市、

小島晴光さん、

田園都市出版

市営地下鉄3号線開通セレモニー

通の日である。

全長10・9キロ、

平成5 (1993)年3月18日、

この日は待ちに待った市営地下鉄3号線、

新横浜からあざみ野までの

8つの駅を結んで所要時間は16分。

番電車は中川駅、 公団・市の担当者、

センター北駅を通 工事従事者、

> セ ンタ

そこ

そして何より

も喜びをかくせない 南駅に到着、

自然にこぼれる笑顔と喜びの興奮

は開通式典の会場。

関係官庁の方、

あざみ野駅でテープカットした一

横浜市営地下鉄 「横浜〜あざみ野間 **開通記念式典**



- 南駅構内で記念式典。



あざみ野駅でテープカット。



会場を埋め尽くした地元関係者。



発車する一番電車。



祝いの鏡割り。



式場に向かう地元関係者。



祝いの酒を手に市・ 公団関係者と喜び合 う金子保さん(左)。



式場に向かう地元関係者と市当局者。



公団・市当局者の顔も見える。

開通の喜びと共に ウン建設の見通し を語る横浜前市 長・高秀秀信さん (前列左から2人 目)。

建設が進められている。

ニュータウン内4つの駅、

北山田

セン

北駅・センター南駅・葛が谷駅の周辺

4号線は、平成13(2001)年に起工式が行わ

平成19(2007)年の竣工を目指して現在

採算性の問題から工事着工が遅れていた

進展している。

では工事の囲いもされ、

地下工事が着々と

3号線開通イベント

が伝わってくる。 開通式につづいて記念イベント「スイッチ・オン・ざ・ニュータウン」が3月28日にセンター南駅前で開かれ、 パレードなどで開通を祝った。各地域から繰り出した数多くの御輿、つめかけた市民の表情から地域あげての喜び

八木節や



都筑睦の本御輿、女御輿、北山田の子ども御 輿、南山田や川和の御輿など、各地域から繰り出し、お 祝いの気分を盛り上げた。写真は北山田の子ども御輿。

市営地下鉄4号線の建設



葛が谷駅の工事。



華やかで人目を引く女御輿。



センター北駅の工事。(上2枚の写真:田園都市出版)



舞台では八木節やさまざまなアトラクション が行われた。写真は演奏する女性バンド。 (上3枚の写真:田園都市出版)



北山田駅前センターの工事。(写真:港北ニュータウン生活対策協会)

住宅の建設が立ち上がり、

街づくりは大きく進展していった。

公団・公社・民間企業による集合

土地造成が済むと住宅建設が進められ、



平成4(1992)年12月。完成したガーデンヒルズ (写真:川上昇さん)



昭和61(1986)年。完成間近のつづきが丘住宅。 (写真:古里秀一さん)



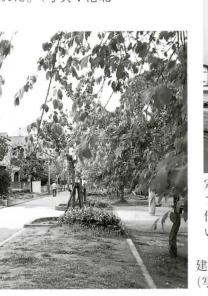
平成6(1994)年。コンフォール東山田。(写真:川上昇 さん)



昭和58(1983)年。しいの木台、第一次入居風景。(写真: 横浜市)



平成5(1993)年3月。仲町台駅前センターの街づくり協定及び土地利用について勉強会が行われた。(写真:港北ニュータウン生活対策協会)



ある住宅街を目指している。

目 魅的力 け、位 とめた素案をもとに、 北ニュータウン事業推進 等で検討を行って、 協議会の生活対策委員会がま いにルールを守ってい目的に、建築に当たっ魅力あるまちづくりの にルー 建築協 港北ニュ 号は牛久保10 築協定とは快適 緑とゆとり、 などにつ 築物の用途及び 出入り口 定によっ を守っていこうと 築に当たってお互 タウン建 7 工区 一前の 落ち着きの 基 な環境 の形成を 準を設 空地確 勉強会 形 小敷 連絡



定期借地権設定の分譲が行われた東山田。後方のビルはコンフォール東山田、右奥に東山田公園の雑木林が見える。定期借地権による分譲や住宅販売はニュータウン各地で行われている。(写真:港北ニュータウン生活対策協会)

建築協定が締結され街並みの美しい牛久保10工区の住宅街。 (写真:田園都市出版) KOHOKU-NEWTOWN KITAYAMATA-EKIMAE

街づくり協定

的な街づくりを進めていこうというもの。 止に努めている。 街づくり協定は、駅前センターや近隣センターの商業地で計画 色調やデザインの統一を図り、 また近隣とのトラブル防 それぞれ街づくり協定



市出版)

街づくり協定パンフレット。それぞれの 商業地域ごとにパンフレットを作って、 イメージに合わせた商店街を形成して いった。(写真:都市基盤整備公団)

横浜北部新都市中央地区

「街づくり協定」パンフレット



平成8(1996)年11月に起工式が行われた。上か ら式典、鍬入れ、歓談風景。(写真:港北都市 開発センター)

そのため中央地区土地区画整理事業を立ちあげ 南北タウンセンターの一体化を図るには早渕川沿いの市街化調整区域の開発が必須である。 開発事業がスタートした。



平成9(1997)年3月、横浜アリーナを会場に行われた竣 工式で、喜びの地元関係者。(写真:山本光雄さん)

進めると同時に、 地が返されたのである。 地権者に感謝状が贈られた。 式典が盛大に行われ、 構成する「港北ニュータウン事業推進連絡協議 くかという新たな段階を迎えたといえる。 地処分公告をもって土地区画整理事業が竣工 から約3年かけて、 権者・ た。すなわち造成工事が終わり地権者に土 平成8年11月には事業を推進してきた地元 大規模なニュータウン開発事業はスター 横浜市・都市基盤整備公団の三者で 翌平成9(1997)年3月には、 住み良い街をどう創って 平成8(1996)年9月の換 開発に尽力された地元 後は土地利用を順次 竣工

開発中のスナップ写真

造成地でゲートボー ル



昭和59(1984)年4月。ドイツのハンブルグより桜 の女王来日、せせらぎ公園を訪れる。(写真:小島 晴光さん)



餅つき大会

ドイツから桜の女王来日



昭和56(1981)年頃。北山田地区。子供からお年寄りまで手軽 に遊べるゲートボール競技は急激に普及していくが、広い造 成地はその格好の場所になった。(写真:金子三千男さん)



平成2(1990)年12月。牛久保 東で行われた餅つき大会。集 会所では女性たちが調理に大 忙し。(写真:川上昇さん)



自転車通学の中学生

平成3(1990)年。 造成が進められている広 野の仮設道路を自転車通 学する中学生。遠方に見 えるのは中川中学校。 (写真:川上昇さん)

のどかな農村地帯であった港北ニュータウン地域は約30年にわたる造成工事によって徐々に地

形が変わり、 計画的な道路、 公園、 学校や住宅地に姿を変えていった。 街づくりの流れ

人々の暮らしや交流を撮ったスナップ写真は、

その時々の表情を雄弁に物語っている。

のひとコ

マとして今では見られない貴重な記録であり、

その間の風景の変化、



平成4(1992)年2月。一面雪に覆われた造成地を、車のあとを選んで通 学する子供たち。(写真:川上昇さん)





昭和61(1986)年。少年野球世界大会が東方公園で行われ た。写真はアルゼンチンとペルーの子どもたち。(写真: 小島晴光さん)

◆ランズボローメイズ

昭和62(1987)年10月、立体巨大迷路「ランズボローメイズ 横浜」がタウンセンター地区にオープン、人気を集めた。 (写真:田園都市出版)





平成2(1990)年2月。雪の日の子供たち。 上-茅ケ崎小学校から下校する子供たち。下-造成地で 遊ぶ子供たち。(写真:小島晴光さん)

◆地域で廃品回収



平成4(1992)年。 廃品回収に取り 組む住民。(写 真:川上昇さん)



筑区誕生までの道の

備が進められていった。 |設を手始めに、行政の窓口であるサービスコーナーの開設へとステップを踏んで新区誕生の 市民生活にとって欠かせない公共施設の建設は、 人口増を見越した学校建設、 ゴミ焼却場の

環境事 業局北部工場開設



た北部工場付近。(写真:横浜市)





昭和59(1984)年、北部工場・余熱利用施設竣工式とお祝いに集まった地元関係者。 (写真:都市基盤整備公団)



平成4(1992)年。港北ニュータウン行政サービス センター開所式。(写真:横浜市)





広大な造成工事も着々と進み、道路建設、住宅建設が進む 時に定着人口も増え始め、住民への行政サービスが必要になっ てきた。まず平成元(1989)年10月、現在の都筑区総合庁舎の位 置に、上の写真にある三角屋根の行政サービスコーナーが建て られサービスを開始。隣の二階建て建物は港北ニュータウン建 設事務所で、側に展望台が建っている(写真:森寛さん)。 平成4(1992)年5月には、現在、水道局都筑営業所と都筑土木事 務所として使われている建物に、港北ニュータウン行政サービ スセンターを開設した。

平成5(1993)年、区民から区名を募集し、「都筑区」と決定。 翌年1月、祝いの集いを行った。(写真:田園都市出版)

行政サービスセンタ

区の街びらきを境に公共施設や誘致企業、 市営地下鉄3号線開通が 港北区・ 緑区にまたがる港北ニュータウン開発事業は、 一層強力に新しい行政区を視野に入れたうねりを作っていった。 商業施設のオー プンが相次ぎ、 昭 58(1983)年に行われた荏田 平成5 (1993)年

0

平成6(1994)年1月、新区名「都窓▼都筑区誕生・総合庁舎落

が開始した。 所、北部児童相談所、北部農政事務所などが併設された新しい庁舎での業務翌7年4月には都筑区総合庁舎が完成し、消防署、公会堂、図書館、保健平成6(1994)年1月、新区名「都筑区」が決定、同11月に新区として誕生。

祝都策区総合庁舎落成

都筑区総合庁舎が落成し竣工式が行われた。(写真:横浜市)





総合庁舎の広々としたエントランスホールでは、写真展、絵画展などさまざまなイベントが行われている。写真は平成13(2001)年3月に行われた「第2回しんえいフォトクラブ写真展」。(写真:しんえいフォトクラブ)



上-エントランスホールに集まった総合庁舎落成記念式 典列席者の人々。左-記念式典。



都筑区誕生記念祝賀会の鏡割り。(上3枚の写真:都筑区 役所)



都筑公会堂。



都筑消防署。(上2枚の写真:都筑区役所)



っぷ広場の開設式典。 (写真:横浜市)



モニーで演じられた幼稚園児たちの演奏。 (写真:都筑区役所)

都筑消防署



1階喫茶室。





図書館窓口と本を読む親子。



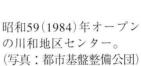
すきっぷ広場

トなどさまざまなイベントに利用され賑わっている。 広場の愛称は市民から応募。 センター南駅前にすきっぷ広場がオープン。野外劇場としてコンサー 198人、255点の中から選ばれた。

都筑警察署。(上5枚の写真:都筑区役所)

地区センター

北山田地区センターの4館がオープン。サー やスポーツ活動等が活発に行われている。 ンター、中川西地区センター、 地域交流の拠点である地区センターは、 仲町台地区センター、 川和地区セ クル活動





*学校・保育園

学校・幼稚園・保育園等教育機関の建設は順次進められ、一方、誘致校として東京・横浜独逸学園、サレジオ

武蔵工業大学が開校した。現在も人口増に伴い新設校の建設は続いている。





中一仲町台地区センタ 上一中川西地区センター。 -北山田地区センター。(写真:田園都市出版)





(写真:都筑区役所)



東京・横浜独逸学園学園祭。(写真:横浜市)

齢者や障害者などに対応した福祉施設の充実も図られている。



昭和大学横浜市北部病院。(写真:小島晴光さん)



完成間近の都筑郵便局。



横浜貯金事務センター。 (2枚の写真:田園都市出版)



総合病院



地域活動ホームくさぶえ。



新栄地域ケアプラザ。(2枚の写真:田園都市出版)



上-まちづくり館(写真右)と都市基盤整備公団事務所(写真正面)。 まちづくり館には(財)港北ニュータウン生活対策協会が入って おり、ニュータウン事業参画者への支援、住民交流・地域振興 支援を行っている。

また都市基盤整備公団事務所には、主にタウンセンター地区の 街づくりに関する各種事業を展開する(株)港北都市開発セン ター等が入居している。

左-まちづくり館のエントランスホールには、ニュータウン全 体の模型があり鳥瞰することができる。またパネルや写真で開 発の歴史を展示している。写真は見学に訪れたこどもたち。 (写真:上一都市基盤整備公団、左一横浜市)

まちづくり 館 とにタウンセンターの賑わいを創り出している。

方、

横浜国際プール (ウォーターアリー ナ

の歴史を一堂に展観する博物館がオープン。

平成7 (1995)年、

発掘調査によって出土した遺物を含め、横浜市

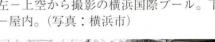
横浜市歴史博物館

的な室内プールである。 ターアリーナ)が北山田にオープン。 泳選手権などの国際競技も開催される本格 平成14(2002)年にはパンパシフィック水 平成10(1998)年、横浜国際プール(ウォ

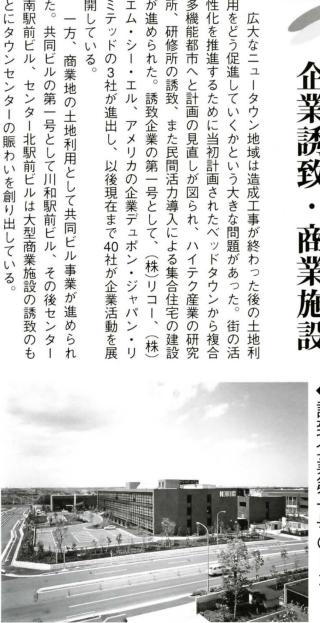




上空から撮影の横浜国際プール。



開している。 ミテッドの3社が進出し、以後現在まで40社が企業活動を展 多機能都市へと計画の見直しが図られ、ハイテク産業の研究 用をどう促進していくかという大きな問題があった。 エム・シー・エル、アメリカの企業デュポン・ジャパン・リ が進められた。誘致企業の第一号として、 性化を推進するために当初計画されたベッドタウンから複合 広大なニュータウン地域は造成工事が終わった後の土地利 研修所の誘致、また民間活力導入による集合住宅の建設 (株)リコー、 街の活



昭和61(1986)年撮影。(写真:都市基盤整備公団)

▼誘致企業第一号のリコ



上-オープンした歴史博物館。(写真:横浜市) 下-館内、エントランスホール。(写真:田園都市出版)

駅前に港北東急百貨店SCが、また平成12(2000)年、センター北駅前にモザイクモール港北がオープンした。 タウンセンターの核施設である大型商業施設の誘致が難航。 平成2 (1990)年初頭から始まっ そうした中で、 崩壊による日本経済の不況により 平成10(1998)年、センター南

南駅前共同ビ

は筆舌に尽くせないものがあった。 港北東急百貨店SCのオー ての諸問題を地権者の 大規模商業施設ということもあり、 方々が解決して完成し プンは、 地元の喜び

プカットする関係者。 (写真:横浜市)

◆あいたい



平成10(1998)年、センター北駅の玄関口ショッピングタ ウンあいたいが開業。(写真:都市基盤整備公団)

センター南駅前。(写真:都市基盤整備公団)

センター南駅前、KEY SOUTH。(写真:田園都市出版)

ヨコハマ。 上-結婚式場、アニヴェルセル ヴィラ (写真:小島晴光さん) 下一結婚式をあげたカップル。 (写真:アニヴェルセル ヴィラ ヨコハマ)



平成12(2000)年、大観覧車が遠くからもよく見えランド いるモザイクモール港北が開業。都筑阪急百貨店をキー 北駅前の顔になっている。写真はモザイクモール港北のオ グセレモニー。(写真:モザイク開発)



主要表彰

見学者が訪れている。これまで受けた賞は次のとおり。 が評価され、さまざまな賞を受賞している。景観の美しさは国内はもとより世界的に知られ、 港北ニュータウンは、 計画的な都市空間の素晴らしさ、また、地域住民によるまちづくりの取り組み 各国から

緑の都市賞 (緑の街づくり・ 地域緑化部門 内閣総理大臣賞

グリーンマトリックスシステムにおける緑の保全と活用の取り組み/平成8(1996)年

建設大臣賞

タウンセンター地区/平成10(1998)年 づくり月間建設大臣表彰

都市景観大賞

(都市景観100選部門)

港北ニュータウン事業推進連絡協議会

計画学会設計賞 せせらぎ公園 川・新田・都田・山内の各地区協議会/平成6(1994)年 昭和55(1980)年

◎横浜市長から感謝状 港北ニュータウン事業推進連絡協議会

づくり月間国土交通大臣表彰 川・新田・都田・山内の各地区協議会役員/平成9(1997)年

◎まち

仲町台商業振興会 仲町台駅前センター 街づくり協定運営委員会

◎横浜まちなみ景観賞 地域作業所「ワークアシスト仲町台」 /平成13(2001)年

かしの木台ハイツ、

しいの木台ハイツ/平成元(1989)年

ささぶねのみち、 御影橋、 図研本社・中央研究所/平成4(1992)年

東京・横浜独逸学園/平成5 (1993) 年

サカタのタネ本社ビルと仲町台地区センター/平成9(1997)年

◎横浜まちづくり功労者賞

けやきが丘住宅森林愛護会/昭和6(1986)年

港北ニュータウン事業推進連絡協議会

川・新田・都田・山内の各地区対策協議会/平成6(1994)年

港北ニュー 在田高校 川和高校· 新栄高校の各美術部 /平成6(1994)年

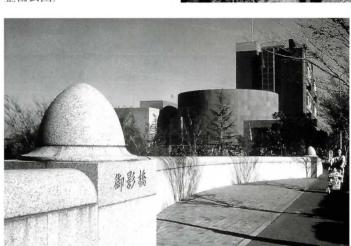
タウン

タウンセンター地区

|地区共同化義務街区事業者組合/平成10(1998)年



住民活動グループが、民有地や 公園等の中に残されている緑地 に対して、管理や活用(イベン ト)等の取り組みを主体的に 行っている。(写真:都市基盤 整備公団)



御影橋と図研本社・中央研究所。 水のせせらぎがある緑道。レンガ色の建物と保存緑地。石 造りの橋。これらが調和し合い、幹線道路の間近とは思えない 静かで落ち着いた空間を創っている。

(写真:横浜市)



東京·横浜独逸学園。

ンガ色のタイルが周囲の広々とした緑と土の色に映えて 域の景観の規範になっている。また、出入り口に設置されてい るモニュメントは、ドイツの象徴である「もみの木」をモチーフ にしている。(写真:横浜市)



ユータウン事業推進連絡協議会総会。地元住民・市・公 団の3者による協議がまちづくりを推進、これが高く評価され た。(写真:都市基盤整備公団)





永年にわたる港北ニュータウン建設事業の推進に尽力され、その 発展に寄与された功績をたたえて、港北ニュータウン事業推進連 絡協議会役員の方々に、横浜市長から感謝状が贈られた。 下の写真は当日表彰された方々が一堂に並び記念撮影したもの。 (写真:横浜市)







上-花と緑と建物が調和している仲町台駅前。(写真:都市基盤 整備公団)

下一仲町台駅前まつり。(写真:港北ニュータウン生活対策協会) 仲町台駅前センター街づくり運営委員会は、駅周辺の新たな魅 力や住民交流の場の創出を目的に、ハード整備及びソフト運営 の連携を取りながらまちづくりを推進し、まちづくり月間国土 交通大臣表彰を受けた。



平成10(1998)年、都市景観大賞(都市景観100選部門)を受賞したタウンセン ター地区。上ーショッピングタウンあいたいとセンター北駅改札口をつなぐ インナーモール。左-シンボル道路から商業施設へのビスタライン。

(写真:都市基盤整備公団)

未来へ:

に、今、何が大切か、それは社会の基本理念である。 がどのようなものであるか、より良く、より素晴らしいものにしていくため できない。しかし、人間は未来を想定して今を生きている。これから来る社会 未来とはこれからやって来る世界である。未来の写真を撮ることはもちろん

守られるようにと、広い道路や保存緑地の確保を実現してきたのである。これ た。道路、公園など整備された美しい景観の中に、災害の時には最大限生命が らの都市空間は将来へ継承され、人々の暮らしを安全で豊かなものにするであ ために、都市はどうあるべきかという基本理念のもとに建設が進められてき 港北ニュータウンも過去の経験、地震や戦争という天災人災から生命を守る

たちである。未来社会がどうかは、子どもたちの教育にかかっている。教育の 流れをたどれば、社会がどう変遷していくかを垣間見ることができる。 しかし、この土台の上に未来を創造し担うのは、常に未来を指向する子ども

担い手であるとの思いからである。「未来へ…」のテーマの最初に教育の流れを置いたのは、子どもこそ未来の



バトンタッチ。(写真:新栄高校)



未来への架け橋 子どもたち

*学校設立の流れから

と期待があった。 開発による新しい都市への転換期、いずれの時代にも教育への惜しみない協力 意である。寺子屋からスタートした近代教育の黎明期、戦後の混乱期、そして 学校設立の流れから見えてくるものは、地域の人々の教育への期待であり熱

たちこそ未来の主役であり、教育こそ時代の「架け橋」、人々の期待でもある。 21世紀という未来のキャンバスに夢を描き未来を生きる子どもたち。子ども

都筑区における学校設立の流れ

平成2 (1990)年

中川西小学校

平成6 (1994)年

川和東小学校 茅ケ崎台小学校

明治7(1874)年 中川小学校 (前身・公立大棚学舎)

都田小学校

(前身・池辺学舎)

平成9 (1997)年 平成 8 (1996)年

南山田小学校 北山田小学校

都筑小学校

昭和23 (1948)年 川和小学校

昭和25(1950)年 折本小学校

平成11(1999)年

平成13(2001)年

東山田小学校 つづきの丘小学校

昭和4(1969)年 勝田小学校

昭和48 (1973)年 昭和45 (1970)年 在田小学校 山田小学校

前身・荏田学舎

昭和50(1975)年 すみれが丘小学校

荏田南小学校 都田西小学校

昭和63(1988)年 茅ケ崎小学校 在田東第一小学校

平成2(1990)年

中川西中学校

昭和22(1947)年 中川中学校 中学校

昭和55(1980)年 川和中学校 都田中学校

昭和56(1981)年 昭和58(1983)年 在田南中学校 茅ケ崎中学校

> 着していった。 舎へと建築そのものも近代化をたどっ スタートし、木造の平屋建て、二階建 る。江戸時代の寺子屋のスタイルから る明治初期に原点を見ることができ 小・中学校は、近代日本の黎明期であ な紆余曲折を経て、今の学校制度が定 ていくが、名称や教育内容もさまざま て校舎へ、やがて鉄筋コンクリート校

他に類をみない現象といえるだろう。 づくりは、急激な人口増加をもたら ニュータウンの開発による大規模な街 時代とともに都市化が進み、特に港北 し、ここ数年の新設校建設ラッシュは 横浜の北部に位置するこの地域も、

が、教育の場にくっきりと痕跡を残し ることは、日本全体の近代化の足跡 ているという感が強い。 充実した近代的な教育に至る流れを辿 それだけに寺子屋教育から、設備の

ではない。 在、さらに未来社会の方向性をさえ、 垣間見ることができると言っても過言 教育の流れを見る時、 過去から現

に流れを辿ってみた。 お借りした写真を組み合わせ、学校毎 た。それに地域の方々や関係機関から 学校の貴重な記録写真をお借りでき 今回の写真集編集のために、各小中

もっとも低迷し混乱した明治初期と太 そこで見えてくるものは、社会が

ぞって学校を応援し協力していた姿で 平洋戦争後の昭和20年代に、地域はこ

義務教育として制度化された現在の

していたのである。 原動力であることを地域の人々は理解 ところもある。人間教育こそが社会の で校舎の増設や運動場の拡張を図った し、戦後は寄付や土地の提供という形 明治初期には寺院を教育の場に提供

域と学校の交流も行われている。 そういった中で、地域の歴史を語り伝 た農業を知らない子どもたちも多い。 る。かつてこの地域の基盤産業であっ 人々の職業もさまざまに変化してい 貌を辿っている中で、社会を構成する え、農業への理解を深めるために、 今、農村社会から都市型社会へと変

れていることを表しているといえるだ 理念が、教育の場に受け継がれ実践さ ける「都市と農業の調和」という開発 そのことは、港北ニュータウンにお

橋である 教育は、 過去・現在・未来への架け

した理由もそこにある。 校に多くのスペースをさいて取材掲載 義務教育である小・中学校と公立高

都筑区内でもっとも古い歴史を誇る

創立は明治7(1874)年

を行っ いる。 着物姿に 帽子をかぶっている。当時、学校から早渕川まで 水田が広がっていた。(写真:中川小学校)

感慨深いものがある。 屋からスターとしたことを考えれば が産声をあげた頃、草葺き屋根の寺子 年近く前、 の改修を行い、近代的な設備の全く新 に恵まれた現在の学校、これが百三十 しい校舎が完成した。給食室、理科室、 さらに平成11(1999)年、 動場として現在も使われている。 放送室、 明治維新によって近代日本 図書室など教育環境 校舎·校地

区第五十四番小学校公立大棚学舎」と

第

一大学区第九中学

方々は、ほとんどこの学校から巣立ち がここから輩出されていった。今でも 立っていったことだろう。村を支え、 六十代から九十代にかけての古老の 地域を支え、街づくりを推進した人々 この学びやからどれほどの村人が単

と改称され現在に至る。児童数の増加 昭和22(1947)年、横浜市立中川小学校

昭和50(1975)年、

鉄筋四階建

平屋建ての校舎が建築され移転する。

明治11(1878)年、清林寺の前に木造

また、校名はさまざまな変遷を経て

学区の中心地にあたる。

原街道に面した交通の便のよい、

ほぼ

茅ケ崎村で、

場所は中

一時の学区は山田 勝田村、

村、

大



昭和14(1939)年頃の校舎。(写真:小島喜治さん)



和30(1955)年代の清林寺。 「中川保育園」という看板が (写真:中川小学校)



完全給食が実施された頃。 昭和40(1965)年、 (写真:中川小学校)



昭和11(1936)年。尋常科卒業生。



昭和11(1936)年。高等科卒業生。(上2枚の写真:小島喜治さん)

作り上げた人々といえる。 地域社会で活躍し、現在の街の骨格を

ての校舎を現在地である牛久保東二丁

元の跡地は中川中学





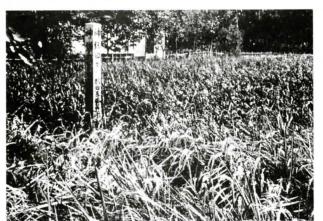
平成11(1999)年、新校舎が竣工し、教育設備が一段と 整う。スタジオでは撮影機材も本格的。子供たち自 ら、撮影、編集、放映を手がけ、実地に学んでいる。 (写真:中川小学校)



昭和54(1979)年撮影の空中写真。新校舎が中央左側に、旧校舎跡地と中川中学 校が右側に見える。(写真:都市基盤整備公団)



昔の宗忠寺。ここに「池辺学舎」が設立された。



都田尋常高等小学校神饌田。(写真及び説明:『都田村誌』 より)

と改称し、 らに明治8(1875)年には「池辺学校」 学舎、「大棚学舎」「池辺学舎」 これらの学舎はいずれも古い街道筋の 廃止されて開校した「池辺学舎」で、さ たことから始まる。 都筑区内の小学校の源流は幾 前身は江戸時代から続いた寺子屋が 高等都田小学校を宗忠寺に設立し 田 在田学舎」から発展してい 小学校の創立は明治29(1896)年 それが高等都田小学校に

の要も作られたのだろう。このこ モノ・人・文化 つかの 本学 る。

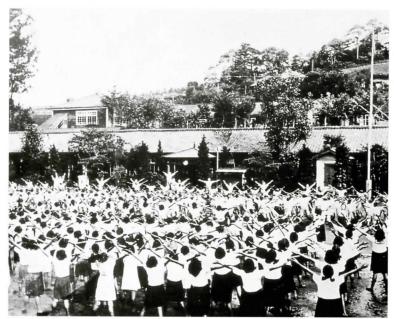
の関わりを辿ってみた。

とから、ここ都田地区もかなり学問

都田小学校

同時に尋常豊永小学校も創立されてい 盛んな地域であったことがうかがえ に改称されたもので、ここから川和 |在の都田小学校は昭和22(1947)年 治29(1896)年に高等都田小学校と 尋常豊永小学校は廃校になった。 その後学校の統廃合が繰り返さ

の歴史がパネルで展示され、 学校、折本小学校、 生である地域の方々から当時を偲ばせ の歴史が一目でわかるようになって 離独立していった。 な写真をお借りし、 都田小学校職員室前の廊下には学校 その中から校舎の変遷として特徴 つかの写真をお借りして、 都田西小学校が分 またここの卒業 創立百年



昭和初期、校庭で全校生徒が体操をしいる。(写真:都田小学校)



創立百周年記念誌『都田』によれば大正元(1912)年、付設農業補習学校設置の認可とある。写真提供の大久保正治さんの話によると、女子師範学校の生徒が都田小学校前の水田に農業実習に来ていたという。これは田植えの実習をしているその頃の貴重な写真である。(写真:大久保正治さん)



昭和22(1947)年、プール前で記念撮影の2年生。この頃には子供の服装が洋服になる。(写真:高橋一夫さん)



昭和5(1930)年頃、校庭に都田村青年団が砂利敷き作業をした時の 記念写真。地域の方々はさまざまな形で学校に協力していた。牛が 数頭写っている珍しい写真である。(写真:牧野宏さん)



平成6(1994)年、都筑区誕生記念行事の1つ「ハートフルフェア IN 都筑」で鼓笛パレード・リレーに出場した都田小学校の子供たち。(創立百周年記念誌『都田』より)



昭和7(1932)年、尋常科卒業記念写真。(写真:牧野宏さん)

Ш 和小学校

川和小学校は昭和23(1948)年に、都

残された仕事は『人間を育てること. 並々ならぬ熱意が、創立40周年記念誌 張したり、 舎の増築工事を町民の寄付で行った せ学校教育を充実しなければならない 田小学校から分離独立して誕生した。 会長や理事の熱意が町民を動かし、当 の件」が議題となり、「敗戦後の日本に ……」(創立40周年記念誌 『川和』)と、 しかない、そのためには分校を独立さ 戦後の昭和21(1946)年、 (今の町内会)で 都田尋常高等小学校第一分教場校 運動場も市に無償寄付によって拡 町の人々の学校に対する 「川和小学校独立 川和町協議

(創立40周年記 昭和23(1948)年、創立当時の川和小学校。 念誌『川和』より)

① 5月、種蒔き。

②6月、苗とり。

を建築して移転、4(1973)年には鉄筋 校舎が落成し、 昭和30(1955)年に、現在地に新校舎 和』に記載されている。 設備が整う。

う交通にも恵まれ、農業と商業の発達 したこの地域は、教育にも熱心であっ れ、また中原街道、 かつて谷本川一帯に広がる水田 北側には山林という自然に恵ま 横浜上麻生線とい

る。 作物の大切さ、収穫の喜びを体験させ 業である農業を継承し、子どもたちに 山林も少なくなったが、地域の基盤産 たいとの学校の方針によって、昭和58 (1983)年より、学校水田を始めてい 町はすっかり都市化して農地

とり、刈り入れ、脱穀、収穫祭と一 都会っこが大部分だが、種蒔き、 連 苗

> がうかがえる。学校創立当時の教育へ 作業を楽しそうに学習している様子 熱い思いが、今も生きている。

米づくり体験学習

そして全員で祝う収穫祭では、 年生から六年生まで、 かかしをつ 五月の種蒔 しま







年男子 な粉をつけたおもちは、やわらかくて 最高においしかったです。」三 ·文:創立4周年記念誌

『川和』

より

子どもたちの作文から

す。ぼくは、みんなといっしょに『ヨ でふかしてから、うすの中に入れま くったり、農家の人の苦労がわかりま くはまってしまったり、 れたもち米でお餅をつき、みんなで食 きから十一月の収穫祭まで体験 イショ』と大きな声でいいました。き した。「田んぼでとれたもち米を、かま べます。田植えではどろの中に足が深

④ 9月、かかしづく



地域の古老の方々にわらじ作りを学ぶ子供たち。





昔から稲作の盛んだったこの地方では、7月の土用の頃、害虫を追い払う「虫送り」という行事が行われていた。「川和の虫送り」は八幡神社に松明を持ち寄り、お払いをすませ、日が暮れると松明に火をつけて御神輿

をかつぎ、「テケテケ、ドンドン、ヨーイヨイ」と囃しながら農道を回り歩き、虫をよそへ追い出した。

これは稲を害虫から守り、豊作を祈念する祭りで、一時途絶えていたものを現在は復活し、地域の行事として毎年行っている。

上一御神輿をかつぐ子どもたち。

下一暗くなった農道を松明をかざして歩く子 どもと地域の人たち。(創立50周年記念誌『わ たしたちのまち川和』より)



⑤ 10月、刈り入れ。



⑥11月、脱穀。マスクをかけて体験。



①11月、干した稲をくるり棒を使ってたたき、穂に残った籾を落とす。農家の人が教えてくれる。



現在の川和八幡神社。 (写真:田園都市出版)

に真照寺に設立された「折本学舎」に 小学校から分離独立して誕生し のどかな農村地帯の名残をとどめ 成12(2000)年発行の創立50周年記 本小学校は昭和25(1950)年に、 は農業専用地 一分教場になり、 明治10(1877)年には折本小学校 翌6年には都田尋常高等小学校 向、 い丘 大正5(1916)年に一時 源流は明治6(1873)年 昭和25(1950)年 で野菜畑に囲ま 大熊地区を

折本小学校として開 本にあった都田尋常高等小学校第 真及び説明:『都田村誌』より)

昭和初期の頃。校庭に集まった着物姿の子供たち。厚手の着物の様子 から、冬の朝、始業前の朝礼を待っているように思われる。(写真: 折本小学校)



(創立50周年記念誌より)



平成6(1994)年、健民祭での出場。(創立50周年記念誌より)

課外活動として続いている。 区のさまざまな行事に出場し バンドは結成以来、 のびと学んで 成8 (1996)年に増 モニー」 地は チングバンドは、 西原公園に に生まれ変わ 学校を離れ地



移転前の校舎及び校地(現・西原公園)。昭和50(1975)年に現在 地に新校舎を建築移転している。(写真:折本小学校)



校庭でフォークダンスを楽しむ母親たち。右奥に火の見やぐら があるのも時代をほうふつとさせる。(写真:折本小学校)

権田池

新校舎の落成とともに勝田小学校とし 建設事業に先駆けて完成した勝田 武人が頻繁に往来した中原街道に面 ·校舎を建て授業を開始したのが始ま 勝田村は東海道の裏街道として旅人 創立は二年後の昭和4 (1969)年で また、早渕川沿いに広がる水田や 歴史や言い伝えの多い地域であ 和42(1967)年、 小学校勝田分校としてプレ 港北 寸

を飼育し、

勝田小学校

勝田団地

横浜生田線

昭和48(1973)年撮影の空中写真。勝田団地の北端、緑地に囲ま れるように勝田小学校が建っている。(写真:都市基盤整備公団)

だった孟宗竹を植え、春にはタケノコ には地域に棲息していたこれらの魚類 が棲んでいた。「勝田なかよし水族館」 を収穫し給食の副菜として楽しんでい 団地が建てられたところには、かつ 10周年には校庭の隅に地域の特産 今でも自然が豊かに残っている。 丘は雑木林や竹林が鬱蒼と繁 メダカ、ミヤコタナゴなど 地域性を大切にしている。 「丸沢池」などの溜池があ 最乗寺 中原街道 横浜生田線 龍福寺 勝田橋

昭和27(1952)年の勝田耕地。左側に最乗寺の屋根、右側の道路の交差するところが勝田橋、その左上に龍福寺が見える。





現在の学校。運動会でフォークダン スを演ずる。(写真:勝田小学校)

みんなが大切にしている竹薮。 (写真:勝田小学校)



昭和43(1968)年、中川小学校で勝田分校の入学式が行われ た。その時の記念写真。(写真:勝田小学校)

田小

ピンクのラインの入った校舎がくっき 年に新校舎落成と同時に校名も山田 山田 創立は昭和 吉元 分校として開設 石 JΠ 丘の上に、空色の外壁に 45 (1970) 山交差点付近から 年、 翌中 46 111

学校として独立した。 これが山田小学校であ (1971)小学校

> 年に鉄筋四階建て校舎、 体育館等整備を整え、現在に至 その後

東に15キロほどの地点、東山田地区

山田小学校は中川小学校を基点に北

ほぼ中 理による新しい街に変貌したが、 も学区で、殺風景な造成地を子どもた は港北ニュータウン開発区域で区画整 校当時はすみれが丘、北山田 面影の濃い地域である。 央にあたる。学校より西側 東側 方面 帯

> (業館などで賑わっていたという。 帯はのちめ通りとして商店 中 原街道の

どを収集・保存し、 る。昔を偲ぶ資料が数多く展示されて 貴重な古文書や開発前の民具・農具な もたちは社会科の勉強に訪れている。 る東山田郷土資料館には、 学校のすぐ近くにある東山田郷土資 かりでなく各地の学校からも子ど (館長・栗原満直さん) 一般に公開してい 山田 が地域の

中川中学校 南山田先行造成地 中原街道 山田小学校 中川小学校跡地 山田神社 早渕川 第三京浜

昭和54(1979)年撮影の空中写真。右やや上方に山田小学校、左下に中川小学校跡 地と中川中学校、中心からやや左下に山田神社が見える。南山田の先行造成地が くっきりとわかる。(写真:都市基盤整備公団)



平成13(2001)年秋の運動会。子供たちと保護者や地域の方々がともに 「都筑音頭」を演じているなごやかな光景。(写真:山田小学校)



昭和44(1969)年、中川小学校東山田分校の建設用地。 (創立20周年記念誌より)

現在に至っている。 に現在地に新校舎を建築移転 「小学校」と名称も新たに独立し 48

柚の木交差点

和

早渕川

たことが起点である。 学校としては明治6(1873)年、 内小学校 が観福寺 に移転し、 名称が昭和 石称が昭和14(1939)年の位施設の場所に新築移転 明治35(1902)年に 一分教場に、 となり、 横浜市山 その翌年 14 更に昭 37年に早 早渕川 山内小第二分教場





昭和43(1968)年、山内小学校荏田分校の頃。周囲は人家 もまばらで田畑が多い。(写真: 荏田小学校)

国道246

東名高速

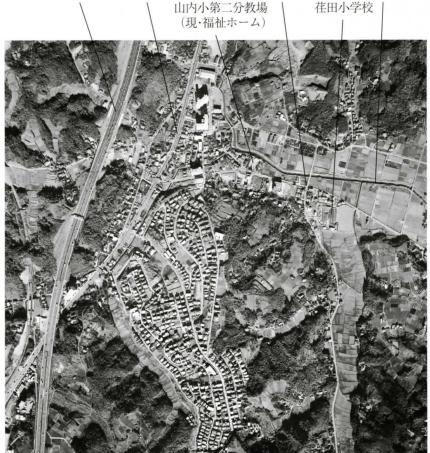
昭和11(1936)年頃、山内第二尋常小学校での農繁期託児所の光

景。校庭で体操をしている珍しい写真。(写真:大久保正治さん)

昭和18(1943)年秋、山内小第二分教場の託児所。 (写真:徳江義治さん)



昭和11(1936)年、山内第一尋常高等小学校主催で近隣校を招 待して開いた篭球(バスケットボール)競技会。写真は優勝し た山内第二尋常小学校のチーム。当時、バスケットボールが 盛んだった。(写真:大久保正治さん)





昭和48(1973)年撮影の荏田地区。(写真:都市基盤整備公団)

すみれが丘小学校

宅地のほぼ中央。 先駆けて開発された街、 場所は港北ニュータウン建設に 田小学校から分離独立して開校 れが丘小学校は昭 すみれが丘住 和 50 (1975)

したマイクロバスで通学したというエ ピソードが残っている。 たり農道や山道であった。工事による での道は造成中の殺風景な砂利道だっ 離れた山田小学校に通った。学校ま 和48年頃、子どもたちは2キロほど すみれが丘住宅への入居が始まっ 一、二年生は東急の提供

> という話などが、開校10周年を記念し りの水を雑巾で絞り取ってやり遂げた も不十分。雨上がりの運動会では子ど 丘』に載っている。 て発行された『郷土読本 もたちやPTAの母親たちが、水たま 創立当初はさまざまな設備や校庭整備 すみれが

となって、現在に引き継がれている。 くる。これはすみれが丘小学校の伝統 ようという草創期の教育の姿が見えて 学校と地域が一体となって作り上げ 真新しい学校で学ぶことになったが、 その2年後に校舎が落成し、

合住宅・シンフォニックヒルズが る。その後造成工事が進み住宅地や集

都田西小学校

近くて ジ参照)を見ると、都田西小学校と川 を東西に分け西側にあたるので都田西 校名の由来として、都田小学校の学区 た年に撮影した空中写真 小学校としたと記されている。開校 て開校した。5周年記念誌によると、 発展に合わせ、都田小学校より独立し 団地を挟む一帯はまだ山林地帯であ 工業化の進む池辺・佐江戸地域 |西小学校の創立は昭和54

池辺・佐江戸地区には二本の幹線道

上-運動会で1年生を励ましながら誘導する上級生。下-力いっ

ぱい綱引き競技。(写真:すみれが丘小学校)





卒業生が残した記念作品が校舎に飾られている。 昭和54(1979)年の開校以来、 未来へ向かって進んでいこうという子どもたちの希望が力強く描かれている。 上一昭和54(1979)年度卒業生記念作品「未来に向かって、はばたこう」。

下左-昭和56(1981)年度卒業生記念作品「旅立ち」。 下右-昭和57(1982)年度卒業生記念作品「翼をひろげて」。

(写真:都田西小学校『創立5周年記念誌』より)



性の上に、工業化、近代化による新 中原街道沿いの小高い丘の上に建 跡としては今は跡形もないが佐江戸 田西小学校は古い歴史に培われた地域 良時代頃の遺跡が確認され、 掘調査によって縄文早期から古墳・ 麻生線である。地域の歴史も古く、 校風を取り入れている。 が縦横に走っている。古道・中 (現・丸子中山茅ケ崎線) 池辺城があったといわれている。 中世 一つ都 0 遺

また校歌は横浜市出身の高木東六作 ・作曲として学校はじめ地域の誇り

学校も教室の増設、

年を追って児童数も増

荏田南小学校

学校とともに開校 1 荏田 タウン開発区域の最初の学校 小学校は昭 小学校、 和58(1983)年、 在田南中 港

素を整えて、港北ニュータウン第 1の街びらきを行った地域 広大な区画整理事業が行わ 銀行など街を構成するすべての要 小・中学校、 南・荏田東地区は先行的に街 公園、 集合住宅、 れ 郵便

それだけに喜びと期待も大きく、

い街の曙の感があった。校舎外壁も

いピンク色で統

一され、

明るく斬新



中写真を見ると、

区」(20ページ参照)

街びらきー

昭和58年、

様子がよくわかる。

開校当時の荏田南小学校。(写真:横浜市)



昭和26(1951)年、荏田南小の前身である山内小学校荏田分校の 頃の写真。(創立10周年記念資料集『フラミンゴ』より)

てほし 澄み切っ

との願

で校旗を完 「心にい

た校章を制定。翌年には

「純真で広

た大空のような児童

域に多い竹をモチーフとし 58(1983)年に開校した。

和

小学校は荏田南小学校

昭和59(1984)年撮影の荏田東第一小学校。



Ø

備を整えながら、 を繰り返し、 数も増え、

ニュ

ータウン開発区

荏田高校

- 荏田南小学校

荏田南中学校

荏田東第一小学校

住宅建設が進むと同時に地域の児童

学区変更による児童の移籍

また、

増改築等、

学校整

風を」

の校歌が制定され

た。

年目の昭和61年には

上ー中央に校章が描かれた校旗。校章は古くから竹林の多い荏 田地区を象徴している。大きな輪は「竹の幹」を、中の輪は 「一」、中央に「小」、周囲の6枚の葉を合わせ全体で「東」を図案 化。竹の「ねばり強さ」と、「調和(輪)」のとれた人間に成長する 願いが込められている。(創立10周年記念誌『荏田東十年』よ り)。左-昭和59(1984)年撮影の荏田南・東地区。(写真:都市 基盤整備公団)

荏田東第一小学校

に自然をテ

活発な活動に発展している。 酸性雨やゴミ問題を取り上げたり どもたち自身で制作・放映する番組 る野鳥観察や水質調査を行ったり、 どもたちの鳥・虫・魚など自然へ の学区から分離独立する形で行われ ることに合わせての開校である。 型集合住宅が茅ケ崎南地区に建設され 学校の南側には広い茅ヶ崎公園があ これらの恵まれた環境の中で、 一物相保護区にも指定されて 川小·荏田南小·荏田東第 一自然たんけんクラブ」によ がピッチをあげる中、 校は昭 内の三番目の

地域を巻き込んだものになった。 教育シンポジウム」を開くなど、学校 いう先生方による研究会も開始し、 の中にどう環境教育を取り入れるかと れらの活動は当時の報道機関 10(1998)年に発行した創立 一神奈川県愛鳥モデル校 『茅ケ崎小学校たんけ また、平成6(1994)年より三 一回横浜環境 方、 10周

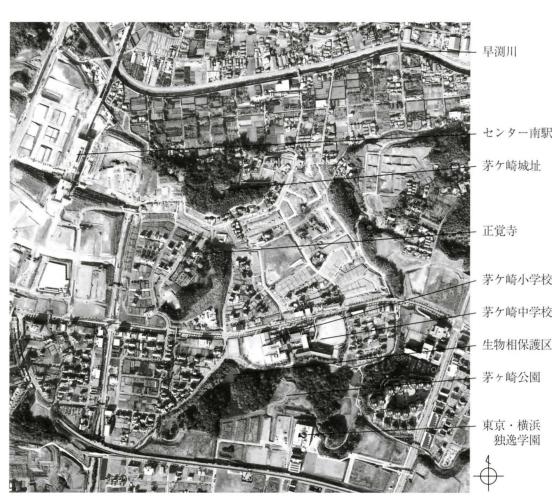
域住民に呼びかけて「第

平成6(1994)年の運動会。地域の人々による八木節保存会 の音頭で踊る子供たち。(『茅ケ崎たんけんガイド』より)

来を担う子どもたちにかかってい 茅ケ崎小の取り組みに注目したい。



(1995)年、PTAの方々が企画した茅ヶ崎公園 のウォークラリーで、自然を楽しむ子供たち。 (『茅ケ崎たんけんガイド』より)



平成3(1991)年撮影の空中写真。(写真:都市基盤整備公団)





「未来の茅ケ崎小 |4年生の作品。 (『茅ケ崎たんけんガイド』より)

ている。

きさつが述べられている。 もできなかったことを考え、「中川小 ら親しんできた町名を」という強い願 もあったが、地元の人たちから「昔か 付ける時、 の西にあたる「中川西小」になったい いがあり、 住宅の建設に合わせて開校したもの。 創立10周年記念誌によると、校名を 川北岸一帯にあたる第一地区の集合 ニュータウン開発区域のうち、早 西小学校の創立は平成2(1990) また、地元の協力なしに街 新しい名前を希望する意見

格好のエピソードといえる。 学校周辺には山崎公園、 一の協力のもとに創り上げられていく 古い歴史の上に新しい街と学校が住 烏山公園

が広がる自然に恵まれた環境

緑道、南側には早渕川沿岸の水田地帯

活が描かれている。 かがわにし』には活気あふれる学校生 道などの古道が近くを通り神社仏閣も多 また、大山街道(矢倉沢往還)、鎌倉街 創立10周年記念誌『光あふれる 昔の歴史が偲ばれる地域でもある。

抜粋させていただく。 ☆野球選手になって野球場で試合をし ☆サッカーせんしゅになりたい 五年生 子どもたちの未来への夢をいくつか 10年後の自分

> ☆うちゅうりょこうに うになる いけるかな。 行

☆だれでも小がたひこうきがかえるよ

☆地球すべての国が平和になり、 うし仲よくなり、 けたらいいな。 沖なわの軍用地も 国ど

なくなるだろう。



上-平成6(1994)年10月、アフリカ青年外交官が 左-同年、「生き生きはまっ子の日」の10月 ボランティアの清掃活動を行う子どもた 22日、 なかがわにし』よ (写真:『光あふれる

ることから川和東と付けられたとい 園のすぐ隣、川和中学校に並んで開校 とから、平成6(1994)年、 川和小の児童数の増加が予想されるこ した。校名は川和地区の東側に位置す づくりが進み、荏田南小・都田西小・ 和東小学校は港北ニュータウンの 川和富士公

えて作り直されたものである。開発前 だ人工の山だが、開発のため場所を変 ともとは江戸時代の富士信仰にちなん 学校に隣接している川和富士は、

が、開発の波によってほとんど姿を消 は多くの村に富士塚が造られていた 今では、この川和富士と北山田に

> にモチーフとして使われている。 た。これらは地域のシンボルともな ある池辺富士の三つが残るのみとなっ ある山田富士、池辺農業専用地区内に この川和東小学校でも校歌、校章

学びやの原点ともなっている。 子どもたちの遊びの場としてだけでな 小高い頂上からの見晴らしもよく、 歴史や自然の学習の場でもあり、

うイベントを、全校あげてPTAや地 域の方々にも参加を呼びかけて行って -成13(2001)年の11月に「国際ワー また、 毎年6月には「川和東まつり」とい 国際理解教室の一 環として、 ル

人をめざす教育も行われている。 た。伝統を重んじながら、新しい 方々を招いてなごやかな交流を図っ ウィーク」を開き、 ハワイ出身の



虫やザリガニなどの生き物の飼い方を 地域の人たちとの交流コーナー。右側のグル



話でお話。左側は折り紙製作中。(写真:川和東小学校)

開校した茅ケ崎台小学校。 学校が目に入る。これが平成6(1994) のびとした自由な未来への思いが描 今時の子どもの気質、 今の子どもたちの夢や希望が、 記念誌『はばたけ台小っ子』 成11(1999)年には創立5周年を祝 タイムカプセルといった趣があ 浜元石川 道路の北側に薄いグリー 崎小学校から分離独立して 線の環境事業局都筑工 素直さ、

年生から六年生まで寄せ書きで載っ かれて楽しい記念誌になっている。

横浜市立茅ヶ崎台小学校 平成11年2月発行

平成11(1999)年発行の創立5周年記念誌『は ばたけ台小っ子』の表紙(右)と裏表紙(左)。 子どもたちの遊びや夢が満載されている。



ボール あそび

局発行のパンフレットに記されている。



開校当時の校舎全景。 (写真:茅ケ崎台小学校)

『はばたけ台 小っ子』に掲載 された1年生の 遊びから。







(写真:北山田小学

上一屋上部分に設 置された太陽電池 パネル。中一現在 の日射量や発電量 を見ることができ る昇降口正面のモ ニター。下一近く の公園で自然観察。

夢中で聞いている。新しい学校で学ぶ ニが棲んでいた話などを子どもたちは や池にメダカやドジョウ、ウナギ がたんぼや畑で、 ちの関心を呼んでいる。かつてこの地 話を地元の方を招いて行い、子どもた 自然を大切にしていきたいとの思いを 子どもたちは、 育の一環として、昔の暮らしや農業 験的に導入した北山田小学校は、 くりの 極的に取り組む学校といえるだろ 牛を飼っていた話、 開校と同時に、 未来の人と自然のかかわりに 未来指向のシステムを実 昔の話に目を輝かせ、 お米や野菜を作っ 地域に根差した教 あるいは小川

ジュを基調にした北山田小学校が

田

Ŧī.

H

住宅

明 る

代の世界的課題である地球環境保全、 たっての検討に役立てたいと環境保全 ルギーについての理解をはかり、 資源の有効活用などに取り組んだもの。 として利用する)など、これからの時 効利用 (雨水をトイレの洗浄や雑用水 ているもので、地球温暖化防止のため もある。これは市の環境保全局で進め クールとしては横浜市唯一の実験校で に雨水利用システムも導入し、 開校したのは平成8 (1996)年 自然エネルギーの活用、 この事業によってクリーンエネ 平成10(1998)年には太陽光発 ルドテスト事業を導入、 水資源の有 エコス

南山田小学校

という緑地帯にぐるりと囲まれ、閑静 があげられる。南山田小学校は徳生公 緑地帯がたっぷり確保されていること 校は平成9(1997)年。 で自然豊かな住宅地に建っている。 港北ニュ 緑道・くさぶえのみち、神無公園 ータウンの特徴の一つに、 開

建築。車椅子でも上れるスロープの廊 公務員宿舎など大型集合住宅も林立す 下など障害を持つ子どもたちへの配慮 学校は新しい近代的な設備の整った 緑の中にビュープラザセンター北や

も行き届いている。 また、地域住民との交流を深めるた

> ような機会が必要になるだろう。新し 中、子どもたちにも今度ますますこの を持っている。グローバル化が進む ゲストを迎えて世界の民族に触れる場 ようだ。 い時代、新しい教育の方向性が見える んだり、国際交流としては、 外国人の





上-地域の古老たちを迎えて昔の話を聞く子ども たち。下左-民族衣装を着た外国人ゲストにさま ざまな国の話を聞く。下右-スロープの廊下。 (写真:南山田小学校)

パソコンクラブ。クラブ活動にはこのほか、リサ イクル・工作クラブ、空手クラブ、卓球クラブ、 クラブ、バトミントンクラブ、音楽クラ マンガ・イラストクラブなどがある。

(写真:都筑小学校)

う子どもたちへの願いが込められてい 平作詞・松崎陽治作曲)も、未来を担 うに作詞を公募して作った校歌(小林

る。新しい学校のスタートは地域との

歴史や産業を直接古老に聞いて学

開校は平成9(1997)年。 ター北駅近くの閑静な住宅街に建つ。 都筑の名を冠した都筑小学校。セン

ことだろう。

連携によって力強く踏み出したという

に伸び、どんな風や嵐にも耐え、 やかな動きをしている竹のように育っ の地に多い竹をモチーフに、まっすぐ てほしいという願いが、また、 校章は広く図案を公募して作成。



写真クラブ



バスケットボールクラブ



れる活動では、多彩な才能を持つ地域 表れている。月に二回、土曜日に行わ 体的な知識が大きな魅力になり、子ど 験で培った技能、実践によって得た具 の方々がボランティアで講師を務め、 もたちの人気も高い 活動を展開している。企業や長年の経 して、ひと味違う生き生きとした学習 ~2名の教職員とともに融合・協力 子どもたちのクラブ活動にもそれは

竹をモチーフ にした校章。

*つづきの丘小学校

然豊かな閑静な雰囲気が漂う。 ら都筑中央公園に抜ける緑地帯で、 の丘小学校。 開校は平成11(1999) 学校から東側方向にはタウンセン 筑区の中の19番目の開校であ づきの丘」とひらがなの校名に と開校当時の校長先生の話 方学校裏側は鴨池公園か 人のやさしさとあた 行政機関や商業施 É

や学校間交流も活発で、

子どもたちは 地域との交流 港北ニュータウン開発の完成時

恵まれた教育を享受している。

小中交流の場で、荏田南中学校三年生が「島うた」を披露 野菜名人を招いて2年生の勉強会。講師は朝市や生産者直売 で活躍している地元の方。子供たちは興味を持って聞いている。



横浜建築労働組合都筑支部の方々がボランティ アで親子工作教 (写真:つづきの丘小学校) 室を開催する。

静な住宅地に建っている。

横浜国際。 スター 田

閑

小学校は平成13

ト地点に開校した学校で プールのすぐ近く、

東山田地区は港北ニュータウン開発



設ラッシュの槌音が高く、 込んで開設され、 い新しい街である。 中で街づくりが今なお進められてい 学校は山田小学校の児童数増加を見 っぱい取り組んでいる。 子どもたちは学校行事の創造に力 全体が完成に向かう中で建 真新しい校舎を舞台 新築住宅の

上一山田小学校から移っ てきた上級生が、新一年

生を迎える対面式。 右-屋上から撮った運動 場。左側の丸い屋根は横 浜国際プール。

(写真:東山田小学校)



中川中学校

された学制である。 20(1945)年以後の教育改革の中で新設 中学校は太平洋戦争が終結した昭和

が義務教育になったのである。 止され、小学校の6年と中学校の3年 六・三・三・四制度の発足によって廃 れた教育基本法・学校教育法により 高等科)が、昭和22(1947)年に公布さ 常高等小学校(6年の尋常科に2年の 制度は大きく変化した。それ以前の尋 これによって都筑区内にできた中学 戦後のさまざまな改革の中でも教育

昭和22(1947)年に創立している。中川 校は中川中学校と都田中学校で、同じ

> 52(1977)年発行の30周年記念誌に記さ 内に7教室借用して開校したと、昭和 形でスタートした。当時、中川小学校 中学校は中川小学校から分離独立する

> > 会を結成。小学校の裏山に土地を取 て独立校舎の設立をかかげ、建設委員 の人々は、昭和24(1949)年に全町あげ

学になり「お互いにはずかしくてなじ 喜びやひたむきな姿も浮かんでくる。 惑いなどが綴られている一方で、学ぶ めなかった」と教室の様子や共学の戸 ストーブなどなかった」、また、男女共 たろう。当時の卒業生の思い出話に ていた時の学校創設は大変なことだっ 期、物資も不足し全てにおいて窮乏し 喜びをもたらしたが、戦後の混乱の時 ようになった中学校は、人々に大きな 多などすき間風がヒューヒュー入り、 このような学校の状況に対して地域 義務教育としてすべての子供が通う

教育に対する地域・学校と生徒たち

いように気をつける。……」 な気がして、大切にいつまでも汚さな あった。……何だかもったいないよう ながら勉強した時のことを忘れられな 業を見、あの気持ちよい槌の音を聞き 空の下で材木に腰掛けて着々と進む作 歴史を顧みて」に綴られている。 場の古材を購入して新校舎を建設、 ……と思うとき、ひとしおの喜びが い。新校舎ができこれが私たちの学校 の喜びが30周年記念誌の「校舎建設の 月であった。新しい学校ができたこと の上に移転したのは翌25(1950)年の4 得、町民による勤労奉仕で整地し、工 ------建設途上のある晴れた日、 青 Ш

を繰り返し、 も大きく発展していった。 整備されていくと同時に、学校の規模 リート校舎に、さらに現在の施設へと の思いが重なっている。やがて増改築 木造校舎が鉄筋コンク

場に選ばれたり、高い評価も受けてき まな研究実践が行われ、全国大会の会 育の研究」「社会福祉の研究」とさまざ 映するように「地域社会学校の研究 - 英語学習の個別化の研究」 「視聴覚教 教育研究も盛んに行われ、時代を反

れらの源流を見る思いがする。 多い。教育熱心な地域性、社会奉仕、こ なっていたことから、地域で活躍して 筑区の北側にあたるほぼ全域が学区に いる人々の中にはこの学校の出身者も に、さらなる発展を目指している。 今の中川中学校はこれらの伝統の上





どに当時の様 昭和29(1954)年、 校内マラソン。 服装、 頭髪な 子がうかがえる。 (写真:中川中学30周年記念誌より)

·都田中学校

ちだけで校舎を造るという運動が行わ られた。翌23(1948)年には地元の人た 徒たちによるシャベルや鍬を使っての 新築された。地域の方の勤労奉仕や生 の校舎であった上段校舎を使って始め 中学校と同じように都田小学校高等科 度発足によって誕生した。開校は中川 れ、24(1949)年に小学校裏の山の上に 都田中学校も昭和22(1947)年、新制

> ピソードもほほえましい。 ピカピカに磨いて大切にしたというエ いる。新しい木造校舎は床に油を塗り わったと創立50周年記念誌に記されて 張整備を進め、延べ一万人の人々が関 子や各地区交替で校舎敷地や運動場拡 土運びなど、全校あげて取り組んだ様

ない時代、 物資の乏しい、衣食住さえままなら 一教科書も藁半紙を数十枚

にはなかった。生徒たちは紐をグルグ

学用品も十分

ル巻きにして野球のボールにしたり

要な行事に町内会長全員が出席される ういう真摯な誠意を理解して下さるP 生徒指導に全力で向きあう教職員、こ 事、……自分の時間を投げうってまで はなく激励された町内会長。学校の主 回想録に綴られている。「学校が荒れ 特別のものがあると、ある校長先生の 活躍の様子も描かれている。 藁を持ち寄って縄をない、 てきたさなか、学校側を詰問するので てもらったお金でバレーボールを購 地域の方々の教育に対する熱意には 県でも優秀な成績を収めるなど 練習の成果は横浜市で優勝した 農協に買

を振り返って述懐している。教育現場 が、卒業式の日に「感極まって涙を流 3年4組進路指導日記」が放映された の取材を受け、「泣虫先生ありがとう り……」と述べられている。 てはじめて荒れた学校も見事に立ち直 さ……澄んだ目で教育の現場をみれば すカメラマンに人と人との関係の奥深 自然にそうなるのでしょう。」と当時 また、平成2(1990)年度にはNH Aの方々、このチームプレーがあ

多くの人々を社会に送り出している。 化祭・体育祭など多彩な行事を通して 張をたどる一方、 都田中学校も、生徒数、施設等の拡 教育内容の充実、



一期生の図案に よる菊の若葉をあ しらった校章。

が感じられる一文である。 の生々しい息遣い、人間関係の奥深さ Ш

る。

平成6(1994)年、新入生を迎える会で劇を演じる。 (写真:創立50周年記念誌より)

うこそ都田中



昭和56(1981)年12月に行われた校内ロードレース大会。



平成元(1989)年、若葉祭のキャッチフレーズ。 (写真:創立20周年記念誌より)

JÌ۱ 和中学校

で建てられた斬新な建築、

半円形の校

界的に有名な建築家・槙文彦氏の設

よく表れている。何もない造成地に世 港北ニュータウンの開発区域内にある 中学校の生徒数急増に対処するため、 港北配水池側に建設され創立した。 第二地区」(20ページ)の空中写真に 創立当時の地域の様子は「昭和58年 和中学校は昭和55(1980)年、 都田

学校は大地にしっかり根付いている。 を受けて育った「地域の学校」川 強く表現され、歴史の上に新しい人間 菊の若葉の二枚重ねを背景に校名が力 から「川和の菊」として有名であった 形成を目指す願いが込められている。 地域の人々の期待と惜しみない協力 校章は第一期生の図案で、江戸 る通学路を通ってきた話が載って が動き周り、生徒は毎月のように変わ 記念誌には、創立当時の思い出話とし 多かったという。 デザインが大きな話題を呼び見学者も 舎が写っている。当時は、この校舎の て周辺をショベルカーやブルトー 平成11(1999)年に発行された20周

時代

開校当時の茅ケ崎中学校。

*茅ケ崎中学校

創設された。中川中学校の生徒数急増 19名の生徒数を数えた。 分離独立。創立当時、すでに16学級、6 に対処するため、茅ケ崎方面校として あたる茅ケ崎地区に、茅ケ崎中学校が 最中の港北ニュータウンのほぼ中央に 昭和56(1981)年、

り広げられていった。創立20周年記念 熱い期待を受け、活気溢れた活動が繰 な中にも新しい街の希望として地域の くからも見える状態だった。このよう ンボルのように一際目立つ時計台が遠 で荒野の中に学校の近代的な建物、シ ページ参照)を見ると、周辺は造成中



開校5年目、

茅ケ崎中学校の校章。図柄は公孫樹[イ ウ]の葉をモチーフに茅ケ崎のチ 「中」の縦棒の模様は縄文 歴史性を表現。公孫樹のように大地 に根をはり、たくましく伸びていこ の願いを込め、さらに翼の形にも見える 図形に「未来への飛翔」、双葉の組み合わ せに「友情・友愛」の意味を表現している。

そこで一番になれなくても、もしそこ

でつまずいてもいいんです。一生懸命

熟成期へと、歴史を刻み続けている。

わった。街とともに学校も草創期から

中心地として新しい街に生まれ変 今、茅ケ崎中学校の周りは、都筑区 地讃頌』の指揮者をやった時に思わず ました。卒業式で歌う事になった『大

涙がこぼれたのも、

大切な思い出に

くのメッセージが詰まっている。

れば必ず道は開けます。」などなど多 やることに意味があるのです。そうす

……」、「……『今一番やりたい事を一

「懸命やる』ということです。

決して

平成9(1997)年度の文化祭。(写真:創立20周年記念誌より)

(写真:横浜市)

いる。

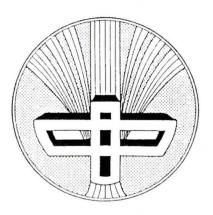
ンクールは、異様な盛り上がりを見せ ローガンだったような気がします。」、 クラスの気持ちを一つにした合唱コ Try one's Best!! または この言葉が体育祭のス

荏田南中学校

に開校した。 「南小学校、荏田東第一小学校ととも 田南中学校は昭和58(1983)年、 荏

 \mathbb{H}

学校に通っており、そこから分離独立 ある。当時荏田地区の中学生は山内中 親校は青葉区内にある山内中学校で



荏田南中学校の校 章。この地に昔から ある樹木をデザイ 幹は教師と父母 の協力し合う姿、枝 は伸びていく生徒の 姿を表している。周 囲の丸い縁取りは円 「中」は知・徳・ 体の調和のとれた人 間育成を目指すこと を表している。

> り」として、 個性豊かなデザイン、

るい未来をイメージしたものになって を醸し出し、 カーマイン色の校舎は暖かい雰囲 周囲の緑とマッチし、 明

とになった。 新しく入居した住民の中学生が通うこ する形で開校、 荏田小学校の卒業生と

あふれる街並み景観の創造、フェンス ある「住みよい魅力あふれる街づく ど、建設上にさまざまな配慮がなされ を後退させ開放的な雰囲気の創出な 行者専用道路との調和と活用による緑 学校は港北ニュータウン事業の目的で 成から街づくりへと飛躍した画期的 郵便局など生活関連施設とともに、造 られ、住宅建設、商店街、医院、銀行・ だけに地域の人々の期待感も大きく で、また象徴的な開校であった。それ 第一番目の街づくりの一環として建て この学校は港北ニュータウン建設の 歩

13 る

このタイトルをつけ

ボランティア活動なども活発で、新し 他校との交流や老人施設を訪問しての ルで活躍しているものもある。また、 多種にわたり、区・市・県・全国レベ には多彩な催しが繰り広げられて いから命名)をスタート、 い街の新しい学校として果敢な挑戦を 天に昇るように発展してほしいとの願 開校3年目に文化祭「昇龍祭」(龍が (軟式) テニス、バドミントンなど スポーツ面の活躍も著しく、 バレー、陸上、テニス、 以後毎年秋



地域の施設を訪問してお年寄りとひとときを過ごす荏田 南中の子どもたち。(写真: 荏田南中学校)

ことが印象深く、 花いっぱい運動」に取り組んでいた 新しい学校は備品などが不足がち。

びかけたPTA最大のイベントになっ 餅つき、特設レストランなど多彩な催 た。収益金の使い道は、部活動への援 祭」と名称をつけ、地域の人々へも呼 はかることに。3年目には「コスモス そこでPTAのバザーで費用の捻出を しは地域にも好評だ。 てとしている。植木や農産物の特売、 備品の購入、周年行事への積み立

賞に輝いたり、女子駅伝で関東大会に 行われている。 総称した「やまゆり祭」は年々活発に に行われ、全国花いっぱい運動で優秀 PTAの支援を受けて部活動も活発 また、文化祭と体育祭を

中川西中学校

発区域の第一地区、早渕川より北にあ 烏山公園が見える。この緑の塊に並ん た形でゆったりした雰囲気を持つ。 が設けられており、 宅による生徒数急増に合わせたもの 中川西小学校と同時に開校した。平成 たる一帯の初めての街びらきの中で で建つのが中川西中学校で、 に出ると、 (1990)年に開校。 港北ニュータウン開 市営地下鉄3号線中川駅を降り地上 学校と烏山公園の間には運動広場 年春に入居開始した集合住 西の方向にこんもりとした 広い空間を共有し 平成 2

> 根強かったようだ。 中学校と中川中学校の中間にあたるこ 自分たちの近くに学校をという願いは たちは4 の地では、どちらに通うにしても子供 できた」と度々言われたそうだ。山内 の方たちは「百年待ちに待った学校が れによると、開校にあたって地元代表 には創立当時のことが載っている。 ~5キロの道のりを歩いた。

というタイトルがつけられている。大 久保さんによると、 史研究家・大久保太市さんの作で「花」 る思いも強い。校歌は近くに住む郷土 それだけに地域の方々の学校に寄せ 開校当時、

平成12(2000)年発行の10周年記念誌







平成13(2001)年9月、文化祭の光景。



平成13(2001)年6月、体育祭でのリレー競技。



平成13(2001)年12月に行われた球技大会、サッカー。

具部が選ぶ学園・一川和高等学校・

写真部が選ぶ学園生活と未来へ残したい景観。川和高等学校・荏田高等学校・新栄高等学校の

川和高等学校

昭和38(1963)年

徒は皆、行事の時は積極的に活動しているので、生き生きとした写真を撮私達写真部は行事の写真撮影等を中心に活動しています。川和高校の生写真部のコメント 何事にも自主的に取り組んでいる。部活動・行事も盛んである。特徴 何事にも自主的に取り組んでいる。部活動・行事も盛んである。

ることができます。



平成13(2001)年12月に行われた球技大会、バスケットボール。



平成14(2002)年2月。加賀原から西の方面を望む。 のひとつは見晴らしがいいこと。そのため空の雲も美し



平成14(2002) 年2月、モザ イクモール港 北。夜空を バックに輝く 観覧車とそこ から見える都 筑の夜の街並 みは美しい。



顔とも言える総合庁舎は、特に夕暮れを背景に浮かびあがる 姿が美しい。

平成14(2002)年2月、センター南駅前の大通り。 歩道橋上からのセンター北方面の眺めは壮観。発 展を最も強く感じさせるもののひとつといえる。



平成12(2000)年11月、港北東急百貨店内吹き 抜け。明るい未来を予感させる不思議な光景。

昭和54(1979)年

写真部のコメント 自主性と協調性。 気力と体力。個性の尊重。燃える体育祭

だった過去10年という大きなシャッターチャンスを逃してしまったのが悔

は最も身近な被写体といえる。

建設の最盛

未来に残したい都筑区」

やまれる。新たな発見に向けて一歩を踏み出したい。

平成13(2001)年11月、車椅子ダンスの手ほどきを受ける高校生。手を取って 教えているのは車椅子ダンスの指導者。心のバリアフリーこそ大切と実感。

写真部のコメント 創立19年目を迎え、新設校としての初々しさを忘れず、 昭和58(1983)年

写真で、そんなふり返りの必要を表しました。 必要もあります。特に文化祭のお点前、 自分を見つめ自分を作る、将来に向けた活動ではないでしょ の学習も、体育祭での頑張りも、文化祭での活躍も、 盛んな明るい校風です 未来へ向かうイメージ」の写真……、 中堅校としての落ち着きも加えてきました。部活動の 前を向くだけでなく、 時々は後ろをふり返る 車椅子ダンスの体験 その点では、授業で すべて



平成13(2001)年6月、体育祭、玉送り競技。



平成13(2001)年6月、3年生「数学B」の授業。質問に答える先生。



平成13(2001)年11月、文化祭で神妙にお点前を披露。



平成14(2002)年3月、第17回卒業式。

市民交流と文化活動

な祭りを紹介してきたが、それらの祭りは現在も続いている。らない要素だからだろう。この写真集でも開発前の村々の伝統的りが営々と受け継がれてきたのは、祭りが人間社会になくてはな空間へと誘う不思議な作用がある。古来から神事や祭祀などの祭祭りは人々を現実生活から解き放し、心を高揚させ、非日常的

感に反映され未来への道筋、キーワードが見えてくる。ある祭りやイベントには、新しい街、新しい時代のニーズが敏事になっている。市民エネルギーの結集と解放、また創造の場で力になった。この祭りは現在、区民祭に受け継がれ、大々的な行の活性化を促す目的で始められ、ニュータウン事業の大きな牽引一方、港北ニュータウンまつりは事業のPRと住民の交流・街

*港北ニュータウンまつり

開催されたことだろう。
次代を担えるか」というテーマのシンポジウムがンのほか、特筆すべきは「大規模ニュータウンは土芸能保存会によるお囃子などのアトラクショ(1985)年に行われた。ポップスコンサートや郷第一 回港 北ニュータウン まつりは 昭和60

大きな機動力になった。 大きな機動力になった。 大きな機動力になった。 大きな機動力になった。 大から市民参加型イベントへと転換を図り、住 大から市民参加型イベントへと転換を図り、住 大から市民参加型イベントへと転換を図り、住 がはまつりは毎年開催され、平成8年の第12 以後まつりは毎年開催され、平成8年の第12



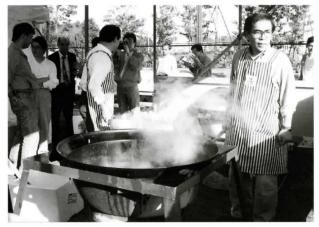














昭和60(1985)年から毎年行われてきたニュータウンまつりは、年を追う毎に 入場者が増え、たいへんな盛況を呈した。熱気球、メインステージでのコン サート、スタンプラリー、ミニ動物園、ミニ機関車、竹細工実演、朝市、囲 碁、ヤキソバや豚汁などの食品販売、植木や花の販売など、広い造成地を 使ってその年々の特徴を見せながら内容も変化していったが、人々は祭りを それぞれのスタイルで堪能し、家族で楽しんでいた。写真はその中から印象 的なものを選んで掲載した。(写真:伝田園都市出版)







と多彩な出し物で賑わっている。

都筑区総合庁舎を中心にパ

レード、

御輿、

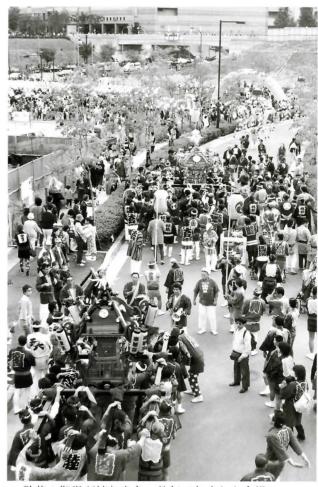
フリーマー

朝市な

以後毎年11月に恒例化

(写真:田園都市出版

成7(1995)年に第一回の都筑区民まつりを開催:



数基の御輿が練り歩き、熱気で包まれた会場。



舎前で祭り囃子を実演し



区庁舎前を通るパレード。歓声がわき起こる。



歩道橋でのフリー マーケットは身動きできないほど の人出があった。



メイン会場の駅前は賑わいであふれた。



自然保護のコ では烏山公園での取り組みが注 目を引いた。



武蔵工業大学で行われた水ロケット。大学生の指導を受 け、子どもたちは熱心に挑戦していた。

駅前まつり

港北ニュータウンには現在4つの駅前センター 賑わいの創出に努めている。 烏山森林愛護会などの市民組織も参加し、 で創る体験型まつりとして人気を呼んでいる。 中川駅前まつりはハウスクエア横浜や武蔵工大、 街を構成するさまざまな団体やメ (写真:田園都市出版 それぞれ特徴を出し合

ンター北まつりは大観覧車のそびえるモザイクモ 北 ま

港北、

あいたいを中心に、

毎年春に開催。

もほり 大会



平成6(1994)年、東方公園を中心に福祉農園い もほり大会が開催された。(写真:都筑区役所)

れるセンター南を中心とした区民まつりに対して、春に開催される センター北まつりはフリーマーケット、ミニ動物園、朝市、餅つ き、また、歴史博物館との連携による企画もあり、地域性を活かし たイベントが繰り広げられている。(写真:横浜市)

男性に人気の囲碁、将棋。し一んと静まり返った真剣な 空気が漂っている。どの館でも人気のクラブである。



れている。



幼児室では子供連れの親子が訪れ、賑やかだ。子育て中の母親たちにとっ て交流の場にもなっている。(4枚の写真:田園都市出版)



図書コーナーを兼ねたロビー。本を読んだり、友達と話したり、 気ままに時間を使っている。

都筑区には四つの 地区センターがあるが、

その内容はスポーツから趣味までさまざま。 から高齢者まで自由な市民活動が行われてい

筑 0 森芸術劇

音学家による演奏は聴衆を魅了した。 (写真:都筑の森芸術劇場 国内外の

平成8(1996)年以来毎年開催されてきた都筑の森芸術劇場。

筑 0 森芸術劇 場 0 あ

1998 1997 996. 10 6 10 都 12 4 5 ラルフ・デーリング 都筑の森芸術劇場オープニング・コンサー ギュンター・フォーグルマイヤー ウィーン弦楽五重奏団 シューベルトの夕べ「美しき水車小屋の夕べ」

ーフルー

トリサイタル

ニュー オペラ・アリアのタベ

イヤー・コンサート

1999

1417

6

27

ショパンの真実

ウィーン・オペラ舞踏会管弦楽団 菅英三子「ソプラノ・リサイタル」ピアノ森島英子

ウィーン木管八重奏団

レク・ドレブノフスキー&ショパン・ソロイスツ

21世紀の風を運んで……

ウィーン・クラリネットトリオ ギュンター・フォーグルマイヤ 菅英三子 21世紀の春」 ウェルナー・ヒンク ソプラノ・リサイタル フル ピアノ 「ヴァイオリンリサイタル」 ートリサイタル ヴィンツェンツォ・スカローラ

2002・6・2 (予定) 第一回都筑の森国際音楽祭 ウィーン・フィルの音色とともに」 オープニング・セレモニー 講演会

2002

5 11 6 11

25 25 25 17 26

200

2000.

6

1126

第一回都筑の森国際音楽祭 ン・フィルハーモニア弦楽三重奏団 モニア弦楽三重奏団 室内楽の魅惑2 室内楽の魅惑1 共演 岡田博美 マルティン・ガブリエル

6

1

同 ウィ

ウィー

ギュンター

26

ヴィデオ上映「2002ニューイヤ

・コンサー

2

ピアノ シュテファン・メンドル ギュンター・フォーゲルマイヤー 午後の紅茶 「フルートとピアノ」 「フル・ トリサイタル」

を散策。ジャスミンカの若々しいピアノとヒ ンクの弦の美しさ、新しさと床しさのマッチ ング、最高のトリオが生まれた。

一流の音色が光った「ウェルナー・ヒンクと 仲間たち」。演奏会の後、あじさいの正覚寺

「ウィーン・クラリネットトリオ」。こんな演奏

をしてみたいと思った人も多い、優雅な調べ。



ギュンター・フォーグルマイヤーとシュテ ファン・メンドル。100%また来ると帰った フルート界の貴公子。



菅英三子 ラノ・リサイタ ル。イタリア、 フランスのオペ ラアリアと歌曲 で菅さんの魅力 開花。

流



マレク・ドレブノフスキー&ショパンソロイスツ。 ショパンのピアノ協奏曲を室内楽版で聞く都筑公会堂な らではの画期的試み。



ウィーン舞踏会 管弦楽団 ポル カ/ワルツで楽 しいお正月。 次回は「都筑の 森ポルカ」をお 土産に!



都筑区内で活躍するアマチュアオーケストラ「ムジカ・パスト ラーレ」。日頃の研鑽を重ね年一回定期演奏会を開くほか、学校 や区総合庁舎でのロビーコンサートなど、地域の音楽活動も好 評。写真は青葉台フィリアホールで開かれた第一回定期演奏 会。(写真:ムジカ・パストラーレ)



すきっぷ広場ではさまざまなイベントが開催されている が、「星空のコンサート」は夜風に吹かれながら、気軽に 楽しめるコンサートとして人気。(写真:都筑区役所)

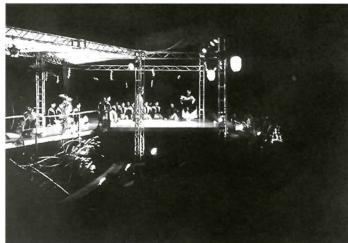


センター南駅前すきっぷ広場の上空を泳ぐ鯉のぼり。センター南駅 前商業振興会の主催で、毎年5月に行われる。(写真:都筑区役所)

宵闇のせまる森を背景に、赤々と燃える薪の炎に照らさ れて演じられる能。幽玄の物語を浮き出す闇と光の空間 は多くの観客を惹き付けた。写真は平成10(1998)年に都 筑中央公園野外劇場で上演された時のもの。

(写真:上-田園都市出版、下2枚-都市基盤整備公団)







|星空のコンサー

がれ毎年11月にセンター南駅構内を中心に菊花展を開催している。 川和の菊として有名だったこの地の菊作りは、みどり菊花愛好会に引き





せせらぎ公園古民家はこの地の民家を移築したもので、 伝統的なイベントが行われている。写真は古民家まつり 一場面。(写真:都筑区役所)





センター南駅構内で開催の菊花展。乗降客ばかりか近隣 の人々の楽しみになっている。(写真:田園都市出版)

市と農業の調和を目指した活動は未来へ引き継ぐ課題といえる。 組織も生まれ、 ていた。都市化した現在、 開発前は山林、 自然保護への願 田畑の広がっていたこの地域。 いは静かに広がりを見せている。 た自然の保全、 竹林管理などに取り組む地域住 小動物が 都市と自然、



ヶ崎公園には生物相保護区があり、昔の谷戸をそのま ま保存。小中学生の自然観察の場になっている。(写真: 都市基盤整備公団)



鮎を発見!



上-平成8(1996)年4月。正覚寺でキジを発見。 (写真:小島晴光さん) 左-平成4(1992)年、早渕川で鮎を捕獲し大喜び の地元の人々。(写真:田園都市出版)

値段も手頃と好評。

第一地区のメンバーは中川駅前を会場に毎日曜日の早朝から野菜、

季節ごとのさまざまなイベントも消費者との交流の場になっている。

果物、

卵、

花などを販売。

新鮮で美味しく、

(写真:田園都市出版

現在も第二地区のメンバーは葛が谷駅前

一地区、中川駅周辺エリアの会場風景。



二地区、葛が谷駅前の会場風景。



平成2(1990)年に行われたチャリティー餅つき大会。





メンバーによる懇親会が開かれ結束を図る。 初の平成元(1989)年(上)と平成11(1999)年(下)。.



朝市スタートの看板が見えるニュータウンまつり。



平成2(1990)年。チャリティー餅つき大会で集まった資金は、神奈川 新聞社に年末助け合い募金として寄付された。



造成地を使って開かれていた初期のふれあい朝市。 朝市は現在も第一地区は中川駅前で、第二地区は葛が谷 駅前で毎日曜日開かれている。また区民まつりやセン ター北まつりなどに参加して人気を呼んでいる。

流のあり方という方向へステップをあげたのである。 この時点から街は大きく変っていった。すなわち造成工事が完成に近づ 平成5(1993)年の市営地下鉄3号線開通、翌6(1994)年の都筑区誕生、 一面の赤土であった造成地は公園・緑道、道路、公共施設、住宅地に変 街づくりの内容の充実、新都市のイメージ作り、施設利用や人々の交

生まれ変わった街並み

と協調しながらその真価はますます発揮されていくことだろう。 なっている。21世紀へ第一歩を踏み出した港北ニュータウンは、

周辺地域

貌し、見違えるような佇まいになった。整備された都市基盤は、また、粋 を集めた都市デザインの美しさでも注目を集め、まさに未来への資産に



センター北駅周辺



中川駅周辺



匠歩道橋周辺 (上4枚の写真:都市基盤整備公団)



フォニックヒルズ (写真:田園都市出版)



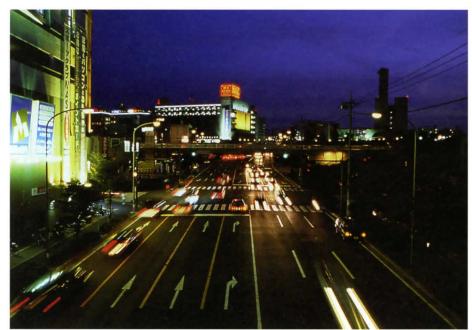
仲町台駅周辺 (写真:都市基盤整備公団)



けやきが丘団地 (写真:田園都市出版)



佐江戸北山田線、センター北駅近くの大擁壁。 大塚・歳勝土遺跡の保存のため設けられた、最大高 さ18mを超える大擁壁は、近代的な都市空間と歴史 を感じる空間との結節点を表現している。壁面に飾 られた曲線が、大擁壁の圧迫感を解消しており、列 柱の続く空間を抜けると、過去の歴史のひとこまで ある空間(遺跡公園)へと導入されるアプローチは歴 史の連続性を思わせる。(写真:田園都市出版)



中山北山田線、センター南駅前の通り (写真:都市基盤整備公団)



ビュープラザセンター北 (写真:都市基盤整備公団)

のびと体を伸ばし、青空の下での弁当開きに歓声をあ

自然豊かな空間を享受している。

休日には家族連れが軽いスポーツに、あるいはのび

やザリガニなども棲んでいる。

う。四季折々花が咲き、水辺には水鳥が飛来し、小魚 広々とした公園であり、全長15キロにも及ぶ緑道だろ

港北ニュータウンの人気の第一に上げられるのは、



谷公園付近 (写真:都市基盤整備公団)



山田富士公園 (写真:都市基盤整備公団)



都筑中央公園 (写真:田園都市出版)



中川八幡山公園 (写真:田園都市出版)



葛ヶ谷公園 (写真:田園都市出版)



せせらぎ公園 (写真:田園都市出版)



鴨池公園内にあるかもいけランド (写真:都市基盤整備公団)



大原みねみち公園 (写真:都市基盤整備公団)



牛久保公園 (写真:都市基盤整備公団)



大塚·歳勝土遺跡公園 (写真:都市基盤整備公団)



くさぶえのみち (写真:都市基盤整備公団)



山崎公園 (写真:都市基盤整備公団)



早渕公園 (写真:田園都市出版)

ニュータウン地区の主な公園・緑道





茅ヶ崎公園プール (写真:都市基盤整備公団)



茅ヶ崎公園 (写真:都市基盤整備公団)





牛久保農業専用地区では二人の方がみかん園を経 営、毎年秋の収穫時にみかん狩りを行い、幼稚園 の子どもたちや家族連れで賑わっている。 申し込みは電話で。

都筑みかん園ながさわ ☎ 045-911-2494 唐戸みかん園 2045-911-3938



牛久保農業専用地区



ふれあい朝市で卵を出品している方は二人、現地での直売も 行っている。

織茂養鶏場 ☎ 045 - 591 - 3428 平本養鶏場 2045-941-5137

売で販売、 産し、農協や市場に出荷しているほか、 潅水施設、 ハウスなどが整備されている。さまざまな農作物を生 鮮度が高く美味しいと消費者に喜ばれている。 ふれあい朝市や生産者直

タウン内には6ヵ所の農業専用地区があり、



東方農業専用地区 (このページの写真:田園都市出版)



池辺農業専用地区。後方に北部工場や都筑ふれあいの丘が見える。



継承される理念

記掲載の文は記念碑の写しである。 身の思いを傾けて事業に携わった人々の気概と誇りが高らかに謳いあげられている。下 る。その足元の記念碑には港北ニュータウン開発の理念と事業経過の概略が刻まれ、渾 都筑中央公園の丘の上に、太陽の光を受けてきらきらと輝くモニュメントが建ってい



等の保存緑地を緑道で結びつけたグリーンマトリックスシステムにより、他都 るまちづくり」の基本方針のもとに、自然地形や植生を残し、 チェンジの開設など、活気あるまちづくりが着実にその姿を現してきていま としての発展、さらには市営地下鉄三号線の開通、第三京浜道路都筑インター を重ね、幾多の困難を克服し事業を推進してきました。 団、横浜市は港北ニュータウン事業推進連絡協議会を通して熱心な討議と調整 題について地元四地区(中川、新田、都田、山内)協議会、住宅・都市整備公 竣工しました。 市にない緑豊かな都市景観を創り上げてきました。 ここに、文化の薫り高い活気あふれるタウンセンターを核に、二十一世紀を そして、「緑の環境を最大限に保存するまちづくり」、「ふるさとをしのばせ 今日、多くの企業の研究所などの立地、百貨店等の商業施設の進出、 この間、多機能複合都市を目指した土地利用計画の変更をはじめ、様々な課

住宅地

街となることを期待し、これを記します。 担う新都市としてこのニュータウンに住まい、集う全ての人々が誇りをもてる 中川住民協議会 横浜市港北ニュータウン事業推進連絡協議会 新田地区対策協議会 平成九年三月

横浜市 住宅·都市整備公団 都田地区対策協議会 山内地区対策協議会

四地区協議会、住宅・都市整備公団、横浜市の三者を表現しています。 る街・港北ニュータウンの実現を目指して、一体となって力を合わせてきた地元 円環を形づくっている、異なる表情を持つ三つの弧は、未来に向かって発展す 伸を行い、二十二年の永い歳月を要して平成八年九月の換地処分公告をもって 理念として、昭和四十年から始められた日本最大規模のまちづくり事業です。 初は昭和五十五年度竣工を目標としていましたが、その後三回の事業期間の延 昭和四十九年に住宅・都市整備公団施行として土地区画整理事業に着手し、当 し、住環境の整備された新しいまちを、市民参加のもとに建設することを基本 港北ニュータウン建設事業は、乱開発を未然に防止し、都市と農業が調和 この事業は、地元地権者のまちづくりへの決意と用地買収への協力により、

公園や集合住宅

新しい故郷への思い

これからこの地で生まれる子どもたちもいる。過去の歴史の上に、新たな歴史を刻み、 に進める街づくりを歌い上げている。 ふるさとを創っていくのはこれらの人々である。北山田にお住まいの男全冨雄さんは共 新しい街に多くの人々が移り住み、新旧住民の交流がさまざまな形で行われている。



誰もがみんな新住民

ニュータウンの縄文の住居跡の前は

誰もいなかった山、川

いずれからか先代は移り住みつき

現在も繰り返している

年代の差があるが

みんな移り住んできた住民

私も、先代は移り住んできた

昨日移り住んできた方も

昨年移り住んできた方も

先代が移り住んできた方も

みんな同じこの地に安住を定めた

平和は仲よく住むこと以外ない 移り住んできた者どおし

健康はなにより大事だが

心の病は人との付き合いと言葉から

笑顔で生涯終わりたい 責任を取り合い

貴方も私も新住民

(文・男全冨雄)

受療マナ子(と日日)、 受藤異(◆写真提供者(50音順・敬称略

牧野宏(佐江戸)、 鈴木孝晴(池辺)、 川上昇(牛久保東)、 岡本徳蔵(佐江戸)、 信田隆治(川和)、 田丸清(佐江戸)、 小林隆雄(牛久保)、 安藤マサ子(北山 三 (三 深川清治(茅ケ崎東)、 皆川健一(大棚)、森寛(大丸)、 土屋幸之助(北山田)、 関義和(勝田) 男全富雄(北山田 志田恒伸(佐江戸)、 黒須晃毅(佐江戸)、 安藤僎(北山 徳江義治(荏田)、並木誠久(佐江戸)、 夫(佐江戸)、田中孝長(茅ケ崎東)、 小島晴光(編集委員)、小島喜治(牛久保) 金子保(茅ケ崎)、 深川輝夫(茅ケ崎東)、古里秀一(葛が谷)、 菅沼義治(佐江戸)、 大久保正治(中川)、 山本光雄(新吉田 金子三千男(茅ケ崎)、 鈴木兼光(事務局)、 大矢安夫(荏田 東)、

◆協力機関・団体(順不同)

筑小、 えいフォトクラブ、都筑の森芸術劇場、 るさと歴史財団埋蔵文化財センター、東山田郷土資料館、 荏田東第一小、茅ケ崎小、中川西小、川和東小、茅ケ崎台小、北山田小、 国土交通省国土地理院、横浜市、 アイスタジオ、アニヴェルセル 川和小、 川和高、荏田高、新栄高)、港北都市開発センター、 つづきの丘小、東山田小、中川中、都田中、 折本小、 勝田小、 山田小、荏田小、すみれが丘小、 都筑区役所、 ヴィラョコハマ、 山田富士組、 都市基盤整備公団、 川和中、 田園都市出版 ムジカ・パストラーレ、 日本窯業史研究所、 横浜市歴史博物館、 茅ケ崎中、 都田西小、荏田南小、 公立学校(中川小、 在田南中、 南山田小、都 モザイク 横浜市ふ 中川

参考資料

·新編武蔵風土記稿第四巻』/雄山閣/昭和45年 『御大典記念都田村誌』/都筑郡都田村役場/昭和4年

佐江戸誌』/横浜市緑区佐江戸町内会/昭和57年

。古代のよこはま』/横浜市教育委員会/1986年

都筑の民俗』/港北ニュータウン郷土誌編纂委員会/平成元年

『港北ニュータウン四半世紀の都市づくりの記録』/住宅・都市整備公団港北開発局/昭和46年~平成9年 『港北ニュータウン縮刷版』第1号~第124号/横浜市都市計画局港北ニュータウン部/

◆協会設立20周年記念写真集刊行委員会(順不同・敬称略)

平成9年

内野正吾、岩澤一男、大矢安夫、地曳良夫、佐藤一夫、鈴木兼光金子保(委員長)、中西雅子(顧問)、小島喜治、金子三千男、男全冨雄、中村信男

◆編集委員(順不同)

安達智恵子 安達智恵子 安達智恵子 安達智恵子 (事務局)、山本薫(事務局)、小島晴光、続橋宏昭、大平晃司、和中美菜子、

はじめ、取材に応じて下さった関係各位

写真を寄せて下さった方々、資料提供

に、心からお礼申し上げます。

編集委員

同



まちづくり館 — (財)港北ニュータウン生活対策協会事務所 — (写真:鈴木兼光さん)

編集後記

世、一編の物語を作り上げました。 して未来へというテーマのもとに、多くの方々から寄せられた写真を綴り合わせ、一編の物語を作り上げました。 そこにはこの地に生きた人々の暮らしの断片、息遣い、そして造成から新都市建設へのエネルギー、新しい街での人々の交流が描き出されています。 なお、年代、場所の特定に多少の違いがあるかと思いますがご容赦くださいまがあるかと思いますがご容赦くださいます。

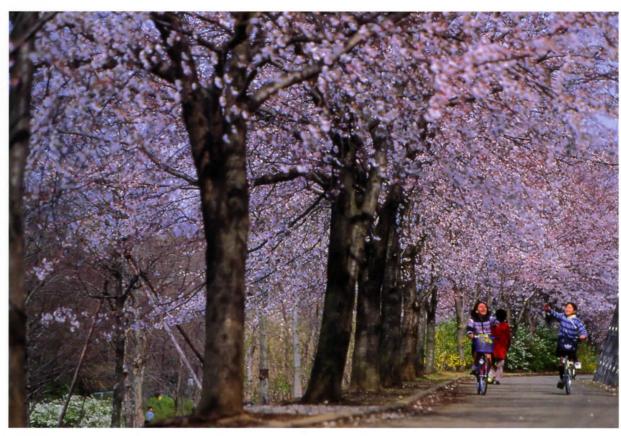
写真集 港北ニュータウン むかし・いま、そして未来へ…

★ 発 行/2002(平成14)年3月31日

発行者/協会設立20周年記念写真集刊行委員会/〒224-0006 横浜市都筑区荏田東四丁目10番3号 TEL 045-942-8745/FAX 045-942-8972

編集・制作/有限会社田園都市出版/〒216-0001 川崎市宮前区野川4162 ベルウッド野川401 TEL・FAX 044-798-7248 定 価 2,500円(税別)

※無断での複写・複製を禁じます。 ※乱丁・落丁の場合は刊行委員会までお送り下さい。送料当方負担でお取り替えいたします。





写真集 港北ニュータウン むかし・いま、そして未来へ・・・

発 行/2002(平成14)年3月 発行者/協会設立20周年記念写真集刊行委員会 定 価/2,500円(税別)

